

絶滅 (EX)

キバネマグソコガネ

鞘翅目 (コウチュウ目) コガネムシ科

Aphodius (Acanthobodilus) languidulus A. Schmidt

環境省 準絶滅危惧

- ❖ 形態 体長 5.0～7.2mm。体色長円形で光沢は鈍い。頭部、前胸背板は暗褐色で上翅は黄褐色。近縁種とはこの点で区別できる。
- ❖ 分布の概要 県内では盛岡市で 1950 年に記録がある。その後記録はなく近年の生息状況は不明。国内では広く分布していたが、激減し離島などに残存するのみ。
- ❖ 生息状況 5 月から 10 月にかけて放牧地の新鮮な牛糞に見られる。県内では 8 月に記録されている。記録の少なさから県内では元々局地的であったと考えられる。国内での状況から、県内でも絶滅したと推定される。
- ❖ 脅威 理由は不明だが、他の糞虫の減少と同様に牛糞形状の変化と草原の高文化が要因として大きいと考えられる。開発による生息可能草原の消失。
- ❖ 特記事項 過去 70 年ほど記録されていないことから、絶滅とした。
- ❖ 文献 1. 門前弘多 (1952)、2. 岡島秀治・荒谷邦夫 (2012)

(砂田 比左男)

絶滅 (EX)

ウスグロマグソコガネ

鞘翅目 (コウチュウ目) コガネムシ科

Aphodius (Gilletianus) comatus A. Schmidt

環境省 なし

- ❖ 形態 体長 3.0～4.3mm。体色は黄褐色で光沢をもつ。頭部、前胸背版、上翅会合部は黒みを帯びる。翅端部に短毛をそなえることで区別できる。
- ❖ 分布の概要 県内では滝沢市、宮古市に古い記録がある。国内では激減し九州と離島の一部に残存するのみ。
- ❖ 生息状況 4 月から 7 月にかけて放牧地の牛糞に見られる。本県では 5～6 月に記録されている。本種は記録の少なさから県内では元々局地的であったと考えられる。上記の場所で 1976 年に確認されて以降記録がなく、国内での状況から県内では絶滅したと推定される。
- ❖ 脅威 理由は不明だが、他の糞虫の減少と同様に牛糞形状の変化と草原の高文化が要因として大きいと考えられる。開発による生息可能草原の消失。
- ❖ 特記事項 過去 50 年ほど記録されていないことから、絶滅とした。
- ❖ 文献 2. 岡島秀治・荒谷邦夫 (2012)、3. 早川博文・千葉武勝 (1983)

(砂田 比左男)

絶滅 (EX)

ヒメキイロマグソコガネ

鞘翅目 (コウチュウ目) コガネムシ科

Aphodius (Subrinus) sturmi Harold

環境省 準絶滅危惧

- ❖ 形態 体長 3.0～4.3mm。小型のマグソコガネ。体形は細長く両側平行。全体は黄褐色で光沢がある。小型なことと体色で容易に区別できる。
- ❖ 分布の概要 県内では一関市に数例の古い記録がある。国内では激減し北海道の一部に残存するのみ。
- ❖ 生息状況 3～11 月にかけて放牧地の牛糞に見られる。本県では 8 月に記録されている。記録の少なさから県内では元々局地的であったと考えられる。1967 年に確認されて以降記録はなく、国内での状況から県内でも絶滅したと推定される。
- ❖ 脅威 理由は不明だが、他の糞虫の減少と同様に牛糞形状の変化と草原の高文化が要因として大きいと考えられる。開発による生息可能草原の消失。
- ❖ 特記事項 過去 50 年以上記録されていないことから、絶滅とした。
- ❖ 文献 2. 岡島秀治・荒谷邦夫 (2012)、3. 早川博文・千葉武勝 (1983)

(砂田 比左男)

絶滅 (EX)

ヤマキチョウ

鱗翅目 (チョウ目) シロチョウ科

Gonepteryx maxima Butler

環境省 絶滅危惧ⅠB類

- ❖ 形態 開張 65mm 位。翅表は雄では黄色、雌では淡い黄色。前翅の先端は鉤状に突出する。前後翅とも中室端に橙黄色の小紋がある。さらに前翅の前縁と外縁、後翅の後角や後縁が赤桃色である。スジボソヤマキチョウでは前翅の前縁が桃色にならない点、後翅径脈の太さ、その他の翅脈で区別できる。
- ❖ 分布の概要 県内各地から記録があった。国内では青森県南部と岩手県の他は関東地方東部、中部地方西部、静岡県中西部に分布する。
- ❖ 生息状況 年1回7月中旬～8月に発生し、成虫で越冬して翌春に幼虫の植樹であるクロツバラの芽に産卵する。孵化した幼虫は葉を食べて育ち食樹上で蛹化する。本種の採集記録は 1976 年滝沢村での記録以降はない。
- ❖ 脅威 既知産地の多くでは宅地化や赤松の植林、耕地化で食樹のクロツバラが失われていること。クロツバラは低地の疎林の中や林縁の陽地性の低木で県内にはこの条件を満たすところは各地に散在していて生存の可能性がある。
- ❖ 特記事項 ほぼ 50 年近く確認されていないので、A ランクから絶滅へ変更した。
- ❖ 文献 4. 加藤武夫 (菅原寛夫)・宮慶一郎 (1933)、5. 関田徳雄 (2017)、6. 黒滝敏文 (2003)
(成瀬 健一)

絶滅 (EX)

オオルリシジミ

鱗翅目 (チョウ目) シジミチョウ科

Shijimiaeoides divinus banrine (Leech)

環境省 絶滅危惧ⅠA類 (本州亜種)

- ❖ 形態 開張は 35mm 位。翅表は外縁を除いて光沢ある青藍色で、外縁は黒色であるが小黑紋に分離することもある。後翅外縁は細く黒色で、内側に小黑紋列がある。裏面は青灰色、前翅では外縁に沿って小黑紋列が3列並び内側にさらに黒紋が散在する。後翅外縁の黒紋列間に橙黄色の半月状紋列がある。
- ❖ 分布の概要 盛岡市の岩山、八木田、神庭山、黒石野、観武ガ原、新田町、手掛けの松、厨川、下米内と滝沢村の駅前、分レのほかに宮古市蜂ヶ沢に記録があった。国内では青森、福島、群馬の各県からの記録があったが、すでに絶滅したと見られている。新潟県、長野県ではごく少数発生するらしい。別亜種が九州の阿蘇・九重高原に産する。
- ❖ 生息状況 年1回成虫が5月下旬から6月中旬に発生し、マメ科のクララに産卵し幼虫はつぼみや花を食べて1カ月位で蛹化する。この間アリがまとわりつくが関係は不明、蛹はアリの巢の入り口近くで見つかる。宮古市では 1960 年、盛岡市では 1963 年が最後の記録である。その後、既知産地を中心に調査をしたが発見されていない。
- ❖ 脅威 盛岡周辺の生息地は住宅地、遊園地、ゴルフ場などに改変され、クララの生育できる環境ではなくなっている。クララは放置された草原では生育できず、牛馬の放牧によって他の植物が間引きされることが必要である。草原に対する火入れはその時期に蛹が土の中にいて影響がなく、むしろクララの生育には有効である。しかし、宮古市では大規模な山火事があって幼虫が死滅し、絶滅にいたっている。
- ❖ 文献 7. 岩手虫の会編 (1988)、8. 三浦秀明 (1986)、9. 平野修一 (1935)
(成瀬 健一)

絶滅危惧Ⅰ類 (CR+EN)

コバネアオイトトンボ

蜻蛉目 (トンボ目) アオイトトンボ科

Lestes japonicus Selys

環境省 絶滅危惧ⅠB類

- ❖ 形態 成虫は腹長 26～33mm、後翅長 18～22mm。胸部前面、腹部背面は金緑色を呈する。成熟雄は腹部第 9・10 節に白粉を生じる。雄尾部付属器、雌産卵管の形状で、近縁種と区別する。未熟個体の胸部は橙色を呈する。
- ❖ 分布の概要 盛岡市 (小岩 1965)、花巻市、盛岡市、一関市 (小岩 1986) から記録されているが、近年の記録は全く無い。東北地方全体でも、絶滅の危機に瀕している。国内では本州から九州まで局地的に分布する。
- ❖ 生息状況 1 年 1 世代で、平地から丘陵地にかけての抽水植物の多い湿地や池沼に生息する。成虫は夏季から秋季にかけて出現する。
- ❖ 脅威 開発による湿地や池沼の消失。
- ❖ 特記事項 東北地方の中では、岩手県のみ近年の生息情報が得られていない。
- ❖ 文献 10. 小岩勲 (1965)、11. 小岩勲 (1986)

(伊藤 智)

絶滅危惧Ⅰ類 (CR+EN)

カトリヤンマ

蜻蛉目 (トンボ目) ヤンマ科

Gynacantha japonica Bartenev

環境省 なし

- ❖ 形態 成虫は腹長 46～57mm、後翅長 42～50mm。複眼が大きく、胸部は羽化直後には淡褐色であるが、成熟するにつれ緑色に変化する。腹部は黒色で、成熟雄は腹部 2～3 節の斑紋が青色を呈し、成熟雌では緑色を呈する。
- ❖ 分布の概要 県内での近年の記録は無い。かつては盛岡市 (小岩 1980、佐竹 2001)、花巻市、盛岡市、一関市、宮古市、岩手沿岸 (小岩 1986)、北上市 (佐竹 2001) など、県内に広範囲に生息していたことが伺われる。東北地方全体でも絶滅の危機に瀕している。国内では本州から沖縄まで分布する。
- ❖ 生息状況 1 年 1 世代で、平地から丘陵地にかけての樹林に接した水田、湿地、池沼などに生息する。成虫は夏季から秋季にかけて出現し、主として薄暮時に摂食飛翔を行う。日中に林内で雄の探雌行動が見られるほか、秋季になり気温が低下してくると、日中に活動するようになる。
- ❖ 脅威 農地整備による乾田化や、開発による樹林と湿地、池沼の消失。
- ❖ 特記事項 東北地方で、近年の生息情報が得られているのは宮城県と福島県のみである。
- ❖ 文献 11. 小岩勲 (1986)、12. 佐竹邦彦 (2001)、13. 山本弘 (1954)、14. 小岩勲 (1980)、15. 朝比奈正二郎 (1968)

(伊藤 智)

絶滅危惧Ⅰ類 (CR+EN)

モリトンボ

蜻蛉目 (トンボ目) エゾトンボ科

Somatochlora graeseri Selys

環境省 なし

- ❖ 形態 成虫は腹長 35～41mm、後翅長 34～38mm。全身が金緑色を呈し、タカネトンボに良く似る。翅の基部が黄色を呈すが、タカネトンボにも黄斑が出現することもあり、同定には慎重を要する。
- ❖ 分布の概要 唯一久慈市 (朝比奈, 1968) から記録されており、これが南限の記録となる。青森県内においては古くから記録があり、東通村、六ヶ所村、七戸町、三沢市、八戸市などで確認されている。国内では北海道、青森、岩手に分布する。
- ❖ 生息状況 2～3年1世代で、平地から山地の樹林に囲まれた池沼に生息する。
- ❖ 脅威 開発による池沼の消滅。
- ❖ 特記事項 宮古市から幼虫の記録があるが、中齢で同定に問題があることから、本種の記録としては除外して考えるべきである。翅の基部に黄斑が出る個体は亜種 *aureola* (キバネモリトンボ) とされてきたが、変異が連続すること、DNA 解析でも明瞭な差がない (尾園ほか, 2012) ことから採用しなかった。青森県内においても、池沼の埋め立て、植生遷移による開放水面の消失により消滅した生息地がある。D ランクから絶滅危惧Ⅰに変更した。
- ❖ 文献 15. 朝比奈正二郎 (1968)、16. 尾園暁ほか (2012)

(伊藤 智)

絶滅危惧Ⅰ類 (CR+EN)

オオキトンボ

蜻蛉目 (トンボ目) トンボ科

Sympetrum uniforme (Selys)

環境省 絶滅危惧ⅠB類

- ❖ 形態 成虫は腹長 30～35mm、後翅長 31～39mm。大型のアカトンボで、体全体が橙色を呈し、翅も全体が薄い橙色となる。
- ❖ 分布の概要 県内での近年の記録は無い。盛岡市および一関市 (小岩 1980、小岩 1986) からの記録がある。国内では北海道 (飛来と思われる)、本州から九州まで分布する。
- ❖ 生息状況 1年1世代で、平地から丘陵地にかけての比較的大きな池沼に生息する。成虫は夏季から秋季にかけて出現し、未熟時は周辺の草地に移動する。成熟すると水域へ戻り、主として午前中に生殖活動を行う。東北地方および国内全域でも、絶滅の危機に瀕している。
- ❖ 脅威 池沼の浚渫や、開発による水域の消失および周辺草地の消失。
- ❖ 特記事項 近年も生息情報が得られている青森県においても、減少傾向は明らかである。
- ❖ 文献 11. 小岩勲 (1986)、14. 小岩勲 (1980)

(伊藤 智)

絶滅危惧Ⅰ類 (CR+EN)

カワラハンミョウ

鞘翅目 (コウチュウ目) オサムシ科

Chaetodera laetescrpta (Motschulsky)

環境省 絶滅危惧ⅠB類

- ❖ 形態 体長 16mm 内外。背面は緑色を帯びた暗灰色で青銅光沢をもつ。上翅は淡黄白色の斑紋をもち、斑紋の大きさは個体により変異が大きい。腹面は紫色光沢を示す。県内の産地ではコニワハンミョウが同所的に見られるが、大きさ、上翅斑紋形状などで区別できる。
- ❖ 分布の概要 盛岡市、花巻市大迫町、釜石市に記録がある。全国に分布するが近年各地で激減している。
- ❖ 生息状況 河川敷や砂浜海岸に生息する。盛岡市、花巻市の記録は太平洋戦争前の記録で以後の報告がない。近年では 2009 年に釜石市の海岸で、7 月から 9 月に多数確認された。その後 2011 年東日本大震災の大津波で生息地の海岸が消失し、その後付近の海岸など含めて確認されていない。絶滅の可能性が高い。
- ❖ 脅威 砂浜の環境改変。
- ❖ 特記事項 戦前の記録は、内陸にすぎ、環境も異なることから疑問である。
- ❖ 文献 17. 砂田比左男 (2010)、18. 上野俊一ほか (1985)、19. 竹内誠一 (1940)、20. 樋渡宏一 (NK 生) (1938)

(砂田 比左男)

絶滅危惧Ⅰ類 (CR+EN)

イワテセダカオサムシ

鞘翅目 (コウチュウ目) オサムシ科

Cychrus morawitzi iwatensis Nakane

環境省 絶滅危惧Ⅱ類

- ❖ 形態 体長 12~15mm。黒色でかすかな金属光沢を帯びる。前体部が細く後体部が強く拡がり、上翅は著しく凸隆し、粗く不規則で互いに合着する隆起で被われる。原名亜種とは細形で前胸の幅が狭く上翅肩部の発達が悪いことなどにより区別される。
- ❖ 分布の概要 宮古市茂市の山地のみに局所的に産す。原名亜種は北海道に分布する。
- ❖ 生息状況 生息地はミズナラ自然林である。後翅が退化して飛翔力を失い、林床の落葉下や石下などで地表生活をしている。分布域は極めて限定されており、生息密度も低い。現在も上記産地に生息していることを確認している。
- ❖ 脅威 森林伐採による生息環境の改変および採集圧。これまで土捨て場や送電線設置による生息地破壊の危機があったが、最近も当地域で森林の伐採が計画されていることは懸念される。
- ❖ 特記事項 本亜種はセダカオサムシの岩手亜種。岩手県希少野生動植物指定種。県による生息調査や監視活動が行われている。
- ❖ 文献 21. 中根猛彦 (1989) 154. 三浦秀明 (1988)

(吉田 勝一)

絶滅危惧Ⅰ類 (CR+EN)

オオアオグロヒラタゴミムシ

鞘翅目 (コウチュウ目) オサムシ科

Paranchodemus calleides (Bates)

環境省 なし

- ❖ 形態 体長 11mm 内外。青藍色をおびた黒色で、頭と前胸は比較的細くやや縦長である。翅鞘は条溝があり、前方は方形、後方は丸いが後端で多少角張る。
- ❖ 分布の概要 盛岡市と奥州市の北上川河畔で記録された。本種の分布域は東北 6 県、新潟県、石川県、長野県であるが、秋田県以外では少なく記録も古いものが多い。
- ❖ 生息状況 平野部から山間にかけて河原の礫地に生息し、成虫は石下から発見される。秋田県では雄物川と米代川水系の広い範囲で採集されている。今回、米代川上流部や北上川水系の雫石川等で調査を行ったが、確認されなかった。上記の記録以後、1 世紀余の間報告がないことになる。
- ❖ 脅威 都市化やダム建設に伴う河川環境の変化。例えば雫石川では低水敷の礫地がツルヨシ等の群落に変化した場所が多く、礫地が残っている場合も礫間に砂泥が溜まり、本種の生息には不適と考えられた。
- ❖ 特記事項 19 世紀末に北上川河畔で採集された標本に基づき命名された。生息可能な環境の減少が著しいことから、B ランクから絶滅危惧Ⅰ類に変更した。
- ❖ 文献 22. Bates H. W (1883)、23. 笠原須磨生 (1985)、24. 佐藤福男 (2023)

(伊達 功)

絶滅危惧Ⅰ類 (CR+EN)

マルコガタノゲンゴロウ

鞘翅目 (コウチュウ目) ゲンゴロウ科

Cybister (Cybister) lewisianus Sharp

環境省 絶滅危惧ⅠA類

- ❖ 形態 体長 24mm 前後。体型はタマゴ型。上翅の色は深緑を帯びた黒褐色で光沢があり、体側縁には黄色の細い縁取りがある。
- ❖ 分布の概要 北上市と一関市で生息が確認されていた。国内では九州以北の 18 府県から記録があるが、生息池は極めて少なく、さらに減少傾向にある。
- ❖ 生息状況 平地や丘陵の池沼。ヒシ・カンガレイ・ヒルムシロ等、水生植物の豊かな止水系に生息する。水生昆虫・小型魚類・両生類・甲殻類などを捕食する。2002 年に北上市の溜池で本県での生息が初めて確認された。一関市ではウシガエルの侵入により絶滅したもよう。
- ❖ 脅威 外来種 (ブラックバス・ブルーギル・アメリカザリガニ・ウシガエル) や養鯉。溜池の利用放棄による池の埋め立て。
- ❖ 文献 25. 佐竹邦彦 (2003)、26. 森正人・北山昭 (2002)、27. 三田村敏正ほか (2017)

(成瀬 健一)

絶滅危惧Ⅰ類 (CR+EN)

ハマベオオハネカクシ

鞘翅目 (コウチュウ目) ハネカクシ科

Hadropinus fossor Sharp

環境省 なし

- ❖ 形態 体長 16～23mm。大型のハネカクシ。大きな牙を持ち、頭部と前胸部は黒褐色で、上翅と腹部、脚は茶褐色。海岸性で、他に同定に困る種はいない。
- ❖ 分布の概要 県内では山田町と陸前高田市から記録されている。国内では北海道と本州の青森県と岩手県に分布する。本県が分布の南限である。
- ❖ 生息状況 海浜性で砂浜に生息し、3月から見られ海藻などの漂着が多くなる5月から7月に多い。主に夜間に活動し、波打ち際でヨコエビなどを捕食する。昼間は漂着物下に見られることがあるが少ない。東日本大震災の大津波後も確認できたのは山田町のみで、最南端の産地となる陸前高田市では全く確認できない。
- ❖ 脅威 砂浜海岸の環境改変。
- ❖ 特記事項 新産地は見つからず、産地も減少したため、絶滅危惧Ⅱ類から絶滅危惧Ⅰ類へ変更した。
- ❖ 文献 18. 上野俊一ほか (1985)、28. 高橋泰美 (1990)、29. 三浦秀明・中村裕之 (1985)
(砂田 比左男)

絶滅危惧Ⅰ類 (CR+EN)

ツヤケシマグソコガネ

鞘翅目 (コウチュウ目) コガネムシ科

Aphodius (Nipponaphodius) gotoi Nomura & Nakane

環境省 絶滅危惧Ⅱ類

- ❖ 形態 体長 4.5～5.0mm。体形は長円形。背面は鈍い暗褐色で、頭部を除き微細顆粒が発達し光沢を欠く。県内には他に間違える種はいない。
- ❖ 分布の概要 県内では大船渡市の二地域から記録されている。国内では北海道、本州に分布する。日本固有種。
- ❖ 生息状況 本種はダイコクコガネの育児巣内の糞球に産卵し盗食寄生する特殊な生態をしているため、分布は極めて局地的である。ダイコクコガネの全国的な減少に伴い、過去数十年国内の記録は本県の記録以外ほぼない。7月から10月にかけてライトトラップで主に採集され、他にシカ糞から1例、地下の糞球から1例が記録されている。既知産地ではダイコクコガネの消失の伴い、2014年以降は確認されていない。
- ❖ 脅威 牛の飼養形態の変化による、牛糞形状の変化と草原の高丈化によるダイコクコガネの減少。太陽光発電、風力発電等の開発による生息可能草原の消失。
- ❖ 特記事項 本種の生息にはダイコクコガネの存在が絶対条件であるため、その保全が重要である。
- ❖ 文献 2. 岡島秀治・荒谷邦夫 (2012)、30. 砂田比左男 (2010)、31. 砂田比左男 (2011)、32. 塚本圭一ほか (2009)、33. 塚本圭一ほか (2019)
(砂田 比左男)

絶滅危惧Ⅰ類 (CR+EN)

ヒメコマグソコガネ

鞘翅目 (コウチュウ目) コガネムシ科

Aphodius (Phalacrothous) botulus Balthasar

環境省 なし

- ❖ 形態 体長 2.8～3.5mm。小型のマグソコガネ。体色は黒から黒褐色で、体表には点刻を密にまとい光沢は鈍い。上翅肩部と翅端部に赤色斑を持ち、後胸腹板に点刻を持つことで近縁種と区別できる。
- ❖ 分布の概要 盛岡市と大船渡市、遠野市に記録がある。国内分布は特異で、岩手県、奈良県のみ分布する。
- ❖ 生息状況 条件の良い、草丈の低い芝地状の草原に5月中旬から6月中旬の短期間だけに見られる。草丈が高い草原には産しない。主にシカ糞に見られ、他の糞虫に分解され、フレーク状となり下土と混じる部分に多い。大船渡では二地域で記録されているが、一方は太陽光発電基地の建設により消滅。もう一方は草原の植生遷移が進み、生息環境が悪化し個体数が激減している。今回新たに少数確認された遠野市でも植生遷移が進行中の草原で見つかった。
- ❖ 脅威 草丈の低い草原の減少と、太陽光発電や風力発電等の開発による生息可能草原の消失。
- ❖ 特記事項 新産地も見つかったが、産地は局地的で個体数も減少しているため、絶滅危惧Ⅱ類から絶滅危惧Ⅰ類へ変更した。
- ❖ 文献 2. 岡島秀治・荒谷邦夫 (2012)、30. 砂田比左男 (2010)、34. 吉田信代 (2009)

(砂田 比左男)

絶滅危惧Ⅰ類 (CR+EN)

セマルオオマグソコガネ

鞘翅目 (コウチュウ目) コガネムシ科

Aphodius (Teuchestes) brachysomus Solsky

環境省 情報不足

- ❖ 形態 体長 7.5～11.0mm。大型のマグソコガネ。体形は長円形で膨隆し、体色は無毛でややツヤのある黒色。小盾板が特徴的で上翅の1/3程の長さで大きい。県内に他に間違える種はいない。
- ❖ 分布の概要 県内では主に県北部に記録がある。近年では大船渡市の二地域で確認されている。国内では広く分布していたが激減し、北海道と九州の一部に残る。
- ❖ 生息状況 明るい草丈が低い芝地状の草原の牛・シカ糞に見られる。県内では5月から6月の短期間現れる。産地も局地的で個体数も少ない。近年確認された大船渡市では放牧の中止と太陽光発電基地の開発で産地が消滅し、2013年を最後に見られなくなった。現在確認できる産地は知られていない。
- ❖ 脅威 牛糞の形状変化と草原の高文化。開発による生息可能草原の消失。
- ❖ 特記事項 現在確認できる産地は知られておらず、近年も大船渡市以外知られていないため、絶滅危惧Ⅰ類として新たに追加した。
- ❖ 文献 2. 岡島秀治・荒谷邦夫 (2012)、3. 早川博文・千葉武勝 (1983)、30. 砂田比左男 (2010)

(砂田 比左男)

絶滅危惧Ⅰ類 (CR+EN)

ダイコクコガネ

鞘翅目 (コウチュウ目) コガネムシ科

Copris (Copris) ochus (Motschulsky)

環境省 絶滅危惧Ⅱ類

- ❖ 形態 体長 18～30mm。日本最大の糞虫。体は黒色で光沢は鈍い。♂は頭部に、後方に曲がった長い角を持ち、前胸に一对の前方に突き出た突起を持つ。♀では板状の突起となり、前胸部はなめらか。近縁種とは前胸背板前角の形状と、前胸背板中央の縦溝は不明瞭であることで区別できる。
- ❖ 分布の概要 県内各地に分布していたが、現在確実に生息を確認できる場所は知られていない。国内では北海道、本州、九州に分布するが、産地は激減している。
- ❖ 生息状況 牛など大型の飼育動物の糞に大きく依存している。かつては県内各地にみられたが、激減し限られた草丈の低い芝地状の放牧地だけで見られていた。近年では大船渡市で牛・シカ糞に多数見られたが、放牧の中止、太陽光発電基地開発による生息地の消滅、シカの生息密度減少などにより 2014 年以降確認できない。大船渡市の市街地では灯火に飛来したと推測される個体が 2018 年に採集されたが、発生地は不明である。少なくとも県南地域では新たな生息地を確認していない。
- ❖ 脅威 飼養形態の変化による牛糞形状の変化が生息に影響している。本種は草丈の低い草原を好むため芝型放牧地の維持も重要であり、放牧地放置の影響も大きい。また近年では太陽光発電、風力発電等の開発による生息可能草原が減少していること。
- ❖ 特記事項 現在確実に見られる産地がなく、新たな産地もみつかっていないため、絶滅危惧Ⅱ類から絶滅危惧Ⅰ類へ変更した。
- ❖ 文献 2. 岡島秀治・荒谷邦夫 (2012)、3. 早川博文・千葉武勝 (1983)、30. 砂田比左男 (2010)、32. 塚本圭一ほか (2009)、33. 塚本圭一ほか (2019) 33.1 後藤純子 (2020)

(砂田 比左男)

絶滅危惧Ⅰ類 (CR+EN)

オオトラカミキリ

鞘翅目 (コウチュウ目) カミキリムシ科

Xylotrechus (Ootora) villioni (Villard)

環境省 なし

- ❖ 形態 体長 21～27mm で日本産トラカミキリ族中の最大種。背面の毛は金黄褐色と黒色で、上翅に 5 本の金黄褐色帯をそなえる。前胸は中央付近で側方に強く張り出し巨大。触角や肢は短い。
- ❖ 分布の概要 北海道から九州まで広く分布するが生息密度は低く、野外で採集される機会は少ない。東北地方では局地的で、本県での確認は福島県に次ぎ 2 例目となる。
- ❖ 生息状況 オオシラビソ等の針葉樹を食樹とする。北上高地の一部では以前から食痕が目撃されていたが、最近になって初めて成虫の確認情報があつた (投稿準備中)。痕跡が比較的広範囲に認められるが、生息密度は非常に低いと推測される。
- ❖ 脅威 生息可能な地域は広く法的保護がなされているが、採集圧が高まる可能性もある。また、ニホンジカによる針葉樹稚樹の被害も将来の脅威となる可能性がある。
- ❖ 特記事項 成虫は発生木の高い樹冠部で活動するため、人目に触れにくい。新たに絶滅危惧Ⅰ類として追加した。
- ❖ 文献 35. 藤田宏ほか (2023)、36. 榎原寛ほか (1997)

(伊達 功)

絶滅危惧Ⅰ類 (CR+EN)

アカガネネクイハムシ

鞘翅目 (コウチュウ目) ハムシ科

Donacia (Donaciomima) hirtihumeralis Y. Komiya & Kubota

環境省 準絶滅危惧

- ❖ 形態 体長 6.5～9.2mm。体背面は赤銅色のものが基本であるが、金ヶ崎町の個体群では青色型等の色彩変異に富むことが特筆される。体腹面は銅黒色。触角、肢は全体赤褐色である。前胸背板には顕著な剛毛を全面に密生する。
- ❖ 分布の概要 金ヶ崎町と一関市に局所的に分布する。本県と青森県、宮城県、模式産地である栃木県と茨城県に局地的に分布する。日本固有種。
- ❖ 生息状況 平地～低山地の池沼を含む湿原環境に生息する。一般に食草はフトイとされるが、本県ではオオフトイが食草と考えられる。生息範囲は狭いが、近年まで比較的多数の個体が認められていた。しかし金ヶ崎町の溜池では、今回の調査期間中の3年間にわたって水抜きが行われ、個体の確認はできなかった。一関市の生息地では生息情報が得られた。
- ❖ 脅威 生息地が人工の溜池に限定されており、浚渫や改修等の工事、管理不足による水面の減少等が脅威となる。
- ❖ 特記事項 金ヶ崎町の個体群が色彩変異に富む特異な個体群であること、その生息地の環境変化が著しいことを踏まえ、Bランクから絶滅危惧Ⅰ類に変更した。
- ❖ 文献 37. 菊池恭司・菊池透 (2008)、38. 高橋泰美 (1992)、39. 高橋泰美 (1989)、39.1. 高野祐晃 (2011) 39.2. 末永・山下 (2009)

(伊達 功)

絶滅危惧Ⅰ類 (CR+EN)

オオヨモギハムシ

鞘翅目 (コウチュウ目) ハムシ科

Chrysolina (Apterosoma) angusticollis (Motschulsky)

環境省 なし

- ❖ 形態 体長 7～11mm、体色は一般に黒青色だが変異が大きい。上翅肩部は隆起せず、表面は網目状の刻印を装い、点刻は列状をなさない。後翅は退化する。前胸背板は側方に顕著な縦溝を有する。
- ❖ 分布の概要 早池峰山のみで知られている。国内では北海道と本州北部に分布する。本種を含むオオヨモギハムシ種群は、少なくとも10の形態群に分けられ、本県産は秋田県産とともに「形態群D」とされるが極めて局所的で、種群の分布南限となっている。
- ❖ 生息状況 今回の調査では8月に少数の個体を確認したのみで、生息数は非常に少ない。かつては比較的広く生息していたが、刈り払いやシカの食害により減少した。オオヨモギハムシ種群の食草は、ヨブスマソウ、ハンゴンソウ等のキク科草本のほか、サラシナショウマ等が記録されている。今回はナガバキタアザミとエゾゴマナから確認された。
- ❖ 脅威 生息地は法的に保護されているが、近年ニホンジカの増加による植生の変化が著しい。特に、本種が食草とする可能性があるカニコウモリの食害が広い範囲で見られた。
- ❖ 特記事項 前回の改定では、生息地が特別保護区に指定されているため、Dランクに変更した経緯がある。しかし、今回の改定では食草の減少が著しいことを考慮し、ランクDから絶滅危惧Ⅰ類に変更した。
- ❖ 文献 19. 竹内誠一 (1940)、40. 雛倉正人・高橋泰美 (1992)、41. 齋藤諭 (2012)

(伊達 功)

絶滅危惧Ⅰ類 (CR+EN)

ハヤチネトガリヤマゾウムシ

鞘翅目 (コウチュウ目) ゾウムシ科

Acanthalophus shigematsui Morimoto

環境省 なし

- ❖ 形態 体長 6.3～6.6mm、オスは未知。体は灰褐色の鱗片で被われ、上翅に斜めの暗褐色帯と不規則な紋がある。上翅先端前の突起は強固で背面から見ると円錐形、上翅を越えて伸長する。
- ❖ 分布の概要 早池峰山の特産種。トガリヤマゾウムシ属は日本特産で、東北地方の高山に4種が分布する。
- ❖ 生息状況 1981年に採集されたメス3個体に基づき、2015年に記載された。それ以降、今回の調査を含め探索が続けられているが、再確認できていない。
- ❖ 脅威 採集場所付近は、車道の拡張等により環境が変化した。生息が予想される地域全体では、ニホンジカの影響が脅威となる。ただし近縁種で食樹とされるハナヒリノキはニホンジカの嗜好植物であり、今後を注視していく必要がある。
- ❖ 特記事項 多くの調査にも関わらず、再確認できないことから、絶滅危惧Ⅰ類として新たに追加した。ただし、より広範囲の調査や夏季以外の調査により再確認される可能性はある。
- ❖ 文献 42. 佐藤隆志 (2016)、43. 森本桂ほか (2015)

(伊達 功)

絶滅危惧Ⅰ類 (CR+EN)

チャマダラセセリ

鱗翅目 (チョウ目) セセリチョウ科

Pyrgus maculatus (Bremer et Grey)

環境省 絶滅危惧ⅠB類

- ❖ 形態 開張 32mm 位。翅表は黒褐色で前翅に大小の白紋があり、後翅中央近く2列の白紋列がある。前後翅共に前縁は交互に黄白色と褐色である。裏面は前翅では淡い黒褐色、後翅では灰褐色でそれぞれに表と同じような配置の白紋がある
- ❖ 分布の概要 古い一関市の記録のほかに盛岡市と宮古市以北の記録がある。国内では北海道、本州、四国に分布する。
- ❖ 生息状況 成虫は6月ごろに発生し幼虫の食草であるキジムシロ、ミツバツチグリ・クマイチゴに産卵する。孵化した幼虫は葉を綴って巣を作りその葉を食べるので、巣を造り変えながら成長する。ふつうは巣内で蛹化するらしい。県内でも一部地域でまれに年に2回発生する。最近、既知産地で全く確認されていないことは注目される。
- ❖ 脅威 かつての分布地が採草地になって牧草が密生し、または管理がなされず灌木が茂って食草が減少すること。
- ❖ 文献 7. 岩手虫の会編 (1988)、44. 坂神泰輔・吉田信代 (2004)

(成瀬 健一)

絶滅危惧Ⅰ類 (CR+EN)

ホシチャバネセセリ

鱗翅目 (チョウ目) セセリチョウ科

Aeromachus inachus (Ménétrières)

環境省 絶滅危惧ⅠB類

- ❖ 形態 開帳 26mm。翅の表面の地色は黒褐色、前翅の外縁に沿って7～8個の白紋列がある。裏面はやや黄色、前翅には表面にある白紋列の外側にも白紋列がある。後翅には外縁に平行の灰白色紋列があり、翅脈は灰黄色で表面よりはっきりしている。
- ❖ 分布の概要 県内各地から記録されているが極めて局所的に分布する。国内では本州に分布する。
- ❖ 生息状況 成虫は年1回、7月中旬～8月中旬に発生し、幼虫の食草であるオオアブラススキの葉の裏に産卵する。幼虫は葉を巻いた巣の中にいて時に出て葉を食べる。幼虫で越冬し、翌春葉を食べて成長し蛹化する。オオアブラススキの生育する草原や林縁を好む蝶であるがかなり少なくなっている。
- ❖ 脅威 既知産地の食草のオオアブラススキの生育する樹木を交えた自然草原の多くが、放牧地や採草地に転換していること。
- ❖ 特記事項 前回調査時より更に減少しているので、Bランクから絶滅危惧Ⅰ類に変更した。
- ❖ 文献 45. 平野俊秀 (2011)

(成瀬 健一)

絶滅危惧Ⅰ類 (CR+EN)

キマダラルリツバメ

鱗翅目 (チョウ目) シジミチョウ科

Spindasis takanonis (Matsumura)

環境省 準絶滅危惧

- ❖ 形態 開張 35mm。翅表は暗褐色で裏面の斑紋が透過して暗色紋になる。裏面は淡黄色で褐色の数条の縦紋がある。後翅の後角に表裏ともに褐色紋があり、それに続く尾状突起は2本である。
- ❖ 分布の概要 陸中海岸の久慈市から気仙郡の間のほか、古くは県中央部でも記録がある。国内では岩手県、福島県と関東地方、中部地方、近畿、中国地方に分布する。
- ❖ 生息状況 6月中旬に発生した雌は古木の幹のくぼみ、樹皮の割目、枝の分岐等に産卵する。孵化した幼虫は移動して樹皮下や腐朽部に営巣しているハリブトシリアゲアリの巣の中でアリから口移しに餌を与えられて育つ。幼虫の腹節に蜜腺がありその分泌物をアリは吸っている。幼虫で越冬して蛹化する。
- ❖ 脅威 共生するハリブトシリアゲアリは古木が生活の場で、その樹種は県内ではクワとキリであるが、生活環境の変化で無用となり最近古木が伐採されていること。
- ❖ 特記事項 地理的変異の多い種であり、他から隔離されている本県産は北限の個体として重要である。
- ❖ 文献 7. 岩手虫の会編 (1988)、46. 砂田比左男 (1992)、47. 平野俊秀 (2014)

(成瀬 健一)

絶滅危惧Ⅰ類 (CR+EN)

ゴマシジミ

鱗翅目 (チョウ目) シジミチョウ科

Maculinea teleius ogumae (Matsumura)

環境省 準絶滅危惧 (北海道・東北亜種)

- ❖ 形態 開張 40mm 内外。翅表は灰青色で外縁は黒褐色となり内側に黒紋列がある。裏面は褐色で前翅に 2 列の黒紋列、後翅に 3 列の黒小紋列と黒紋が散在する。個体変異が多い。
- ❖ 分布の概要 盛岡市、滝沢市、雫石町、洋野町、久慈市、野田村から記録されている。本亜種は国内では北海道、本州の青森県と岩手県に分布する。また別亜種が本州の中部地方と中国地方、九州に分布する。
- ❖ 生息状況 年 1 化で、7 月下旬～8 月に出現した成虫はナガボノシロワレモコウの花穂に産卵する。幼虫は花穂を食べて育ち、その後クシケアリの一種のアリの巣に入りアリの幼虫を食べて成長する。雫石町の生息地は既に消失し、洋野町の生息地も土地造成やソーラー発電の設置などにより大部分が消失している。
- ❖ 脅威 土地造成などによる生息地の消失。ヨシや灌木の侵入による食草のナガボノシロワレモコウの衰退。
- ❖ 特記事項 本亜種は北海道・東北亜種。岩手県希少野生動植物指定種。一部の個体群については県による生息地保全の作業が経年的に行われている。
- ❖ 文献 48. 吉田勝一 (2006)、49. 吉田勝一 (2008)

(吉田 勝一)

滅危惧Ⅰ類 (CR+EN)

オオウラギンヒョウモン

鱗翅目 (チョウ目) タテハチョウ科

Fabriciana nerippe (C. & R. Felder)

環境省 絶滅危惧ⅠA類

- ❖ 形態 開張 70mm 位。翅表の地色は雄では橙黄褐色、雌ではすこし暗色でいずれも多く黒色紋がある。外縁には 3 列の黒紋が並んでいる。前翅裏面は淡色で黒紋がある。後翅裏面には多数の銀白色の点状紋がある。
- ❖ 分布の概要 盛岡市、宮古市北部から記録があった。また、八幡平市で大量に発生した記録があるが、その後確認されていない。国内では本州、四国、九州に分布する。
- ❖ 生息状況 成虫は 7 月に出現し、9 月ころ産卵する。幼虫で越冬し、翌春からスミレをたべる。県内でここ数十年記録されていない。スミレは普遍的な草本であるので、本種は絶滅していないと思われる。
- ❖ 脅威 成長にはかなりの量のスミレが必要である、何らかの要因でスミレの生存が脅威を受けていることが本種の減少の要因になっている。
- ❖ 文献 7. 岩手虫の会編 (1988)、50. 白水隆 (2006)

(成瀬 健一)

絶滅危惧Ⅰ類 (CR+EN)

フタスジチョウ

鱗翅目 (チョウ目) タテハチョウ科

Neptis rivularis (Scopoli)

環境省 なし

- ❖ 形態 開帳 50mm。翅の表面の地色は黒色、前翅の翅端に数個の白紋が斜めに並列し、中室の前方にも白紋が斜めに並列する。中室内にも白紋がある。後翅には長方形の白紋の連続に依る白帯がある。裏面の地色は栗色で白紋は表面と変わらない。
- ❖ 分布の概要 盛岡市と宮古市を結ぶ線の北側から記録があったが近年は少なくなった。国内では北海道、本州に分布する。本州の分布は不連続である。
- ❖ 生息状況 6月頃成虫が羽化する。幼虫の食草はアイズシモツケ、イワシモツケ、ユキヤナギで葉に袋状の巣をつくり、出て周囲の葉を食べて育つ3令で越冬し翌春に更に葉を食べて蛹化する。各地の既知産地で発生数は減少傾向にある。
- ❖ 脅威 シモツケ類の生育する崖状の露岩地がコンクリート等で整備されることによって、食草が絶滅する場所がかなりあること。更に変異の研究材料として老熟幼虫とか蛹の時に多数採集されていること。
- ❖ 特記事項 前回調査時より更に減少しているので、Bランクから絶滅危惧Ⅰ類に変更した。
- ❖ 文献 51. 平野修一・平野俊秀 (1980)、52. 奥昭夫 (2000)、53. 平野俊秀 (2007)

(成瀬 健一)

絶滅危惧Ⅰ類 (CR+EN)

クロヒカゲモドキ

鱗翅目 (チョウ目) タテハチョウ科

Lethe marginalis (Motshulsky)

環境省 絶滅危惧ⅠB類

- ❖ 形態 開張 60mm 位。翅は茶褐色、前翅表面の淡色帯や小眼状紋は不明瞭、後翅の外縁近くに4個の眼状紋がある。前翅裏面の斜帯は明瞭で3個の小眼状紋がある。後翅裏面にも眼状紋がある。前後翅共に外縁に淡色の波状線がある。他のヒカゲチョウとは前翅裏面に3個の眼状紋があり、下の紋が大きい事で区別できる。
- ❖ 分布の概要 東北地方では本県の宮古市、岩泉町、田野畑村から記録されているのみで、その他に関東地方から南の本州、四国、九州に分布する。
- ❖ 生息状況 7月下旬～8月上旬に成虫が出現する。樹液のほかに落果、牛糞に来て吸液をする。樹林内にいるが夕方に沢筋に出て来る。幼虫の食草はイネ科とカヤツリグサ科でその葉裏に産卵する。孵化した幼虫は葉を食べて成長し、草の根元や石の下などで越冬する。翌春再び摂食して葉裏で蛹化する。県内では偶然的に少数が採集されていて生態など生息状況が不明な点が多く、1982年以降の採集記録がなく、絶滅に向かっていると思われる。
- ❖ 脅威 既知産地では草原の樹林化が進み、ススキ原が見られなくなっている。
- ❖ 文献 7. 岩手虫の会編 (1988)、54. 佐竹邦彦他 (1982)

(成瀬 健一)

絶滅危惧Ⅰ類 (CR+EN)

ミツモンケンモン

鱗翅目 (チョウ目) ヤガ科

Cymatophoropsis trimaculata (Bremer)

環境省 絶滅危惧ⅠB類

- ❖ 形態 開張 30～38mm。前翅の地色は黒褐色で3個の丸い橙色紋がある。
- ❖ 分布の概要 軽米町、滝沢市、盛岡市、一関市から記録されている。国内では青森県、岩手県、栃木県、群馬県、長野県に稀産する。
- ❖ 生息状況 食樹はクロツバラとクロウメモドキである。盛岡市とその周辺で得られた標本は6月末から9月上旬に及んでいる。盛岡市では1935年と1943年にかなりの個体が採集されているが、その他の場所では1970年代までに少数が記録されているのみであった。その後1998年に一関市の北上川河畔から記録され、20数年ぶりに生息が確認された。
- ❖ 脅威 食樹が生育する湿地が河川改修などにより消滅すること。
- ❖ 文献 55. 土井信夫 (2005)

(吉田 勝一)

絶滅危惧Ⅰ類 (CR+EN)

ノシメコヤガ

鱗翅目 (チョウ目) ヤガ科

Sinocharis korbae Püngeler

環境省 絶滅危惧ⅠA類

- ❖ 形態 開張 38～43mm。純白の地色に藍色の斑紋を有し、色彩が極めて特徴的である。
- ❖ 分布の概要 野田村と盛岡市に記録がある。県外では青森県からのみ知られている。
- ❖ 生息状況 寄主植物はダリヤ。成虫は年1化で、5～7月にかけて出現する。盛岡市では市街地とその周辺部に多く、深山や樹林帯で採集されたことはない。1965年に盛岡市で採集されて以降50年以上確認されておらず絶滅した可能性が高い。しかし青森県では1975年までの記録があり、再発見の探索が必要であろう。
- ❖ 文献 55. 土井信夫 (2005)、56. 本間健平・奥俊夫 (1995)

(吉田 勝一)

絶滅危惧Ⅰ類 (CR+EN)

オガサワラヒゲヨトウ

鱗翅目 (チョウ目) ヤガ科

Dasypolia fani Staudinger

環境省 絶滅危惧ⅠB類

- ❖ 形態 開張 40mm 前後。前翅は茶褐色で波状の横紋がある。雄の触角は短い櫛歯状。
- ❖ 分布の概要 久慈市、二戸市浄法寺町、岩手町、滝沢市、盛岡市に記録がある。県外では宮城県、山形県、栃木県、群馬県、長野県に稀産する。
- ❖ 生息状況 寄主植物は不明。成虫は10～12月に都市周辺の林縁部で採集されている。近年では久慈市で1986年に、盛岡市では1992年と1996年に確認された。
- ❖ 特記事項 本県が最初の発見地であり、和名は標本を提供した小笠原貞蔵氏に由来する。
- ❖ 文献 55. 土井信夫 (2005)、57. 木村尚史 (2018)

(吉田 勝一)

絶滅危惧Ⅱ類 (VU)

マダラヤンマ

蜻蛉目 (トンボ目) ヤンマ科

Aeshna mixta soneharai Asahina

環境省 準絶滅危惧

- ❖ 形態 成虫は腹長 42～51mm、後翅長 39～46mm。小型のヤンマで、雄は成熟すると複眼と腹部斑紋が青色となり、雌は青色となる個体と緑色になる個体の 2 型がみられる。
- ❖ 分布の概要 山田町船越 (山本 1954、枝・朝比奈 1965)、盛岡市、安比川 (小岩 1980)、八幡平市・盛岡市 (小岩 1968)、一関市・盛岡市 (小野・中塩 1979)、宮古市 (伊藤 1984)、陸前高田市 (伊藤 2002)、盛岡市 (佐々木ほか 2022)、雫石町 (佐々木ほか 2023) などの記録があり、他に大槌町、釜石市でも確認している。内陸及び沿岸部中部～南部に広範囲に生息しているが、産地は限定される傾向にある。国内では北海道から長野県南部まで局所的に分布する。
- ❖ 生息状況 1 年 1 世代で、平地から丘陵地にかけての抽水植物の繁茂する池沼に生息する。成虫は夏季から秋季にかけて出現し、成熟雄は植物群落上などでホバリングを交えた飛翔と静止を繰り返したり、抽水植物群落の内部や外縁に沿って飛翔しながら探雌する。
- ❖ 脅威 池沼の浚渫や、開発による溜池の消失。
- ❖ 特記事項 震災後の状況として、山田町船越では、生存は確認していたものの、生息場所が土捨て場として埋め立てられ絶滅した。また、釜石市吉浜の水田跡地では、農地復旧により絶滅した。本種成虫は好適な生息環境へと分布拡散するが、コアになる生息地の消滅は、本種の生息状況を一気に悪化させる恐れがある。
- ❖ 文献 11. 小岩勲 (1986)、13. 山本弘 (1954)、14. 小岩勲 (1980)、58. 伊藤智 (1984)、59. 伊藤智 (2002)、60. 佐々木全ほか (2022)、61. 佐々木全ほか (2023)、62. 枝重夫・朝比奈正二郎 (1965)、63. 小岩勲 (1968)

(伊藤 智)

絶滅危惧Ⅱ類 (VU)

タガメ

半翅目 (カメムシ目) コオイムシ科

Kirkaldyia deyrolli (Vullefroy)

環境省 絶滅危惧Ⅱ類

- ❖ 形態 体長 50～65mm。灰褐色で平たい。脚の先端に鋭い爪があり前脚は異様に発達する。日本最大の水生昆虫。
- ❖ 分布の概要 県内陸部に広く分布していたが、現在の生息地は北上市、奥州市、一関市周辺に限られる。全国各地に分布するが、いずれの地域でも急速に激減している。
- ❖ 生息状況 県内の水田地帯は広く中干しが行われるため、河川やため池に生息している。成虫は 7～8 月に活動する。県北では終戦後のかなり早い時期に姿を消した。県南でも近年生息が確認されたのは北上市、奥州市江刺・前沢、一関市などである。
- ❖ 脅威 河川改修やため池の埋め立て、放棄水田の増加などによる生息地の消失。
- ❖ 特記事項 特定第二種国内希少野生動植物種。
- ❖ 文献 64. 菊池恭司 (1985)、65. 高橋泰美 (1985)

(吉田 勝一)

絶滅危惧Ⅱ類 (VU)

オオメミズムシ

半翅目 (カメムシ目) ミズムシ科

Glaenocoris propinqua cavifrons (Thomson)

環境省 情報不足

- ❖ 形態 体長 7.9～8.6mm。背面は黄褐色で、前胸背と上翅に黒色斑紋があるが、全体に暗色。眼が大きく、顔面のくぼみは狭い。オス前脚跗節のペグ列は波打ち、基部～半分ほどまで。
- ❖ 分布の概要 ユーラシア北部～アメリカ北部に広く分布する種で、国内では岩手県八幡平から 2001 年に初めて報告された。
- ❖ 生息状況 寒冷地のあまり植物がない止水域を好むようである。八幡沼とガマ沼に生息するが、生活史や生息状況の詳細は不明な点が多い。
- ❖ 脅威 生息地は法的保護が図られているが、小面積の水域であり、水質や植生変化の影響を受けやすい。
- ❖ 特記事項 今回新たに絶滅危惧Ⅱ類として追加した。
- ❖ 文献 66. Hayasi M, Miyamoto S (2001)、67. 中島淳ほか (2020)

(伊達 功)

絶滅危惧Ⅱ類 (VU)

チシマミズムシ

半翅目 (カメムシ目) ミズムシ科

Arctocoris kurilensis Jansson

環境省 情報不足

- ❖ 形態 体長 7.8～9.4mm。背面は黄褐色。前胸背に約 11 本の黒色横帯、上翅に細かい黒色斑紋がある。オス頭部は突出し、顔面のくぼみは広い。オス前脚跗節のペグ列は中央で途切れる。
- ❖ 分布の概要 千島列島南部やロシア極東部から知られていた種で、国内では北海道大雪山と岩手県八幡平からの記録がある。最近秋田県仙北市からも記録された。
- ❖ 生息状況 寒冷地のあまり植物がない止水域を好むようである。八幡平の湖沼群（八幡沼、ガマ沼、蓬萊沼）は標高 1300～1590m であるが、秋田県では標高 435m のブナ林帯でライトトラップに飛来したという。
- ❖ 脅威 生息地は法的保護が図られているが、小面積の水域であり、水質や植生変化の影響を受けやすい。
- ❖ 特記事項 今回新たに絶滅危惧Ⅱ類として追加した。
- ❖ 文献 66. Hayasi M, Miyamoto S (2001)、67. 中島淳ほか (2020)、68. Hasegawa H, Hayashi M (1995)、69. 中川佳雅 (2024)

(伊達 功)

絶滅危惧Ⅱ類 (VU)

キバネツノトンボ

脈翅目 (アミメカゲロウ目) ツノトンボ科

Libelloides ramburi (MacLachlan)

環境省 なし

- ❖ 形態 成虫は体長約 23mm、後翅長 30mm 弱、体は黒色で長毛を密生、長い触角の先が急に太くなる。前翅は透明で基部は黄色、後翅は暗灰褐色に複雑な黄紋をそなえる。
- ❖ 分布の概要 軽米町、宮古市、盛岡市、滝沢市、紫波町、花巻市、遠野市、北上市、一関市から記録されている。国内では本州、九州に分布する。
- ❖ 生息状況 草地に生息し、成虫は日中に飛翔しよく目立つ。県内の生息場所は以前には村落や低地林縁の小規模草地であったようであるが、最近確認された盛岡市、滝沢市、紫波町、花巻市、遠野市の生息地の多くは河川堤防法面や市街地公園などの半自然草地である。
- ❖ 脅威 河川堤防や公園などの草地の改変および消失。
- ❖ 特記事項 新たに多数の生息地が確認されたので、A ランクから絶滅危惧Ⅱ類へ変更した。
- ❖ 文献 70. 成瀬健一 (2022)、71. 平野俊秀 (2015)、72. 平野俊秀 (2021)

(吉田 勝一)

絶滅危惧Ⅱ類 (VU)

ホソハンミョウ

鞘翅目 (コウチュウ目) オサムシ科

Cylindera (Cylindera) gracilis Pallas

環境省 絶滅危惧Ⅱ類

- ❖ 形態 体長 10mm 内外。黒に近い暗灰色で、前胸は細長く幅の約 2 倍、弱い金属光沢がある。胴も細長く、上翅は光沢を欠き、中央と後端の外縁に灰白色紋がある。
- ❖ 分布の概要 盛岡市、花巻市大迫町、奥州市から記録されている。国内では本州、四国、九州に分布。
- ❖ 生息状況 林縁や林間、耕作地などの裸地が混在する草地に生息する。1930 年代に奥州市胆沢区に比較的多く生息する場所があったらしい。近年の報告はなかったが、県南で生息情報が得られたほか、盛岡市内 2 箇所の公共施設敷地内における生息情報がある。
- ❖ 脅威 秋田県では草地の管理が粗雑になり、本種が見られなくなったとされている。
- ❖ 特記事項 生息情報が発信された 2 箇所とも自然に関連する公共施設であり、本種の生息に適した環境の維持が期待される。伊藤 (1938) の基になった標本が胆沢文化創造センターに収蔵されている。
- ❖ 文献 19. 竹内誠一 (1940)、73. 伊藤二郎 (1938)、74. 小野泰正ほか (1986)、75. 岩手県立博物館 Facebook (2016.8.21)、76. 秋田県 (2020)、77. 盛岡市動物公園昆虫採集クラブ

(伊達 功)

絶滅危惧Ⅱ類 (VU)

マークオサムシ

鞘翅目 (コウチュウ目) オサムシ科

Carabus (Limnocarabus) maacki aquatilis Bates

環境省 絶滅危惧Ⅱ類

- ❖ 形態 体長 25~32mm。黒色でやや青緑色の光沢がある。頭部上面は平滑で複眼は突出する。前胸背板は幅広く正中溝が深い。上翅は長く肩部が張り出し翅端で丸まる。
- ❖ 分布の概要 県中部から北部までの沿岸部と内陸中南部に局所的に産す。国内では本州の東北地方と新潟県、栃木県に分布する。亜種の模式産地は長野県だが、絶滅した可能性が高い。
- ❖ 生息状況 低地の湿地や泥炭地に生息し、湿地周辺の土中や水田の畦畔などで成虫越冬する。本県における生息地の大部分は水田環境で、安定した生息地は少なく個体数も少ない。近年では 2010 年に金ヶ崎町で確認されているが、最近の生息状況は不明である。
- ❖ 脅威 水田の基盤整備による乾田化や水路整備。休耕田や水田放棄地の低木林化。
- ❖ 特記事項 県内最初の記録は 1949 年の山田町船越であるが、胆沢文化創造センターに収蔵されている 1935 年水沢町 (現奥州市水沢の一部) 産の標本が、県内に現存する最古のものと考えられる。
- ❖ 文献 78. 井村有希・水沢清行 (2013)、78.1. 菊池恭司 (1988)、79. 菊池恭司 (1997)、80. 大久保一吉・尾形洋一 (1985)、81. 東日本オサムシ研究会 (1989)、82. 平野修一 (1978)、82.2 山本弘 (1964)、152.1. 茅橋輝昭ほか (2013) 154. 三浦秀明 (1988)

(伊達 功)

絶滅危惧Ⅱ類 (VU)

ウメヤルリミズギワゴミムシ

鞘翅目 (コウチュウ目) オサムシ科

Bembidion (Ocydromus) umeyai Habu

環境省 なし

- ❖ 形態 体長 4～5 mm。扁平で黒色、背面が青色光沢を示す。頭と前胸は小さく長卵形の胴の約 1／2 長、触角基節と脚の脛節から先は赤褐色。
- ❖ 分布の概要 八幡平市安代地区と盛岡市で記録された。国内では北海道と本州、四国に分布する。以前は本州の関東以北に分布するとされたが、近年愛媛県や島根県等、西日本からも記録されるようになった。
- ❖ 生息状況 露岩の多い山地溪流沿いに生息する。模式産地の北海道豊平川では局所に集中発生し、成虫は夏秋期の日中に岩盤上を活発に歩行するという。八幡平市の記録は 1965 年 6 月に奥羽山脈深部の米代川上流部で採集された 1 例である。その後、長い間確認されていなかったが、2010 年 8 月に盛岡市北部の北上川河畔において記録された。それ以降、新たな知見は得られていない。
- ❖ 脅威 河川改修等の生息地改変。
- ❖ 特記事項 本種の形態および生息地や行動も特徴的であり識別は比較的容易であるが、既知産地が少ないことは、生息地が限定されていることを示すと考えられる。
- ❖ 文献 82. Habu A (1959)、83. 吉富博之・林成多 (2016)、84. 国土交通省東北地方整備局岩手河川国道事務所 (2011)、85. 佐竹邦彦・笠原須磨生 (1985)

(伊達 功)

絶滅危惧Ⅱ類 (VU)

シマゲンゴロウ

鞘翅目 (コウチュウ目) ゲンゴロウ科

Hydaticus (Guignotites) bowringii Clark

環境省 準絶滅危惧

- ❖ 形態 体長 12.5～14mm。ゲンゴロウとしては中型、体型は卵形。上翅は黒色で、各上翅の中央と側縁近くには金色の縦条が有り、後方で結合する。各上翅中央の内側付近基部近くにも金色の円紋が有る。
- ❖ 分布の概要 かつては県内の田や湿地に広く分布していたが、近年はかなり減少している。国内に広く分布している。
- ❖ 生息状況 年 1 回の発生。自然が豊かな環境の湿地や池で見られるが、高標高の地域では少ないようである。中秋～春に越冬する。夏は灯火に飛来することもある。
- ❖ 脅威 田の近くの溜池の取り壊しや鯉・ブラックバス・アメリカザリガニ・ウシガエル等の繁殖、農薬の流入など。
- ❖ 特記事項 以前と比べると生息地がかなり減っているので、絶滅危惧Ⅱ類として新たに追加した。
- ❖ 文献 27. 三田村敏正ほか (2017)、86. 佐竹邦彦 (1995)、成瀬健一 (2008)

(成瀬 健一)

絶滅危惧Ⅱ類 (VU)

シマケシゲンゴロウ

鞘翅目 (コウチュウ目) ゲンゴロウ科

Hygrotus (Coelambus) chinensis (Sharp)

環境省 なし

- ❖ 形態 体長 4.3～5.0mm。長楕円形の体で上翅片側には黄褐色地に黒の縦縞が 4～5 本ほど走っている。
- ❖ 分布の概要 久慈市、八幡平市安比高原、盛岡市で確認されている。国内では九州以北の 20 都道府県から記録がある。
- ❖ 生息状況 浅い湿地や池の岸辺の草やコケの中から見出される。ボウフラ・アカムシ・ヨコエビ等を捕食していると思われる。近年久慈市・八幡平市安比では確認出来ていない。
- ❖ 脅威 湿地の田畑化・宅地化。溜池の取り壊し・ザリガニなどの侵入。
- ❖ 特記事項 前回調査時より更に減少しているので、C ランクから絶滅危惧Ⅱ類に変更した。
- ❖ 文献 27. 三田村敏正ほか (2017)

(成瀬 健一)

絶滅危惧Ⅱ類 (VU)

キボシケシゲンゴロウ

鞘翅目 (コウチュウ目) ゲンゴロウ科

Allopachria flavomaculatus (Kamiya)

環境省 情報不足

- ❖ 形態 体長 2.5mm 前後で、短楕円形。背部は黒色で光沢があり、上翅片側には大小 3 個の黄紋がある。
- ❖ 分布の概要 2006 年に盛岡市米内川のみで確認されている。国内では九州以北の 42 都道府県から記録がある。
- ❖ 生息状況 河川の上・中流域の清流に生息する。成虫は川底が砂質の水深がおおむね 50cm 以上の淀みにあるヨシ等の水中根の付近に見受けられることが多い。ボウフラ・アカムシ・ヨコエビ等を捕食していると思われる。
- ❖ 脅威 河川改修による護岸のコンクリート化。
- ❖ 特記事項 前回調査時より更に減少しているので、C ランクから絶滅危惧Ⅱ類に変更した。
- ❖ 文献 27. 三田村敏正ほか (2017)、88. 森正人・北山昭 (1993)

(成瀬 健一)

絶滅危惧Ⅱ類 (VU)

ニセマグソコガネ

鞘翅目 (コウチュウ目) コガネムシ科

Aegialia (Aegialia) nitida C. O. Waterhouse

環境省 なし

- ❖ 形 態 体長 3.5～4.5mm。体は卵形で、後方で最も幅広になる。光沢のある黒色から黒褐色で背面は膨隆する。後翅は退化し飛べない。生息地に似た種はおらず、識別は容易。
- ❖ 分布の概要 県内では陸前高田市、山田町、大槌町で記録されている。国内では北海道、本州、九州に分布する。日本固有種。
- ❖ 生息状況 厳冬期と8月を除く、3月から11月に見られる。海浜性で、海岸植物の多い砂浜に生息する。主に海岸植物の根際の砂中から見つかり、特にイネ科植物の根際に多い。見つかる範囲は狭く、条件の良い部分に限られ局地的。既知産地の内、東日本大震災後確認された場所は、陸前高田市と山田町の2ヶ所である。その後山田町の産地は復興事業ため砂浜が残っていない。現在県内では陸前高田市だけに残存し新たな産地も見つかっていない。大津波の影響を最も受けた種かもしれない。
- ❖ 脅 威 砂浜の環境改変。
- ❖ 特記事項 前回調査時より更に減少しているので、Cランクから絶滅危惧Ⅱ類に変更した。
- ❖ 文 献 2. 岡島秀治・荒谷邦夫 (2012)、89. 高橋泰美 (1997)、90. 砂田比左男 (2011)

(砂田 比左男)

絶滅危惧Ⅱ類 (VU)

ヤマトケシマグソコガネ

鞘翅目 (コウチュウ目) コガネムシ科

Leiopsammodius japonicus (Harold)

環境省 なし

- ❖ 形 態 体長 3.5～4.5mm。体色は光沢のある黒色。前胸背板に横隆起を持たないことで近縁種と区別できる。
- ❖ 分布の概要 県内では陸前高田市の砂浜海岸2ヶ所で記録されている。国内では北海道、本州、四国、九州に分布する。
- ❖ 生息状況 海岸性で、3月から10月に見られ、特に5月から7月に多い。他の砂地性ケシマグソコガネ類と異なり植物の根際には見られず、汀線に近い海藻、海草などの漂着物下から見つかる。風のない晴れた日には飛翔することが知られ、県内でも記録されている。東日本大震災の大津波以後生息地が流失消滅し、以降確認されていない。
- ❖ 脅 威 海浜の環境改変。
- ❖ 特記事項 東日本大震災以後新たな産地が見つからず絶滅の可能性もあるが、県北部の調査が不十分のため、絶滅危惧Ⅱ類として新たに追加した。
- ❖ 文 献 2. 岡島秀治・荒谷邦夫 (2012)、91. 砂田比左男ほか (2009)

(砂田 比左男)

絶滅危惧Ⅱ類 (VU)

ハビロキンヘリタマムシ

鞘翅目 (コウチュウ目) タマムシ科

Lamprodila (Lamprodila) nipponensis (Y. Kurosawa)

環境省 なし

- ❖ 形態 体長 11～16mm。金緑色で、上翅外縁は金橙色に縁どられ、その外側は再び緑色となる。腹端は雄では半月にえぐられるが、雌では丸く小さい切れ込みがある。
- ❖ 分布の概要 宮古市と久慈市に記録がある。県外では群馬県と長野県のみに分布する。久慈市が分布の北限。
- ❖ 生息状況 ミズナラ林などの落葉広葉樹林に生息する。成虫はハルニレの樹冠部で得られる。食樹はハルニレ。1947 年の宮古市区界での記録以降長く確認されなかったが、2004 年に同じ区界で、2009 年に久慈市で記録され、その後も宮古市川井の 2 箇所で採集されている。全国的にみても、個体数は著しく少ない。
- ❖ 脅威 森林伐採、特に各種自然エネルギー関連施設建設に伴う森林の消失。
- ❖ 文献 92. 三浦秀明 (2022)、93. 山崎哲郎 (2009)、94. 松沢祐一 (2006)、95. 森川正昭ほか (1999)、96. 大桃定洋・福富宏和 (2013)、97. 平野修一 (1978)

(伊達 功)

絶滅危惧Ⅱ類 (VU)

アカヘリミドリタマムシ

鞘翅目 (コウチュウ目) タマムシ科

Buprestis (Cypriacis) splendens niponica Hoscheck

環境省 なし

- ❖ 形態 体長 12～20mm。体背面は緑色で、上翅は銅赤色で縁どられる。前胸背中央部に縦溝を欠き、上翅の隆条は弱く間室に 2 点刻列がある。
- ❖ 分布の概要 宮古市からのみ記録されている。国内では本州、伊豆諸島（新島）、九州に分布する。
- ❖ 生息状況 幼虫はマツ類の枯材に生息し、成虫はマツ類の伐採木などに集まる。全国的のいずれの産地も生息密度は著しく低い。宮古市街近郊の丘陵での採集例は、比較的若いアカマツ林内の立枯木に複数のクロタマムシとともに飛来していたものである。この例以降の記録は得られていない。
- ❖ 脅威 森林伐採、特に各種自然エネルギー関連施設建設に伴う森林の消失。松枯れによるアカマツ林の消失。
- ❖ 文献 96. 大桃定洋・福富宏和 (2013)、98. 横倉明 (1997)、99. 中村七三 (1968)

(伊達 功)

絶滅危惧Ⅱ類 (VU)

ホネゴミムシダマシ

鞘翅目 (コウチュウ目) ゴミムシダマシ科

Emypsara riederii (Faldermann)

環境省 なし

- ❖ 形態 体長 4.8～6.7mm。体は卵型で光沢は鈍い。頭部と前胸背板は黒褐色。上翅は黄褐色で2本の波型の黒褐色帯を持つ。黒褐色帯の大きさには変異が大きい。海岸性で、同定に困る他の種はいない。
- ❖ 分布の概要 県内では宮古市、山田町、大槌町、釜石市、陸前高田市で確認されている。国内では北海道、本州北部に分布する。
- ❖ 生息状況 砂浜海岸に生息し、海藻などの漂着が多くなる5月から7月が特に多い。主に夜間活動し、海藻や、海鳥の死骸、野菜屑など有機物はなんでも食べる。昼間は漂着物の下などに見られる。漂着物の多い海岸に限られ、個体数は多くはない。陸前高田市の大野海岸では、東日本大震災の大津波後全く見られなくなった。
- ❖ 脅威 砂浜の環境変化。
- ❖ 特記事項 産地が限られ個体数はどこも少なく、震災後見られなくなった産地もあることから、絶滅危惧Ⅱ類として、新たに追加した。
- ❖ 文献 18. 上野俊一ほか (1985)、100. 秋田勝巳・益木仁雄 (2016)

(砂田 比左男)

絶滅危惧Ⅱ類 (VU)

フタスジカタビロハナカミキリ

鞘翅目 (コウチュウ目) カミキリムシ科

Brachyta bifasciata japonica (Matsushita)

環境省 なし

- ❖ 形態 体長 16～18mm。頭と前胸は黒色、触角と脚に黄色部がある。胴は幅広く厚みがあり、翅鞘は黄色で末端が黒く、その前方両側に黒紋、さらに前方に2対の黒点がある。頑強な体型と独特の色彩が特徴。
- ❖ 分布の概要 八幡平市安代地区、盛岡市、宮古市川井の山間から記録されている。国内では本州、四国に広く分布するが、産地はかなり局限される。日本固有亜種。
- ❖ 生息状況 県内の記録は散発的で、以前から個体数は少なかったと推測される。1992年以降の報告がないが、今回の調査期間中に盛岡市の北上高地で目撃情報があつた。
- ❖ 脅威 幼虫の食草であるヤマシャクヤク類が、人工林の鬱閉に伴う生育環境悪化や盗掘等により減少すること。
- ❖ 特記事項 ヤマシャクヤク類も近年減少が著しいとして岩手県レッドデータブックに掲載されている (ベニバナヤマシャクヤク: CR+EN、ヤマシャクヤク: VU)。
- ❖ 文献 36. 楨原寛ほか (1997)、101. 伊達功 (1981)、102. 平野俊秀 (1993)

(伊達 功)

絶滅危惧Ⅱ類 (VU)

オニホソコバネカミキリ

鞘翅目 (コウチュウ目) カミキリムシ科

Necydalis (Necydalis) gigantea gigantea Kano

環境省 なし

- ❖ 形態 体長 16.5～34.0mm。一見大型のヒメバチ類を思わせる体型で、上翅はごく短い。体はほぼ黒色であるが、黄金色の被毛や微毛により黄色みを帯びて見える。県産の同属3種に比べ、体格は強壯で、触角は短い。
- ❖ 分布の概要 二戸市、宮古市川井、花巻市大迫町、岩泉町から記録されている。このほか、詳細は不明ながら、田野畑村で古い確認情報がある。国内では北海道、本州、四国、九州、屋久島に分布するが、空白地帯がかなりある。日本固有種。
- ❖ 生息状況 県内の記録は散発的であるが、宮古市で今回の調査中に確認された。クワの古木が残る里山での記録が多いが、本来は広葉樹林の樹洞等に依存して低密度で生息していると推測され、山間で訪花個体が得られた記録もある。
- ❖ 脅威 森林伐採、特に各種自然エネルギー関連施設建設に伴う森林の消失。養蚕の衰退による発生木の減少。耕作放棄等による生息環境の悪化。
- ❖ 文献 36. 榎原寛ほか (1997)、103. 奥昭夫 (2011)、104. 三浦秀明 (2022)、105. 小野泰正 (1981)

(伊達 功)

絶滅危惧Ⅱ類 (VU)

ヨツボシカミキリ

鞘翅目 (コウチュウ目) カミキリムシ科

Stenyrgrinum quadrinotatum Bates

環境省 絶滅危惧ⅠB類

- ❖ 形態 体長 8～14mm。やや扁平な長円筒形で赤褐色。前胸は頭部よりやや細く首状、触角は体より短い。翅鞘中央にある左右各2個の淡黄色紋が特徴。
- ❖ 分布の概要 久慈市、二戸市、盛岡市、宮古市、水沢市、一関市から記録されている。国内では北海道南部から奄美群島まで広く分布する。
- ❖ 生息状況 過去には成虫が山林のほか市街地近郊にも出没したが、近年はクリ・コナラに代表される二次林においても見ることが少ない。県内では、2000年二戸市以降新たな知見は得られていない。国内ほとんどの地域でも本種が衰退したとされている。
- ❖ 脅威 クリやコナラは現在も少なくないので本種の衰退を植生と関係づけることは難しいが、過去の採集状況等から里山環境の変化が関係している可能性がある。
- ❖ 文献 36. 榎原寛ほか (1997)、103. 奥昭夫 (2011)

(伊達 功)

絶滅危惧Ⅱ類 (VU)

キンイロネクイハムシ

鞘翅目 (コウチュウ目) ハムシ科

Donacia (Donaciomima) japana Chûjô & Goecke

環境省 準絶滅危惧

- ❖ 形態 体長 7.5～9.0mm。体色は一般に暗緑色で強い銅色の光沢を有する。前胸背板には横皺と強い点刻がある。上翅には中央部に顕著な赤銅色の縦条とよこ皺がある。後肢腿節には小型の突起を持つ。
- ❖ 分布の概要 奥州市水沢区のみで確認されていたが、その後沿岸北部での生息が確認され、今回新たに一戸町での生息情報が得られた。国内では北海道、本州、九州に分布。
- ❖ 生息状況 平地のミクリやスゲ類の生育する湿地に生息する。成虫はミクリ、スゲなどの花に集まり葉を食べる。幼虫はミクリの根を食べる。個体数は著しく少なく、絶滅の危険性が大きい。水沢区の生息地の一つは大規模スポーツ施設の建設で消滅した。もう一か所は現存するものの、植生が変化し、現在は確認できていない。平地の湿地環境の指標種。
- ❖ 脅威 水田の耕地整理などにより生息環境が著しく狭まっていること。
- ❖ 文献 38. 高橋泰美 (1992)

(伊達 功)

絶滅危惧Ⅱ類 (VU)

キイロカメノコハムシ

鞘翅目 (コウチュウ目) ハムシ科

Cassida concha Solsky

環境省 なし

- ❖ 形態 体長 5 mm、体は楕円形で背面は凹凸に富み、金色に輝いている。腹面は黒色であるが、腹部各節の側方は淡色である。脚は淡黄褐色、爪は付節第3節の毛で隠されている。触角は黄褐色、先端の4節は暗色となる。
- ❖ 分布の概要 県内では軽米町と花巻市で確認されている。国内では北海道と本州に局地的に分布する。
- ❖ 生息状況 成幼虫ともフシグロセンノウ、カワラナデシコ、ハコベ類などナデシコ科の植物を食べて生活している。卵は食草に1個ずつ産まれ、孵化した幼虫は円形の食痕をつけて食べて、老熟すると葉裏で蛹になる。新成虫は7月上旬以降に現れる。個体数は少ない。前回の改定以降、新たな知見は得られていない。草原～林縁の指標昆虫。
- ❖ 脅威 農山村の過疎化などによる里地・里山的な生息環境の悪化。
- ❖ 特記事項 青森県では海岸沿いにも分布しており、本県でも沿岸の調査が必要である。
- ❖ 文献 106. 安富和男ほか (1997)、106.1. 佐藤隆志 (2007)

(伊達 功)

絶滅危惧Ⅱ類 (VU)

イカリアオカメノコハムシ

鞘翅目 (コウチュウ目) ハムシ科

Cassida ferruginea Goeze

環境省 なし

- ❖ 形態 成虫の体長は7 mm 前後、体表は美しい緑色で、翅鞘の基部から会合線にかけて赤褐色の斑紋があり、錨の形に見える。頭部と腹面は黒色、腹部側縁は黄褐色、触角は黄褐色で先端5節は黒褐色。脚は黄褐色で腿節は末端部を除き黒色を呈する。
- ❖ 分布の概要 西和賀町沢内で確認されたほか、今回滝沢市からも生息情報が得られた。国内では青森県と岩手県に分布する。
- ❖ 生息状況 ミズギク、モウセンゴケなどが生育する湿原に生息し、ミズギクを食草とする。ヤブタバコでも飼育できる。分布地域が狭く、生息個体数も少ないが、今回の調査期間中にも生息情報が得られた。今後、新産地の発見が期待される。
- ❖ 脅威 食草の生育する湿原の開発・破壊あるいは周辺の開発による湿原の乾燥化。
- ❖ 特記事項 本種は1990年に始めて日本での生息が確認された。なお、学名に異論があるが、食草が一致しないこともあるので、ここでは原報告者に従っておく。
- ❖ 文献 107. 安富和男ほか (2011)、108. 木元新作・滝沢春雄 (1994)

(伊達 功)

絶滅危惧Ⅱ類 (VU)

ニセセスジツツハムシ

鞘翅目 (コウチュウ目) ハムシ科

Cryptocephalus (Cryptocephalus) janthinus Germar

環境省 なし

- ❖ 形態 体長2.6～3.4mm。体色は一般に黒青色。頭部は黒青色で前頭は黄褐色、複眼の内縁部は赤褐色であり、肢は全体黒青色を呈する。前胸背板の点刻は強く密である。上翅の点刻は規則的な列状をなす。一見、セスジツツハムシに似るが、顔面の色彩などによって区別は容易である。
- ❖ 分布の概要 盛岡市のみで確認されていたが、今回滝沢市からも生息情報が得られた。国内では北海道および本州に分布する。
- ❖ 生息状況 盛岡市の生息地の環境はゴマシジミの生息する湿地で、食草はナガボノシロワレモコウである。生息地は面積が極めて狭小で、生息数も限られている。湿原環境の指標種。
- ❖ 脅威 盛岡市の生息地は国有地内にあり盛岡市の環境保全地区に指定されているが、生息地の規模が小さく、周囲からのハンノキ等の樹木の侵入、ヨシの繁茂等により食草が減少している。
- ❖ 文献 109. 千葉武勝 (2008)

(伊達 功)

絶滅危惧Ⅱ類 (VU)

ハマベゾウムシ

鞘翅目 (コウチュウ目) ゾウムシ科

Isonycholips gotoi Chûjô & Voss

環境省 なし

- ❖ 形態 体長 4mm 内外。体形はずんぐりし、体色は淡褐色から暗褐色で時に上翅に暗色部をもつ。上翅間部室はブロック状に刻まれる。他のハマベゾウムシ類とは体形が異なるので、同定は容易。
- ❖ 分布の概要 県内では陸前高田市、宮古市、山田町で記録されている。国内では北海道、本州、四国、九州に分布する。
- ❖ 生息状況 前面の海中にアマモが生育する湾奥の砂浜海岸に、3～10 月に見られる。主に夜間地表に現れ漂着したアマモを摂食する。日中は漂着物の下や浅い砂中に潜んでいる。ハマベゾウムシ類では最も個体数が多かったが、東日本大震災に伴う大津波後は生息地の消滅や流失のため、現在確認できる産地は山田町のみ。ハマベゾウムシ類は砂浜の汀線付近に生息しているため、沈降による汀線の移動や流失など津波の被害を最も受けたグループかもしれない。本県の海岸はリアス式海岸のため砂浜が発達しにくい地形で産地は分断されていることから、生息地の分散や拡大も考えにくい。
- ❖ 脅威 海浜の環境改変。
- ❖ 特記事項 山田町の産地は復興事業のため消滅の危機があったが、当初の計画が変更され事なきを得た。
- ❖ 文献 110. 永幡嘉之 (2011)、111. 熊谷賢・砂田比左男 (2009)、112. 中村裕之 (1995)
(砂田 比左男)

絶滅危惧Ⅱ類 (VU)

クリコマトガリヤマゾウムシ

鞘翅目 (コウチュウ目) ゾウムシ科

Acanthalophus ozakii Morimoto

環境省 なし

- ❖ 形態 体長 5.5～6.8mm。体は灰褐色の鱗片で被われ、上翅に斜めの暗褐色帯と不規則な紋がある。上翅の突起は短く、幅広い円錐形で、背面から見るとメスでは上翅後縁をわずかに越えて伸長するが、オスでは越えない。
- ❖ 分布の概要 栗駒山の特産種。トガリヤマゾウムシ属は日本特産で、東北地方の高山に 4 種が分布する。
- ❖ 生息状況 2012 年に宮城県のイワカガミ平付近で採集された個体に基づき、2015 年に記載された。今回の調査により須川温泉付近で 2022 年に確認され、2023 年には隣接する秋田県側でも確認されている。生息域の範囲については明らかになっていない。ハナヒリノキから採集されることが多い。
- ❖ 脅威 生息地は硫気荒原や温泉施設に近く、火山活動や人為的影響で変化する可能性がある。
- ❖ 特記事項 現在知られる生息地が限られた範囲であることから、絶滅危惧Ⅱ類として新たに追加した。栗駒山の特産種として重要である。
- ❖ 文献 42. 佐藤隆志 (2016)、43. 森本桂ほか (2015)、113. 伊達功 (2023)
(伊達 功)

絶滅危惧Ⅱ類 (VU)

シラゲミズギクゾウムシ

鞘翅目 (コウチュウ目) ゾウムシ科

Lachnaeus crinitus Schoenherr

環境省 なし

- ❖ 形態 体長約 4 mm、ズングリ体型で小型、前胸や鞘翅は黒っぽい地色に黄色や茶褐色の粉状組織を密布、そこに疎らな長毛を有する極めて特徴的な種である。
- ❖ 分布の概要 滝沢市の湿原で確認され、近傍の湿地からも生息情報がある。国内では本県のほか秋田、福島、新潟各県に分布するが局地的。
- ❖ 生息状況 湿原に生育するオゼミズギク (ミズギクの変種) を寄主とし、幼虫は頭状花の内部を食べて育ち、蛹化もそこで行う。県内でミズギクが多い雫石町白沼、八幡平市安比高原、岩泉町櫃取等における湿原の調査では本種は確認されていない。
- ❖ 脅威 滝沢市の湿原は天然記念物となっているが、近年ニホンジカの食害が問題となっている。今回の調査ではオゼミズギクは健在であったが、今後の推移を注視する必要がある。
- ❖ 特記事項 千葉 (2008) では「*Lachnaeus* sp.ゴボウゾウムシの一種」として報告され、同名で「岩手県野生生物目録」に掲載されている。絶滅危惧Ⅱ類として新たに追加した。
- ❖ 文献 109. 千葉武勝 (2008)、114. 佐藤隆志ほか (2016)、115. 佐藤隆志・森本桂 (2016) 115.1. 金子道夫 (2014)、115.2. 佐藤福男 (2018)

(伊達 功)

絶滅危惧Ⅱ類 (VU)

コハマベゾウムシ

鞘翅目 (コウチュウ目) ゾウムシ科

Emphyastes mannerheimi Egorov & Korotyaev

環境省 なし

- ❖ 形態 体長 4 mm 内外。体形は細く、体色は光沢のある淡褐色から濃褐色。前胸背に大小の点刻を疎布し、この点で他のハマベゾウムシ類と区別できる。
- ❖ 分布の概要 県内では陸前高田市、宮古市、山田町で記録されている。国内では北海道、青森県、岩手県に分布する。
- ❖ 生息状況 前面の海中にアマモが生育する湾奥の砂浜海岸に、2～11 月に見られる。主に夜間地表に現れる。日中は漂着物の下や表面の乾いた浅い砂中に潜んでいることが多い。ハマベゾウムシに次いで個体数が多い。東日本大震災に伴う大津波後は、生息地の消滅や流失のため、震災直後は山田町のみ確認できた。2022 年、陸前高田市の狭い砂浜 2 ヶ所で残存していたものが確認された。
- ❖ 脅威 海浜の環境改変。
- ❖ 特記事項 山田町の産地は復興事業のため消滅の危機があったが、当初の計画が変更され事なきを得た。
- ❖ 文献 111. 熊谷賢・砂田比左男 (2009)、112. 中村裕之 (1995)

(砂田 比左男)

絶滅危惧Ⅱ類 (VU)

クロツヤハマベゾウムシ

鞘翅目 (コウチュウ目) ゾウムシ科

Thalasselephas major Egorov & Korotyaev

環境省 なし

- ❖ 形態 体長 3.3～5.2mm。体形はほそく、体色は光沢のある黒色。前胸背は幅広く、点刻を散布する。ハマベゾウムシ類で最も大きく、前胸背の形状で区別できる。
- ❖ 分布の概要 県内では陸前高田市、宮古市、山田町で記録されている。国内では北海道、青森県、岩手県、宮城県に分布する。
- ❖ 生息状況 前面の海中にアマモが生育する湾奥の砂浜海岸に、3月と5月以降みられる。主に夜間地表に現れる。日中は汀線からやや離れた漂着物の下に潜んでいることが多い。個体数は多くない。東日本大震災に伴う大津波後は、生息地の消滅や流失のため、震災後は山田町のみに確認されている。
- ❖ 脅威 海浜の環境改変。
- ❖ 特記事項 山田町の産地は復興事業のため消滅の危機があったが、当初の計画が変更され事なきを得た。
- ❖ 文献 111. 熊谷賢・砂田比左男 (2009)、112. 中村裕之 (1995)

(砂田 比左男)

絶滅危惧Ⅱ類 (VU)

ツヤハマベゾウムシ

鞘翅目 (コウチュウ目) ゾウムシ科

Thalasselephas maximus Zherikhin

環境省 なし

- ❖ 形態 体長 3.3～5.2mm。体形は細く、体色は暗褐色。前胸背は卵形で点刻を密布し荒い。上翅表面も荒く背面は光沢が鈍いことで区別できる。
- ❖ 分布の概要 県内では陸前高田市、宮古市、山田町で記録されている。国内では北海道、青森県、岩手県、宮城県に分布する。
- ❖ 生息状況 前面の海中にアマモが生育する湾奥の砂浜海岸に、3月と5月以降みられる。主に夜間地表に現れる。日中は汀線からやや離れた漂着物の下に潜んでいることが多い。個体数は多くない。東日本大震災に伴う大津波後は、生息地の消滅や流失のため、震災後は山田町のみに確認できた。
- ❖ 脅威 海浜の環境改変。
- ❖ 特記事項 山田町の産地は復興事業のため消滅の危機があったが、当初の計画を変更し事なきを得た。
- ❖ 文献 111. 熊谷賢・砂田比左男 (2009)、112. 中村裕之 (1995)

(砂田 比左男)

絶滅危惧Ⅱ類 (VU)

コツヤハマベゾウムシ

鞘翅目 (コウチュウ目) ゾウムシ科

Thalasselephas minor Egorov & Korotyaev

環境省 なし

- ❖ 形態 体長 3～4 mm。体形は細く小型、体色は淡褐色から暗褐色。前胸背は卵形で点刻を密布し荒い。上翅表面も荒く背面は光沢が鈍い。ツヤハマベゾウムシに似るが明らかに小型なことで区別できる。
- ❖ 分布の概要 県内では陸前高田市、宮古市、山田町で記録されている。国内では北海道、青森県、岩手県、宮城県に分布する。
- ❖ 生息状況 前面の海中にアマモが生育する湾奥の砂浜海岸に、3月と5月以降見られる。主に夜間地表に現れる。日中は汀線からやや離れた漂着物の下に潜んでいることが多い。山田町以外では少ない。東日本大震災に伴う大津波後は、生息地の消滅や流失のため、震災直後は山田町のみ確認され、2023年には陸前高田市の狭い砂浜で少数確認された。
- ❖ 脅威 海浜の環境改変。
- ❖ 特記事項 山田町の産地は復興事業のため消滅の危機があったが、当初の計画が変更され事なきを得た。
- ❖ 文献 111. 熊谷賢・砂田比左男 (2009)、112. 中村裕之 (1995)

(砂田 比左男)

絶滅危惧Ⅱ類 (VU)

ヒメギフチョウ

鱗翅目 (チョウ目) アゲハチョウ科

Luehdorfia puziloi (Erschoff)

環境省 準絶滅危惧 (本州亜種)

- ❖ 形態 開帳 50mm。翅には黄色と黒の縞模様がある。後翅外縁の黒帯の中に4個の青色紋がある。後角には中に青色紋を持つ赤色半月紋がある。裏面は淡色で、後角の赤色紋は外縁に沿って伸びている。ギフチョウに酷似するが、前翅前縁に沿う黄色紋列の最上端の1紋が内側にずれているのがギフチョウである。
- ❖ 分布の概要 局地的ではあるが、ほぼ県内全域に分布している。国内では北海道、本州の東北地方と新潟県及び関東地方と中部地方に分布する。
- ❖ 生息状況 年1回4・5月に成虫が羽化し、カタクリ等の花で吸蜜する。幼虫の食草であるトウゴクサイシンやオクエゾサイシンの葉裏に産卵する。葉を食べて成長した幼虫は夏前に地上に降りて蛹化し越冬する。以前には数多く生息していた産地でも鹿の食害の為、消滅や激減している処もある。
- ❖ 脅威 年各地で鹿が繁殖して幼虫の食草を食べてしまう。これ以上鹿が繁殖しないよう対策を取る必要がある。
- ❖ 特記事項 東北地方のヒメギフチョウが確実に見られる地域として本県は重要である。斑紋の変異によって北海道産と本州産は別亜種にされているが、更に本州内で東北産と信州産とを別亜種とする見解もある。前回調査時より更に減少しているので、Cランクから絶滅危惧Ⅱ類に変更した。
- ❖ 文献 116. 三井秀男 (2020)、117. 成瀬健一 (2020)、118. 中谷充 (2017)、119. 二戸市 (2020)

(成瀬 健一)

絶滅危惧Ⅱ類 (VU)

チョウセンアカシジミ

鱗翅目 (チョウ目) シジミチョウ科

Coreana raphaelis yamamotoi Okano

環境省 絶滅危惧Ⅱ類

- ❖ 形態 開張 40mm。翅は赤橙色、前翅の外縁に黒色帯がある、後翅の外縁の前の方が黒色。裏面は褐色味が強い。外縁に沿って2列の白色紋列がありその間は橙色。外縁第 1b, 2 室は濃い橙色。
- ❖ 分布の概要 久慈市から宮古市までの太平洋岸、内陸部の雫石町、滝沢市に産す。別亜種が山形県、新潟県に分布する。
- ❖ 生息状況 6 月中旬頃成虫が出現する。食樹のトネリコの周辺を飛び回る。藪の中のトネリコは利用せず川沿い、耕地周辺、道路沿いの食樹の幹の下部に数個まとめて産卵する。卵で越冬し、翌春孵化した幼虫は芽に入って食べ始め、開葉すると葉を綴って食べる。蛹化は地上に降りて石の下、落葉の陰である。個体数の減少した地域や絶滅した地域もある。各地の保存活動により、個体群が維持されている。
- ❖ 脅威 利用価値が低下し、産卵に適する人里近くのトネリコは除去されることが多くなり、さらに耕地整備、河川敷の整備等でも伐採されて食樹がなくなること。
- ❖ 特記事項 国内最初の記録は平野修一が 1936 年展覧会に出品された九戸郡野田小学校の小学生の標本から見だし報告したものである。
- ❖ 文献 7. 岩手虫の会編 (1988)、120. 尾形洋一 (1988)、121. 平野修一 (1937)

(成瀬 健一)

絶滅危惧Ⅱ類 (VU)

カシワアカシジミ

鱗翅目 (チョウ目) シジミチョウ科

Japonica onoi onoi Murayama

環境省 絶滅危惧Ⅱ類 (北海道・東北地方亜種)

- ❖ 形態 開張 40mm。翅は黄橙色、前翅の外縁に黒色帯あり、後翅の外縁の色帯は細く、尾状突起は黒色で基部に小黒点がある。裏面は表面より赤みに乏しく、細い不鮮明な白縦線がある。外縁 1b, 2 室は濃い橙色、第 3 室以降は淡色。後翅の外縁に小黒紋列とその外側に白台形状紋列がある。斑紋はアカシジミに酷似している、後翅裏面外縁の黒紋が丸みではなく台形状になる点、銀白帯に光沢がない点などが異なる。
- ❖ 分布の概要 県の北半分の地域に記録がある。国内では北海道と本州の青森県、岩手県、秋田県、福島県のほか広島県に分布する。広島県産は別亜種である。
- ❖ 生息状況 幼虫の食樹はカシワで卵越冬をして孵化した幼虫は芽に食入し、6 月下旬から 7 月に羽化し夕方カシワの樹上を飛び回っている。生息個体数は減少傾向をたどっている。
- ❖ 脅威 他のカシワ依存種と同様に、生息地は火山地帯のように遷移があまり進んでいない所や、現在はあまり実施されない草原の火入れにより火に強いこの木が残っている所等の不安定な状態に依存していること。
- ❖ 特記事項 前回調査時より更に減少しているので、C ランクから絶滅危惧Ⅱ類に変更した
- ❖ 文献 119. 二戸市 (2020)、122. 河野勝行 (1993)、123. 山本勝利 (1993)

(成瀬 健一)

絶滅危惧Ⅱ類 (VU)

ウラジロミドリシジミ

鱗翅目 (チョウ目) シジミチョウ科

Favonius saphirinus (Staudinger)

環境省 なし

- ❖ 形態 開張 35mm。雄の翅表は光沢ある緑色で見る方向で濃青色を呈する。雌は暗い褐色。翅の裏面の地色は銀白色で数本の暗色条がある。雄では弱いか消失する個体がある。この裏面の銀白色と翅形が丸みを帯びることは他のミドリシジミ類と異なる。
- ❖ 分布の概要 盛岡市、宮古市を結ぶ線のほぼ北側の各地に局地的に分布する。国内では北海道南部、本州、四国、九州に局地的に分布する。
- ❖ 生息状況 7月中旬に成虫が発生し、雌はカシワの枝の股、樹皮の割れ目に数個まとめて産卵し、卵で越冬する。翌春に孵化した幼虫は芽に入ってから中を食べさらに花穂や葉を食べて成長し、葉の裏で蛹化する。既知産地において個体数が少なくなっている。
- ❖ 脅威 他のカシワ依存種と同様に、生息地は火山地帯のように遷移があまり進んでいない所や、現在はあまり実施されない草原の火入れにより火に強いこの木が残っている所等の不安定な状態に依存していること。
- ❖ 特記事項 前回調査時より更に減少しているので、C ランクから絶滅危惧Ⅱ類に変更した
- ❖ 文献 119. 二戸市 (2020)、124. 砂田比左男 (2007)、125. 成瀬健一 (2012)

(成瀬 健一)

絶滅危惧Ⅱ類 (VU)

ハヤシミドリシジミ

鱗翅目 (チョウ目) シジミチョウ科

Favonius ultramarinus (Fixsen)

環境省 なし

- ❖ 形態 40mm。翅の表面、雄は金属光沢がある青藍色、後翅の周辺は黒帯で縁取られる。雌は暗い褐色。裏面は灰褐色で前翅には三本の横の褐色線があり、後翅にはW線のほかに2本の褐色線がある。前後翅とも褐色線は白く縁取られる。後翅の内縁角には褐色紋があり、近くに黒点を持つ橙色紋がある。
- ❖ 分布の概要 盛岡市、宮古市の北部で記録されているほかに一関市でも記録されている。国内では北海道、本州、九州に分布する。
- ❖ 生息状況 年一回発生で初夏の候に成虫が羽化し、食樹の若枝に産卵する。卵越冬である。食樹はカシワであるが例外的にミズナラも利用する、本県でもミズナラから幼虫が発見されている。生息個体数は減少傾向をたどっている。
- ❖ 脅威 他のカシワ依存種と同様に、生息地は火山地帯のように遷移があまり進んでいない所や、現在はあまり実施されない草原の火入れにより火に強いこの木が残っている所等の不安定な状態に依存していること。
- ❖ 特記事項 前回調査時より更に減少しているので、C ランクから絶滅危惧Ⅱ類に変更した。
- ❖ 文献 52. 奥昭夫 (2000)、103. 奥昭夫 (2011)、119. 二戸市 (2020)、126. 鈴木一生 (1980)

(成瀬 健一)

絶滅危惧Ⅱ類 (VU)

クロシジミ

鱗翅目 (チョウ目) シジミチョウ科

Niphanda fusca (Bremer et Grey)

環境省 絶滅危惧ⅠB類

- ❖ 形態 開帳 35mm。翅表は雄では青みを帯びた黒色、裏面の紋が透けている。雌は暗褐色、外縁は濃色である。裏面は暗灰色で白縁の有る暗褐色の小紋が散在する。
- ❖ 分布の概要 県内から記録があるが、局所的である。国内では北限は青森県八戸市・新郷村で、本州、四国、九州に分布する。
- ❖ 生息状況 初夏に発生した成虫はヒメジョオン等の草原に来る。母蝶はアブラムシやキジラミの住む樹木や草に産卵する。県内では既知産地からみてアブラムシのいるススキやヨモギに産卵している。孵化した幼虫はアブラムシやキジラミの分泌する甘露をなめて成長し、訪れるクロオオアリにくわえられてその巣に運び込まれアリに給餌されて育つ。アリは幼虫の腹節から分泌される蜜を吸っている。幼虫で越冬して翌春に蛹化し、羽化もアリの巣の中からすばやく脱出するが、遅れたものはアリに食べられる。
- ❖ 脅威 ススキが生活環境の変化で利用価値がなくなって以前のように管理されなくなり、ススキ草原が荒廃したこと。
- ❖ 特記事項 新たに生息地が発見されているので、Aランクから絶滅危惧Ⅱ類に変更した。
- ❖ 文献 52. 奥昭夫 (2000)、103. 奥昭夫 (2011)、119. 二戸市 (2020)、127. 砂田比左男 (1992)

(成瀬 健一)

絶滅危惧Ⅱ類 (VU)

ヒメシジミ

鱗翅目 (チョウ目) シジミチョウ科

Plebejus argus (Linnaeus)

環境省 準絶滅危惧

- ❖ 形態 開張 30mm。翅の表は雄では瑠璃色で外縁は黒色、雌は黒褐色で後翅の外縁に橙黄色の三日月形紋列がありその内側に黒紋列がある。裏面は雄では灰色で外縁は細く黒色でその内側に三個の黒紋列があり、中と外の間は橙色である。後翅ではそのほかに基部が青味を帯びる。雌の裏面は雄とほぼ同じであるが地色はやや褐色で青味はない。
- ❖ 分布の概要 盛岡市と宮古市を結ぶ線の北側にいくつかの産地が記録されているほかに、一関市及び陸前高田市からの記録もある。県中部の奥州市でも生息が確認されたが、近年は確認されていない。国内では北海道、本州、九州に分布する。
- ❖ 生息状況 年1回の発生。食草はアザミ類・ヨモギ類などのキク科・マメ科・タデ科など広範囲に及ぶが、生息数は多くはない。近年は減少傾向である。
- ❖ 脅威 原に生息するため、樹林化や宅地化すれば生息が危ぶまれる。
- ❖ 特記事項 産地によって変異が見られ、北海道産や本州中部産との比較において本県産は注目される。前回調査時より更に減少しているので、Cランクから絶滅危惧Ⅱ類に変更した。
- ❖ 文献 52. 奥昭夫 (2000)、103. 奥昭夫 (2011)、119. 二戸市 (2020)

(成瀬 健一)

絶滅危惧Ⅱ類 (VU)

ベニモンマダラ

鱗翅目 (チョウ目) マダラガ科

Zygaena nippona hakodatensis Inoue

環境省 準絶滅危惧 (本土亜種)

- ❖ 形態 開張 26～35mm。前翅は薄い黒地で赤い斑紋があり、本亜種ではこの斑紋が中室内の紋と横脈紋が連結するのが特徴である。
- ❖ 分布の概要 二戸市、久慈市、普代村、盛岡市、雫石町、遠野市から知られ、県南地方にも古い記録がある。国内では本亜種は北海道と本州（青森県、岩手県）に分布し、名義タイプ亜種が本州（東北地方南部以南）に分布する。
- ❖ 生息状況 寄主植物はクサフジ、ツルフジバカマで、成虫は7月中旬～8月に出現する。河川周辺や林間湿地の日当たりの良い草地に生息する。盛岡市周辺では1950年代には多産していたが、1978年の雫石町の記録を最後として確認されていない。しかし、2008年に久慈市、2010年に遠野市で多数生息していることが判明した。
- ❖ 脅威 クサフジやツルフジバカマが生育できる草地の衰退。
- ❖ 特記事項 岩手県産は亜種 *hakodatensis* とされる。
- ❖ 文献 128. 岡野磨瑳郎 (1949)、129. 葛西四朗 (2011)、130. 国土交通省東北地方整備局三陸国道事務所 (2009)

(吉田 勝一)

絶滅危惧Ⅱ類 (VU)

エゾヤエナミシャク

鱗翅目 (チョウ目) シャクガ科

Philereme corrugata (Butler)

環境省 なし

- ❖ 形態 開張 25mm 程度。前翅横線は前縁で褐色の2波状紋を形成し、亜前縁部で角ばる。クロヤエナミシャクに似るが、波状紋と翅形、色調の違いで区別できる。
- ❖ 分布の概要 二戸市と盛岡市から記録がある。国内では北海道南部、本州、九州（熊本県）に局地的に稀産する。
- ❖ 生息状況 寄主植物はキビノクロウメモドキであるとしているが、本県には自生しないことからクロツバラであると推定される。いずれの産地も古い記録であり、久しく確認されていない。
- ❖ 脅威 低地におけるクロツバラの減少。
- ❖ 文献 52. 奥昭夫 (2000)、55. 土井信夫 (2005)

(吉田 勝一)

準絶滅危惧 (NT)

モートンイトトンボ

蜻蛉目 (トンボ目) イトトンボ科

Mortonagrion selenion (Ris)

環境省 準絶滅危惧

- ❖ 形態 成虫は腹長 17～26mm、後翅長 11～18mm。小型のイトトンボで、成熟雄の頭部には L 字状の斑紋があり、腹端部は橙色となる。雌は未熟時には全身橙色であるが、成熟すると緑色となる。
- ❖ 分布の概要 岩手沿岸（山本，1954）、花巻市、盛岡市、一関市、宮古市、岩手沿岸（小岩，1986）、盛岡市（佐々木・渡辺，2022）、滝沢市（長谷川・佐竹，1995、佐々木ほか，2022、佐々木ほか，2023b）、北上市（佐竹，2001）、雫石町（佐々木ほか，2023a）など、内陸から沿岸部まで広範囲に生息しており、他に奥州市、平泉町で確認している。国内では本州から九州まで分布する。
- ❖ 生息状況 1 年 1 世代で、平地から丘陵地にかけての湿地、水田など、水深が浅く湿性植物の繁茂した環境に発生する。成虫は春季から夏季にかけて出現する。県内の生息地はまだ残っているが、全国的には減少しており、県単位で絶滅したと考えられるところもある。
- ❖ 脅威 開発による湿地や溜池の消失。
- ❖ 特記事項 ハッチョウトンボ、オゼイトトンボ、ハラビロトンボ、シオヤトンボなどと同時に見られることが多い。現状では県内に広く産地がみられるが、休耕田の生息地など、将来的は消滅が予測される場所が多い。D ランクから準絶滅危惧に変更した。
- ❖ 文献 11. 小岩勲（1986）、12. 佐竹邦彦（2001）、13. 山本弘（1954）、60. 佐々木全ほか（2022a）、61. 佐々木全ほか（2023）、131. 佐々木全・渡辺修二（2022）、132. 佐々木全（2022b）、133. 佐々木全ほか（2023b）、134. 沼宮内耕作（2004）、135. 長谷川勉・佐竹邦彦（1995）

（伊藤 智）

準絶滅危惧 (NT)

カラカネイトトンボ

蜻蛉目 (トンボ目) イトトンボ科

Nehalennia speciosa (Charpentier)

環境省 なし

- ❖ 形態 成虫は腹長 19～24mm、後翅長 11～16mm。小型のイトトンボで、胸部背面及び腹部背面は金緑色を呈す。
- ❖ 分布の概要 滝沢市と八幡平市（環境庁編、1980）に生息が確認されており、両市内の生息を確認している。国内では北海道から栃木県まで分布し、本州では局限される。
- ❖ 生息状況 1 年 1 世代で、平地から山地のミズゴケをとともなう湿原等に発生する。成虫は春季から夏季にかけて出現する。滝沢市の生息地は植物群落が村指定天然記念物となっており、実質上保全されているが、八幡平市の生息地は国定公園外に位置している。
- ❖ 脅威 開発による湿原の消失。
- ❖ 特記事項 原因は不明であるが、経年的に生息地における個体数の減少が見られる。D ランクから準絶滅危惧に変更した。
- ❖ 文献 134. 沼宮内耕作（2004）、135. 長谷川勉・佐竹邦彦（1995）、136. 環境庁編（1980）、137. 小野泰正・佐竹邦彦（1978）

（伊藤 智）

準絶滅危惧 (NT)

ハッチョウトンボ

蜻蛉目 (トンボ目) トンボ科

Nannophya pygmaea Rambur

環境省 なし

- ❖ 形態 成虫は腹長 9～14mm、後翅長 12～16mm。世界最小のトンボの一種。未成熟雄は橙色であるが、成熟にともない赤化する。雌は黄色、褐色、黒色の縞模様呈する。
- ❖ 分布の概要 久慈市、釜石市、宮古市、遠野市、滝沢市、矢巾町、紫波町、西和賀町、花巻市、北上市、奥州市、一関市など広範囲に確認されている。国内では本州、四国、九州に分布する。
- ❖ 生息状況 1年1世代で、平地から丘陵地の湿地、湿原、休耕田等に生息する。モートンイトトンボ、オゼイトトンボ、ハラビロトンボ、シオヤトンボなどと同時に見られる場合が多い。県内に広く分布するが、分布状況は縮小傾向にある。低茎草本が繁茂する湿地の指標種となる。
- ❖ 脅威 湿地の埋め立て、水源の枯渇。植生遷移。
- ❖ 特記事項 奥州市には、造成池に新たに移植した場所があり、継続して発生しているが、将来的には植生遷移による環境の変化が懸念される。D ランクから準絶滅危惧に変更した。
- ❖ 文献 12. 佐竹邦彦 (2001)、134. 沼宮内耕作 (2004)、136. 環境庁編 (1980)、138. 伊藤智 (1992)、139. 幸田洋平 (2015)

(伊藤 智)

準絶滅危惧 (NT)

ヒガシキリギリス

直翅目 (バッタ目) キリギリス科

Gampsocleis mikado Burr

環境省 なし

- ❖ 形態 体長 30mm 弱。褐色で背側は青緑色をおびる。前翅は後腿節の端近くまで達するが、ニシキリギリスよりも短く、黒斑が多い。
- ❖ 分布の概要 県内の高原地帯の草地に局地的に産する。国内では近畿以北の本州に分布する。
- ❖ 生息状況 成虫は晩夏から秋にかけて現れ、草原の比較的丈の高い部分に生息する。八幡平市や盛岡市玉山の牧野では管理が不十分な草地に発生し、シバ草地には認められない。近年、生息場所および個体数が減少しているといわれているが、今回の調査で安比高原には比較的多いことが判明した。他の地域では、最近の生息状況は確認されていない。
- ❖ 脅威 放牧の衰退などによる草地の減少。
- ❖ 文献 140. 奥俊夫ほか (1998)

(吉田 勝一)

準絶滅危惧 (NT)

カワラバッタ

直翅目 (バッタ目) バッタ科

Eusphingonotus japonicus (Saussure)

環境省 なし

- ❖ 形態 成虫は体長 25～43mm、体色は灰青色で、前翅や肢部に濃淡があり、河原の砂礫にカモフラージュしている。
- ❖ 分布の概要 県南部に以前は普通に生息していた。国内では北海道、本州、四国、九州に分布する。
- ❖ 生息状況 主に河川中流域の砂礫地に生息し、成虫は晩夏から秋にかけて出現する。近年各地で減少しており、最近には県南の北上川水系の一部で礫地が多数消失し、不安定な生息動態を示していることが観察されている。
- ❖ 脅威 河川改修などによる砂礫地環境の改変。
- ❖ 特記事項 多くの河川で砂礫地が消失しており生息地が急減すると予測されるため、D ランクから準絶滅危惧に変更した。
- ❖ 文献 141. 宮沢康一郎 (1937)

(吉田 勝一)

準絶滅危惧 (NT)

ミズムシ

半翅目 (カメムシ目) ミズムシ科

Hesperocorixa distanti Kirkaldy

環境省 なし

- ❖ 形態 体長 11mm 内外。体の両側はほぼ並行し長さは幅の約 3.5 倍、背面は黒い横条紋が多いため暗色に見え、黒い複眼に挟まれて頭頂が淡黄色の斑状に目立つ。前脚は短く、長い後脚の脛節は平たい。
- ❖ 分布の概要 盛岡市以南の北上川水系と一関市、陸前高田市に産す。国内では全国各地に分布する。
- ❖ 生息状況 池沼や河川の滞水部に生息し、成虫越冬する。過去にはため池に広く発生したと思われるが、現在は県北・中部には認められず、生息地は減少した。
- ❖ 脅威 池沼やため池の減少。
- ❖ 特記事項 これまでの記録では亜種の判別は行われていない。
- ❖ 文献 142. リバーフロント整備センター (1997)、143. 下村聡、奥俊夫 (2001)

(吉田 勝一)

準絶滅危惧 (NT)

キイロマツモムシ

半翅目 (カメムシ目) マツモムシ科

Notonecta (Notonecta) reuteri reuteri Hungerford

環境省 なし

- ❖ 形態 体長 13.5~16mm。灰黄白色の長円筒形、体下面は褐色をおびる。口吻と後脚はよく発達する。マツモムシに似るが、背面に黒紋がない。
- ❖ 分布の概要 八幡平および安比高原に産す。国内では北海道、本州北部に局地的に分布する。
- ❖ 生息状況 北日本では主に高層湿原の池塘や山間の池沼に生息する。八幡平では、夏期に見られる成虫の生息密度はかなり高い。最近、2021 年に安比高原で生息が確認されている。
- ❖ 脅威 陸地化や踏み荒らしによる湿原の消失や衰退。
- ❖ 文献 144. 岡野磨瑳郎 (1952)

(吉田 勝一)

準絶滅危惧 (NT)

ウミミズカメムシ

半翅目 (カメムシ目) ミズカメムシ科

Speovelia maritima Esaki

環境省 なし

- ❖ 形態 体長は 3.0~4.5mm。体色は暗褐色で、全身は短毛に被われる。口吻は太く長い。無翅型のみが知られる。
- ❖ 分布の概要 岩泉町小本、宮古市、山田町、陸前高田市の海岸で記録がある。国内では北海道、本州、九州に分布する。
- ❖ 生息状況 県内では岩浜の石礫間や消波ブロック下の礫が多い環境で見つかる。宮古市以南の地域に産地が多く、特に広田半島、船越半島周辺の礫の多い海岸で多くの個体数が採集されていた。しかし東日本大震災によってこれらの環境が壊滅し、最近の生息情報は確認されていない。
- ❖ 脅威 護岸工事や埋め立てなどによる岩浜の減少。
- ❖ 特記事項 震災により全域の生息状況が不明であるため、D ランクから準絶滅危惧に変更した。
- ❖ 文献 145. 中村学 (2005)、146. 中村学 (2007)、147. 中村学 (2014)

(吉田 勝一)

準絶滅危惧 (NT)

オオツノカメムシ

半翅目 (カメムシ目) ツノカメムシ科

Acanthosoma firmatum (Walker)

環境省 なし

- ❖ 形態 体長 17mm 内外。扁平でやや縦長の 5 角形、背面は鮮緑色で無紋、赤色の前胸側角は鋭く
とがって突出する。
- ❖ 分布の概要 二戸市、遠野市、一関市に記録がある。国内では本州、四国、九州に分布する。
- ❖ 生息状況 県北部では越冬成虫が 5 月末頃に活動を始め、7 月末には姿を消し、9 月に老齢幼虫が出
現する。幼虫はケンポナシにのみ認められる。二戸市と遠野市でかなり以前に記録されそ
の後確認されていなかったが、2010 年に一関市の北上川河畔で記録された。
- ❖ 脅威 ケンポナシの衰退。
- ❖ 文献 52. 奥昭夫 (2000)、84. 国土交通省東北地方整備局岩手河川国道事務所 (2011)、148.
四戸耕太郎 (1950)

(吉田 勝一)

準絶滅危惧 (NT)

ヒメミヤマメダカゴミムシ

鞘翅目 (コウチュウ目) オサムシ科

Notiophilus aquaticus (Linné)

環境省 なし

- ❖ 形態 体長は 5～5.5mm で幅の 3 倍弱。全身が光沢ある暗銅色、複眼は大きく突出し前頭に深
い縦しわがある。近似のミヤマメダカゴミムシより小さく、脚に褐色部がない。
- ❖ 分布の概要 北海道中央山地、本州の早池峰山と中部山地に分布する。
- ❖ 生息状況 高山帯のみに生息し、岩礫地の石下から発見されている。早池峰山では標高約 1900m の
山頂直下の低木域において、樹間の礫地から発見された。それ以外の場所からは発見され
ていないが、主峰の稜線沿いに他の生息場所があると思われる。1965 年の記録以降、新
たな報告がない。
- ❖ 脅威 生息地は法的保護が図られているが、踏み荒らし等による生息地の破壊が脅威である。
- ❖ 文献 149. 伊藤広見 (1966)

(伊達 功)

準絶滅危惧 (NT)

エゾカタビロオサムシ

鞘翅目 (コウチュウ目) オサムシ科

Calosoma (Campalita) chinense chinense Kirby

環境省 なし

- ❖ 形態 体長 23～31mm、黒色で背面は銅色を帯びる。前胸背は横長で側縁は丸く基部凹陷は顕
著。上翅は長く、3 条の丸い孔点列があり、丘孔点列とともに金～金緑色を呈す。中後脛
節は湾曲する。
- ❖ 分布の概要 県内各地に生息していた。国内では北海道、本州、四国、九州に分布。
- ❖ 生息状況 県内では 1970 年代まで農耕地周辺に普通に生息し、農業害虫調査用の誘蛾灯に多数飛来
したが、近年ではほとんど見ることがなくなった。国交省の調査では、四十四田、御所、
湯田、田瀬、石淵の各ダムで近年の記録がある。ダム湖周辺等の湿潤な環境に残存してい
ると考えられる。北上市周辺では、山沿いで現在も確認されている。
- ❖ 脅威 営農形態や農山村生活の変化による生息環境の改変。湿性環境の衰退。
- ❖ 文献 19. 竹内誠一 (1940)、150. 奥俊夫・小林尚 (1970)、151. 小野泰正ほか (1979)、
152. 河川水辺の国勢調査のための生物リスト、152.1. 茅橋輝昭ほか (2013)、154. 三浦
秀明 (1988)

(伊達 功)

準絶滅危惧 (NT)

アカガネオサムシ

鞘翅目 (コウチュウ目) オサムシ科

Carabus (Carabus) granulatus telluris Bates

環境省 絶滅危惧Ⅱ類

- ❖ 形態 体長 18～25mm、黒色で背面は弱く暗銅色を呈す。頭部は密に点刻され、複眼は大きく突出する。前胸背板は幅広く方形、上翅は両側ほぼ直線で平行する。第一次間室は強く隆起する。
- ❖ 分布の概要 県内では最初に沿岸部で記録され、その後内陸部でも生息が確認された。本州の太平洋側では神奈川県以東、日本海側では新潟県以東に分布し、北海道に別亜種が生息する。
- ❖ 生息状況 低標高の湿地、河川敷、水田などの水辺環境に生息し、成虫で越冬する。本県には広い低湿地が存在しないので安定した生息地に乏しい。沿岸部では水田環境で、内陸では県中～南部の北上川河川敷や休耕田等で確認された。近年も県南の沿岸部と内陸部で生息情報があるが、詳細は不明である。低湿地環境の指標種。
- ❖ 脅威 休耕田を含む基盤整備、河川改修、宅地造成などの環境改変。本州亜種では、分布範囲と総個体数の減少は著しいと推測されている。
- ❖ 文献 21. 中根猛彦 (1989)、78. 井村有希・水沢清行 (2013)、80. 大久保一吉・尾形洋一 (1985)、84. 国土交通省東北地方整備局岩手河川国道事務所 (2011)、153. 菊池恭司ほか (2005)、154. 三浦秀明 (1988)、152.1. 茅橋輝昭ほか (2013)、154. 三浦秀明 (1988)

(伊達 功)

準絶滅危惧 (NT)

オオハンミョウモドキ

鞘翅目 (コウチュウ目) オサムシ科

Elaphrus (Neoelaphrus) japonicus S. Uéno

環境省 なし

- ❖ 形態 体長 8～8.5mm。体に銅光沢があり、頭部は前胸とほぼ同じ幅で、複眼が大きく著しく突出する。触角は短く上翅に達しない。上翅眼状紋はまるい溝で囲まれる。
- ❖ 分布の概要 西和賀町沢内のみで確認された。国内では本州北東部に局地的に分布する。
- ❖ 生息状況 ミズバショウなどの湿性植物の生育する湿地に生息し、成虫越冬する。生息地の湿地は牧野改良により環境改変され、確認されなくなった。周辺部および他地域にも同様の湿地環境がある。近年八幡平市からの生息情報があるが、詳細は不明である。
- ❖ 脅威 湿地の開発による改変。
- ❖ 文献 85. 佐竹邦彦・笠原須磨生 (1985)、155. 波多野良次 (1996)

(伊達 功)

準絶滅危惧 (NT)

ハヤチネミズギワゴミムシ

鞘翅目 (コウチュウ目) オサムシ科

Bembidion (Peryphanes) hayachinense (Nakane)

環境省 なし

- ❖ 形態 体長 5 mm 内外。扁平で黒色、部分的に多少赤味をおび、背面に弱い緑銅光沢がある。胴は頭、前胸よりやや幅広く卵形、翅鞘の条溝は会合部から第 1、2 列目は完全、第 6、7 列は微弱。近似種が多い。
- ❖ 分布の概要 国内では早池峰山から知られるのみ。
- ❖ 生息状況 成虫は 6～9 月に高山帯の岩礫地に発生し、亜高山帯にも出現する。浮き石の下から発見されるほか、礫間を歩行していることもある。かなり高密度に生息する場所が点在し、樹林に近い地域でも認められた。今回の調査でも本種の可能性のある標本が得られたが、近似種との区別が困難なため同定を保留している。
- ❖ 脅威 生息地の多くは法的保護が図られているが、踏み荒らし等による生息地の破壊が脅威である。
- ❖ 特記事項 早池峰山固有種。生息地の中心部は早池峰国定公園の特別地域内にある。
- ❖ 文献 85. 佐竹邦彦・笠原須磨生 (1985)、156. Nakane T (1979)

(伊達 功)

準絶滅危惧 (NT)

ゲンゴロウ

鞘翅目 (コウチュウ目) ゲンゴロウ科

Cybister (Scaphinectes) chinensis Motschulsky

環境省 絶滅危惧 II 類

- ❖ 形態 体長 38mm 前後。体型はタマゴ型で扁平。体色は深緑を帯びた暗褐色で光沢があり、体側縁には前胸背～上翅に黄色の細い縁取りがある。雌の前胸背～上翅にはごく細かい波型模様があるので、雄雌の区別は容易。日本産ゲンゴロウ中、最大種。
- ❖ 分布の概要 県内には広く分布する。国内では九州以北から記録があるが、近年絶滅した県もあり、減少傾向が進んでいる。
- ❖ 生息状況 平地や丘陵の池沼。ヒシ・カンガレイ・ヒルムシロ等、水生植物の豊かな止水系に生息する。農地の中の溜池にも生息が確認されている。水生昆虫・小型魚類・両生類・甲殻類などを捕食する。
- ❖ 脅威 外来種 (ブラックバス・ブルーギル・アメリカザリガニ・ウシガエル) や養鯉。溜池の利用放棄による池の埋め立て。
- ❖ 文献 26. 森正人・北山昭 (2002)、27. 三田村敏正ほか (2017)

(成瀬 健一)

準絶滅危惧 (NT)

エゾゲンゴロウモドキ

鞘翅目 (コウチュウ目) ゲンゴロウ科

Dytiscus marginalis czerskii Zaitzev

環境省 絶滅危惧 II 類

- ❖ 形態 体長 34mm 前後。体型は長卵型。体色は黒褐色で、前胸背の周囲と上翅の体側縁に黄色の細い縁取りがある。雄の上翅には光沢があり、雌にはスジ状の縦溝がある。国内では地域により、雌の上翅に縦溝が現れないタイプも生息するが、県内は溝ありタイプである。
- ❖ 分布の概要 生息池は奥羽山系に多く知られるが、北上高地の岩洞湖周辺でも確認された。国内では中部地方以北の 10 道県から記録がある。
- ❖ 生息状況 比較的高地にある池沼に生息。水生昆虫・小型魚類・両生類・甲殻類などを捕食する。
- ❖ 脅威 外来種 (ブラックバス・ブルーギル・アメリカザリガニ・ウシガエル) や養鯉。溜池の利用放棄による池の埋め立て。
- ❖ 文献 26. 森正人・北山昭 (2002)、27. 三田村敏正ほか (2017)、157. 伊藤智 (2007)

(成瀬 健一)

準絶滅危惧 (NT)

ナガケシゲンゴロウ

鞘翅目 (コウチュウ目) ゲンゴロウ科

Hydroporus uenoi Nakane

環境省 なし

- ❖ 形態 体長 3.5mm 前後。体型は長楕円形で、体色は艶の無い濃褐色である。
- ❖ 分布の概要 滝沢市の湿原のみで確認している。国内では北陸地方以北の 7 県から記録がある。
- ❖ 生息状況 林内のミズバショウが生育する浅い水たまりを好むようである。日当たりの良い水たまりからは見つからない。ボウフラ・アカムシ・ヨコエビ等を捕食していると思われる。2021 年にも上記の場所で生息を確認したが、個体数が多い。
- ❖ 脅威 湿原の乾燥化。周辺の宅地化・農地化による水質汚濁。
- ❖ 文献 26. 森正人・北山昭 (2002)、27. 三田村敏正ほか (2017)、87. 成瀬健一 (2008)
(成瀬 健一)

準絶滅危惧 (NT)

キボシツブゲンゴロウ

鞘翅目 (コウチュウ目) ゲンゴロウ科

Japanolaccophilus niponensis (Kamiya)

環境省 準絶滅危惧

- ❖ 形態 体長は 3 mm 前後。体型は逆卵型で、背は尾部に向かうにつれ細く低くなる。上翅は光沢のある黒褐色で片翅につき黄色い 6 個の小紋がある。
- ❖ 分布の概要 盛岡市米内川、花巻市石鳥谷町葛丸川、北上市和賀町鈴鴨川で確認された。国内では九州以北の 12 道県から記録がある。
- ❖ 生息状況 河川の上・中流域の清流に生息する。成虫は川底が砂質の水深がおおむね 50cm 以上の淀みにあるヨシ等の水中根の付近に見受けられることが多い。ボウフラ・アカムシ・ヨコエビ等を捕食していると思われる。盛岡市では 2006 年に生息を確認したが、生息数は少ない。調査が進めばさらに多くの河川から発見されると思われる。
- ❖ 脅威 河川改修による護岸の為のコンクリート化。
- ❖ 文献 26. 森正人・北山昭 (2002)、27. 三田村敏正ほか (2017)、158. 成瀬健一 (2009)
(成瀬 健一)

準絶滅危惧 (NT)

ヒラサワツブゲンゴロウ

鞘翅目 (コウチュウ目) ゲンゴロウ科

Laccophilus hebusuensis Watanabe & Kamite

環境省 なし

- ❖ 形態 体長 3.5mm 前後で、体型は逆卵形。背部は微細な網状印刻に密に覆われる。頭部と前胸背は黄土色で上翅は黒褐色の縦縞模様が全体に広がる。上翅上側には大小の黄紋がある。
- ❖ 分布の概要 滝沢市で生息が確認されたが、県内の分布状況は今後の調査となる。国内では本州（青森県、岩手県、山形県、福島県、栃木県、千葉県）から記録されている。
- ❖ 生息状況 湿地のコケの中で生活している。
- ❖ 脅威 田の近くの溜池の取り壊しや鯉・ブラックバス・アメリカザリガニ・ウシガエル等の繁殖、農薬の流入など。
- ❖ 特記事項 本県で生息情報が得られたため、準絶滅危惧として新たに追加した。
- ❖ 文献 159. 茅橋輝昭 (2023)、160. 平澤桂ほか (2021)
(成瀬 健一)

準絶滅危惧 (NT)

ツガルホソシテムシ

鞘翅目 (コウチュウ目) オサシテムシ科

Lyrosoma pallidum (Eschscholtz)

環境省 なし

- ❖ 形態 体長 4～4.5mm で最大幅の 2.5 倍強、暗褐色で平たくヒョウタン形、シテムシ類としては細身で、前胸が異例に小さく、一見ゴミムシ類に似る。翅鞘に条溝があり、後翅は退化する。
- ❖ 分布の概要 宮古市で記録されたのみ。国内では北海道、東北地方北部の海岸に分布する。日本固有種。
- ❖ 生息状況 海浜の石下や打ち寄せられた海草下から成虫が採集されている。発見地点が少なく、また、後翅が退化し移動力が乏しいと思われることから、特定の生息場所と結びついている可能性がある。県内では最初の記録以降の報告がなく、生息地の宮古市は東日本大震災で甚大な被害を受け、その後新たな防潮堤等が建築された。
- ❖ 脅威 海岸の人工化。また、東日本大震災後の復旧工事の影響も懸念される。
- ❖ 文献 161. 高橋泰美 (1993)、162. 中村裕之 (1985)

(伊達 功)

準絶滅危惧 (NT)

オオクワガタ

鞘翅目 (コウチュウ目) クワガタムシ科

Dorcus hopei binodulosus Waterhouse

環境省 絶滅危惧Ⅱ類

- ❖ 形態 体長 25～53mm、黒色、雄の頭楯は著しく幅広く横長であるが、小型の個体は狭くなり、前縁は弧状に湾入する。大顎は強大、大型個体では中央前に大きい内歯がある。前胸背板は幅広く、側縁の中央前方に斜めのえぐれがある。雌は全体強い光沢があり、前胸背板の側縁は前方に狭まる。
- ❖ 分布の概要 これまで盛岡市、宮古市新里地区、花巻市、一関市で記録されている。近年、分布地はさらに広い地域であることが確認された。日本全土に分布する。
- ❖ 生息状況 太い立ち枯れや風倒木などが存在する原生林に生息する。成虫は夜間活動性で、日中は樹洞などに潜み、夜に樹液に来るほか灯火にも飛来する。幼虫は腐朽した木材を食べて育つ。原生林の指標昆虫。
- ❖ 脅威 人気の高い種で、最も採集圧が強い昆虫の一つである。人工繁殖用に幼虫を採集するための樹洞の破壊、飼育系統の野生化による遺伝子かく乱も懸念される。森林伐採、特に各種自然エネルギー関連施設建設に伴う森林の消失も脅威である。
- ❖ 文献 163. 伊師正男ほか (1992)、164. 伊藤智・野中俊文 (2003)、165. 熊谷賢 (1999)、166. 高橋泰美・菊池透 (1994)、167. 佐竹邦彦 (2007)

(伊達 功)

準絶滅危惧 (NT)

シナノエンマコガネ

鞘翅目 (コウチュウ目) コガネムシ科

Onthophagus (Onthophagus) bivertex Heyden

環境省 なし

- ❖ 形態 体長 6.3～10.4mm。体色は黒色でツヤは鈍く、上翅はときに褐色を帯びる。♂は頭部に牛角状の一对の角を持つ。♀の頭部に2本の横隆起を持つが、前方は不明瞭。前胸背板に後方に開いた眼状点刻を散布し、近縁種とはこの点で区別できる。
- ❖ 分布の概要 県内では主に北上山地の各地に記録がある。全国各地に分布するが、北日本に多い。全国的に個体数が減少している。
- ❖ 生息状況 5～10月にかけて草丈の低い草原の牛、シカ糞に見られる。県内各地に広く見られたが、近年は産地が限られ減少傾向にある。産地内の個体数は比較的多い。良好な草原の指標的な種である。
- ❖ 脅威 牛糞形状の変化と草原の高文化。太陽光発電、風力発電等の開発による生息可能草原の消失。
- ❖ 文献 2. 岡島秀治・荒谷邦夫 (2012)、3. 早川博文・千葉武勝 (1983)、30. 砂田比左男 (2010)
(砂田 比左男)

準絶滅危惧 (NT)

ヤマトエンマコガネ

鞘翅目 (コウチュウ目) コガネムシ科

Onthophagus (Strandius) japonicus Harold

環境省 準絶滅危惧

- ❖ 形態 体長 7～11mm。体色は黒色で光沢をもつ。上翅は黄褐色で黒斑をもち、黒斑の大きさには変異が大きい。♂は前胸背板左右にこぶ状突起をもち、♀の突起は鈍く丸い。上翅が黄褐色のエンマコガネは本種だけなので、同定に困難はない。
- ❖ 分布の概要 県内では八幡平市、一戸町、岩泉町など県北部に記録がある。国内では本州に分布する。
- ❖ 生息状況 国内では4月から見られ、新成虫の出現する8月から秋に個体数が多いという。県内では5～6月に記録されている。もともと生息密度は低く局地的。近年では岩泉町で確認されている。現在確実な産地は知られていないが、散発的に目撃情報が伝わってくるので、生息は確実と思われる。
- ❖ 脅威 オープンランド性が強いいため、牛糞形状の変化とあわせ草原の高文化が影響している。太陽光発電、風力発電等の開発による生息可能草原の消失。
- ❖ 文献 2. 岡島秀治・荒谷邦夫 (2012)、3. 早川博文・千葉武勝 (1983)、32. 塚本圭一ほか (2009)
(砂田 比左男)

準絶滅危惧 (NT)

クロサワヘリグロハナカミキリ

鞘翅目 (コウチュウ目) カミキリムシ科

Eustrangalis (Eustrangalis) anticereductus Hayashi

環境省 なし

- ❖ 形態 体長 12～15mm。細長い筒形で肩部がやや張り出し、上翅は後半の外縁が黒く、後方へ細まる。同属のカエデノヘリグロハナカミキリとは、前胸に黒紋を欠くことや赤みが強いことで区別できる。
- ❖ 分布の概要 宮古市川井からのみ記録されている。国内では北海道、本州、四国、九州に分布するが、発見されていない県がかなりある。日本固有種。
- ❖ 生息状況 県内での記録は早池峰山北麓に集中しており、日陰のヤグルマソウ等の花から採集されている。1990 年代までかなりの個体が採集されており、近年も少ないながら確認情報がある。曇天時や早朝、夕方に活動するため、確認が難しいことを差し引いても、生息地が局所的であることを示唆している。
- ❖ 脅威 森林伐採、特に各種自然エネルギー関連施設建設に伴う森林の消失。
- ❖ 特記事項 東北地方では北上高地と阿武隈山地のみから記録されている。本来の食樹はキハダであるが、近年外来種のハリエンジュを食樹として個体数を増やしている地域がある。本県ではそのような事例は報告されていない。
- ❖ 文献 36. 榎原寛ほか (1997)

(伊達 功)

準絶滅危惧 (NT)

シラカハナカミキリ

鞘翅目 (コウチュウ目) カミキリムシ科

Judolia parallelpipeda (Motschulsky)

環境省 なし

- ❖ 形態 長約 8～14mm、暗灰褐色で筒形、翅鞘に淡黄褐色の 3 横条がある。県内に多いヨツスジハナカミキリより小形で横条が 1 本少ない。同属のヤマトキモンハナカミキリは生息環境が異なる。
- ❖ 分布の概要 宮古市川井と花巻市大迫町で記録されている。国内では北海道の北・東部と山地、中部地方と関東地方北部の高地、及び早池峰山に隔離分布し、本州では早池峰山以外はごく少ないといわれる。
- ❖ 生息状況 早池峰山の主に 1500m を越す高地に生息し、マルバシモツケやセリ科の花上に成虫を見る。1960 年代までと比較すれば減少し、発生時期に山頂を訪れても確認できないことが増えた。山麓部や周辺でも古い記録があるが、その場に常発するとは考え難い。
- ❖ 脅威 生息地は自然環境保全地域、国定公園等の法的保護を受けており、当面は人為による大きな影響はないと考えられる。しかし早池峰山では高山帯までニホンジカの食害が及んでおり、本種の寄主植物は未知であるが、影響を受ける可能性がある。
- ❖ 特記事項 前回の改定では、生息地は保護区であり個体群は健全として、C ランクから D ランクに変更した。しかし、今回ニホンジカによる影響等を考慮し、D ランクから準絶滅危惧に変更した。
- ❖ 文献 36. 榎原寛ほか (1997)、168. 伊達功 (2013)

(伊達 功)

準絶滅危惧 (NT)

シロヘリトラカミキリ

鞘翅目 (コウチュウ目) カミキリムシ科

Anaglyptus (Aglaophis) colobothaeoides (Bates)

環境省 なし

- ❖ 形態 体長 10.0～13.5mm。背面が平たい筒形で、上翅基半は暗赤褐色で中央部に白色微毛帯があり、後半は黒い。スギの害虫スギノアカネトラカミキリに似るが、触角第3節の内角は刺状に突出しない。
- ❖ 分布の概要 県内では久慈市、岩泉町、宮古市、盛岡市の北上高地で記録がある。国内では北海道と本州に分布する。本州では局所的であるが、近年遇産の記録を含め新産地の報告がある。
- ❖ 生息状況 1980 年前後に宮古市川井の狭い範囲で数個体が記録され、その後も未報告ながら北上高地の他の地点で採集情報があつた。今回の調査で盛岡市の北上高地で数個体を確認した。過去の記録はカンボク等に訪花していたものであるが、近年以降のものは伐採された広葉樹から得られている。
- ❖ 脅威 森林伐採、特に各種自然エネルギー関連施設建設に伴う森林の消失。
- ❖ 特記事項 本州での確実な産地は岩手県と長野県のみとされていたが、より広い範囲に分布している可能性が高くなり、県内でも個体群が維持されていると考えられることから、B ランクから準絶滅危惧に変更した。
- ❖ 文献 35. 藤田宏ほか (2023)、36. 榎原寛ほか (1997)、169. 渡辺健・今井初太郎 (2015)
(伊達 功)

準絶滅危惧 (NT)

コトラカミキリ

鞘翅目 (コウチュウ目) カミキリムシ科

Plagionotus pulcher (Blessig)

環境省 準絶滅危惧

- ❖ 形態 体長 12.0～15.5mm。和名と異なり、トラカミキリとしてはやや大きめ。同属のクリストフコトラカミキリに似るが、上翅基部から2本目の斜帯は前方に伸びて小楯板に達する。
- ❖ 分布の概要 久慈市、岩泉町、宮古市 (川井および新里地区) から記録されている。国内では北海道と本州に分布するが、局所的な傾向がある。
- ❖ 生息状況 1970～80 年代には早池峰山北麓の集材所等に少なくなかったが、近年は減少した。北上高地中北部では近年も記録されている。前回の改定以降の報告はないが、今回の調査期間中にも宮古市等で確認情報があつた。
- ❖ 脅威 森林伐採、特に各種自然エネルギー関連施設建設に伴う森林の消失。
- ❖ 特記事項 記録は貯木場や伐採跡地での確認例がほとんどで、自然状態における生息状況は不明な点が多い。
- ❖ 文献 36. 榎原寛ほか (1997)、168. 伊達功 (2013)、170. 伊達功 (2002)、171. 平野俊秀 (2014)
(伊達 功)

準絶滅危惧 (NT)

キジマトラカミキリ

鞘翅目 (コウチュウ目) カミキリムシ科

Xylotrechus (Xylotrechus) zebratus Matsushita

環境省 なし

- ❖ 形態 体長 10～15mm。円筒形で黒～黒褐色、前胸は球状、翅鞘の4横条は灰白～黄白色で細く、最初の1本は「八」の字形。県内に体型や地色が似た種を産するが、翅鞘の条紋数や形が異なる。
- ❖ 分布の概要 宮古市川井で記録されている。国内では本州北・中部に分布し、東北地方北部では生息域が比較的局限される。ほかに近畿地方及び北九州の局部に記録がある。日本固有種。
- ❖ 生息状況 早池峰山の針葉樹林に生息し、コメツガが食樹と考えられる。規制が厳しい地域であるためか報告は少ないが、コメツガの衰弱木や新しい倒木に多くの個体が見いだされることがあり、今回の調査でも複数の個体が確認された。県内の他のコメツガ林では確認されていない。
- ❖ 脅威 国定公園等の法的保護を受けており、人為による大きな影響はないと考えられる。ただし、ニホンジカの食害による影響が生じる可能性がある。
- ❖ 特記事項 ニホンジカによる針葉樹稚樹の食害が将来の脅威となる可能性があることから、D ランクから準絶滅危惧に変更した。
- ❖ 文献 36. 楨原寛ほか (1997)、168. 伊達功 (2013)

(伊達 功)

準絶滅危惧 (NT)

クロスジカメノコハムシ

鞘翅目 (コウチュウ目) ハムシ科

Cassida lineola Creutzer

環境省 なし

- ❖ 形態 体長 5.7～8.7mm。体背面は赤褐色で、上翅の会合部は黒色であるほか各6個の明瞭な黒紋を装う。上翅の点刻は一般に不規則であるが一部は列状をなす。体腹面は黒色で肢は黄褐色である。
- ❖ 分布の概要 盛岡市、葛巻町などわずかな地域のみで記録されているが、詳細は不明。国内では本州の東北地方に局所的に分布する。
- ❖ 生息状況 食草はヨモギ類であるが、詳しい生態等については不明である。個体数は非常に少ない。生息環境は低地のやや乾いた草原環境であるが、一部落葉広葉樹林内の谷沿いのヨモギから採集された例もある。前回の改定以降、新たな知見は得られていない。安定的な草原環境の指標種。
- ❖ 脅威 低地草原の開発。
- ❖ 文献 108. 木元新作・滝沢春雄 (1994)

(伊達 功)

準絶滅危惧 (NT)

ミヤマチャバネセセリ

鱗翅目 (チョウ目) セセリチョウ科

Pelopidas jansonis (Butler)

環境省 なし

- ❖ 形態 開張 40mm。翅表は褐色で少し黄緑色を帯びる。前翅には 8、9 個の半透明白色斑紋がやや環状に配列する。後翅の 2 小紋は雌では明瞭である。裏面は黄褐色で前翅の斑紋は表と同じ、後翅には 5 白紋が横に配列するし、中室にも白斑が有るのが特徴。
- ❖ 分布の概要 久慈市から県南の陸前高田市まで各地から記録がある。国内では本州、四国、九州に分布する。
- ❖ 生息状況 年 2 回発生である。幼虫の食草はススキなどのイネ科で筒型の巣を造る。ススキなどの葉で蛹化して越冬し、翌春 5 月ころに羽化する。2 回目の成虫は 9 月ころに見られる。既知産地で絶滅したところもあり、個体数は少なくなっている。
- ❖ 脅威 ススキなどの需要がなくなり、ススキ原が牧草地や採草地への転換や耕地化して生息地が失われること。
- ❖ 文献 7. 岩手虫の会編 (1988)、172. 太田圭一 (2017)、173. 平野俊秀 (2022)

(成瀬 健一)

準絶滅危惧 (NT)

ヒメシロチョウ

鱗翅目 (チョウ目) シロチョウ科

Leptidea amurensis (Menetries)

環境省 絶滅危惧 I B 類

- ❖ 形態 開張 40mm。胸腹部は華奢で白鱗が散布する。翅は白色で前翅の翅端に黒色の斑紋が又基部近くは暗色である。後翅の表面には斑紋がない。前翅裏面白色で基部から翅端にかけて暗色に曇る。後翅は黄白色で翅脈に沿って淡黒色。雌の前翅の翅端は丸みを帯びる。
- ❖ 分布の概要 産地は県内全域に局地的に散在する。国内では北海道、本州、九州に分布する。
- ❖ 生息状況 県内では年 4 回の発生である。幼虫の食草はツルフジバカマ、ビロードクサフジであり、食草のある明るい草地を飛び交っている。全国的にも個体数が少なくなっているといわれているが、県内でも減少傾向にある。
- ❖ 脅威 宅地化等でツルフジバカマが茂る草地が少なくなっているほかに、河川敷などの管理のために刈り払いがされる時期とこの蝶の生育期の関係で脅威を受ける場合がある、しかし草刈りは必要で食草が繁茂し過ぎると成虫が寄りつかなくなる。
- ❖ 文献 7. 岩手虫の会編 (1988)、174. 奥俊夫 (2010)、175. 平野俊秀 (2009)

(成瀬 健一)

準絶滅危惧 (NT)

クロミドリシジミ

鱗翅目 (チョウ目) シジミチョウ科

Favonius yuasai Shirozu

環境省 なし

- ❖ 形態 開張 40mm。雄の翅表は暗銅緑色、裏面の地色は雄では濃い褐色、雌では褐色で前翅外縁後角近くに数個の黒色紋がある。後翅には白色に縁どられた褐色のW線と外側に2本の横線がある。後角とその近くに比較的大きな橙色紋がある。
- ❖ 分布の概要 盛岡市、宮古市、一関市とその周辺、気仙郡から記録されているが、減少傾向にある。国内では本州、九州に分布する。
- ❖ 生息状況 年1回、初夏の候に成虫が羽化、早朝と夕刻に活動する。雌は植樹であるクヌギ休眠芽の基部や枝の分岐に産卵する。卵越冬。孵化した幼虫は芽に入って摂食し、次第に葉を食べて成長する。
- ❖ 脅威 クヌギの薪炭材としての需要がなくなり減少し、さらに宅地造成などで伐採されること。
- ❖ 特記事項 本種は 1947 年に白水 隆によって新種として記載された。その際の副模式標本の雄1個体は盛岡市で小学生が採集し、平野修一が九州大学に送付したものである。盛岡周辺は北限の産地。
- ❖ 文献 7. 岩手虫の会編 (1988)、176. 河野勝行・山本勝利 (1992)、177. 小田眷良 (2005)
(成瀬 健一)

準絶滅危惧 (NT)

オオゴマシジミ

鱗翅目 (チョウ目) シジミチョウ科

Phengaris arionides takamukui (Matsumura)

環境省 準絶滅危惧

- ❖ 形態 開張 40mm。翅表は藍青色、外縁は幅広く黒褐色で小黑紋が散在する。裏面は藍色味を帯びた灰白色、黒紋が散在する。ゴマシジミに似るが後翅裏面が青色みを帯びることと前翅の黒紋が大きい事が特徴である。
- ❖ 分布の概要 奥羽山系の山中から記録されている。国内では北海道、本州に分布する。
- ❖ 生息状況 奥羽山系の山地に生育するクロバナヒキオコシが食草で7月下旬から8月上旬に成虫が発生し食草の花穂に産卵し、幼虫は花穂を食べて成長し4令後はシワクシケアリの巣に運ばれてアリの幼虫を食べる、アリは幼虫の蜜腺から分泌される蜜を吸っている。そのまま越冬して翌年巣内で蛹化する。食草の繁茂する落葉樹林帯の開けた谷筋やその源頭部で見られる。何れも個体数は少ない。ブナ自然林の指標種。
- ❖ 特記事項 ブナ自然林の中の谷筋が生息地で、ブナが伐採されスギ等の針葉樹などの植林により林床が薄暗い状態になり、食草が生育できないこと。
- ❖ 文献 7. 岩手虫の会編 (1988)、50. 白水隆 (2006)
(成瀬 健一)

準絶滅危惧 (NT)

ヒヨウモンチョウ

鱗翅目 (チョウ目) タテハチョウ科

Brenthis daphne iwatensis (Okano)

環境省 準絶滅危惧 (北海道・本州北部亜種)

- ❖ 形態 開張 60mm。前後翅共に橙黄褐色の地色に黒色の小紋が多数散在する。裏面は淡色。後翅基部半分は暗黄緑色で褐色の波状の黄線が数本ある。外半部は淡黄色で五個の濃褐色紋がある。外縁に沿う青色の帯が不明瞭なのが特徴である。
- ❖ 分布の概要 遠野市より北部に分布する。本種は国内では北海道、本州に分布する。
- ❖ 生息状況 年一回7月中旬頃に羽化する、食草のナガボノシロワレモコウやシモツケ類の育つ溪流や湿原の周辺や日当たりのよい草原に見られる。食草の葉裏に産卵する、孵化した幼虫は葉を摂食して、二、三令で越冬する。翌春さらに摂食し食草の地際に降りて蛹化する。
- ❖ 脅威 河岸の整備、湿地の耕地化や宅地化等でナガボノシロワレモコウやシモツケ類の生育地が狭められていること。
- ❖ 特記事項 北海道と東北地方の個体および関東地方と中部地方の個体は別亜種とされており、北日本亜種の模式産地は二戸市、滝沢市、宮古市である。
- ❖ 文献 7. 岩手虫の会編 (1988)、178. 太田圭一 (2015)、179. 平野俊秀 (2009)

(成瀬 健一)

準絶滅危惧 (NT)

オオムラサキ

鱗翅目 (チョウ目) タテハチョウ科

Sasakia charonda (Hewitson)

環境省 準絶滅危惧

- ❖ 形態 開張 90mm。雄の前後翅表面の基部より中央部にかけて紫色でこの中に白紋がある。他の部分は黒褐色で小黄色紋が散在する。後翅の内縁角には紅色紋がある。雌は紫色部が不明瞭で全体的に暗褐色で白や黄色紋の配置は雄とほぼ同じ、裏面は雌雄共に黄色味を帯びている。
- ❖ 分布の概要 県内各地から記録されている。国内では北海道、本州、四国、九州に分布する。
- ❖ 生息状況 年1回6、7月に羽化した成虫は樹液を訪れて吸液をする。エノキ、エゾエノキの葉や細い枝に産卵する。幼虫は葉を食べて成長して4令幼虫で樹の根元の枯葉、石の裏で越冬する。翌春樹に登りさらに葉を食べて成長し蛹化する。食樹の伐採によって個体数は少なくなっている。
- ❖ 脅威 樹液を分泌する樹木と食樹であるエノキ、エゾエノキが混合する雑木林が生存に欠かせないが、薪炭の需要が減り雑木林から針葉樹林に変わることに影響がある。
- ❖ 文献 7. 岩手虫の会編 (1988)、52. 奥昭夫 (2000)

(成瀬 健一)

準絶滅危惧 (NT)

ベニヒカゲ

鱗翅目 (チョウ目) タテハチョウ科

Erebia neriene (Böber)

環境省 準絶滅危惧

- ❖ 形態 開張 45mm。翅は黒褐色で前翅に黄褐色の幅広い横帯があり、その中に青白色の中心点を持つ黒紋がある。後翅外縁に沿って橙色紋がある。裏面は淡色で前翅では表と同じ紋様で後翅では外縁に平行して灰白色帯がある。
- ❖ 分布の概要 焼石岳山塊、早池峰山群、和賀岳山塊に産する。国内では北海道、本州に分布する。
- ❖ 生息状況 ハイマツ帯の日当たりのいい草原に生息する蝶である。8月上、中旬に成虫が羽化し、花に来て吸蜜をする。雌は幼虫の食草以外の草や落ち葉に産卵する。孵化した幼虫はイネ科やカヤツリグサ科の草本に移動して摂食する。3令位で越冬して、翌年春から摂食して成長し蛹化する。
- ❖ 脅威 道路建設やスキー場の開発による生息地の改変。また、ニホンジカの北上による早池峰山周辺のハイマツ帯の草本の食害が植生を変化させること。
- ❖ 特記事項 地理的変異が多く、日本産だけでも 20 程の亜種が提案されている。その中には早池峰山、焼石岳をそれぞれ独立の亜種にする意見もあり、各産地の個体が維持されることが重要である。
- ❖ 文献 7. 岩手虫の会編 (1988)、180. 中谷貴寿・北川朝生 (2000)

(成瀬 健一)

準絶滅危惧 (NT)

ヒメセスジスカシバ

鱗翅目 (チョウ目) スカシバガ科

Pennisetia hylaeiformis assimilis Arita

環境省 なし

- ❖ 形態 開長 20~31.5mm。前翅後方の透明紋が同属のセスジスカシバ、ミナミセスジスカシバでは前翅基部から横脈紋までであるのに対して、本種ではその半分しかないことで区別される。
- ❖ 分布の概要 2020 年に早池峰山で記録された。東北地方で唯一の記録でもある。国内では北海道、本州 (中部地方) の山地に分布している。
- ❖ 生息状況 成虫の雌は食草と考えられるカナヤマイチゴの周辺で見られるが少ない、稀に葉上に静止していることもある。また、カナヤマイチゴの葉裏の縁に本種のものと思われる卵が発見されている。雄は合成フェロモントラップに誘引された個体だけが採集されており、それ以外の発見は困難である。
- ❖ 脅威 シカの食害が脅威となっている。林道沿いに多く見られる食草と思われるカナヤマイチゴが他の植物と同様にシカに食べられ、年々減少している。
- ❖ 特記事項 最近記録された希少な種であるため、準絶滅危惧として新たに追加した。
- ❖ 文献 181. 岩手植物の会編 (1970)、182. 三浦秀明 (2020)、183. 有田豊・池田真澄 (2000)

(三浦 秀明)

準絶滅危惧 (NT)

ミヤマコホソハマキ

鱗翅目 (チョウ目) ハマキガ科

Aethes rutilana rutilana (Hübner)

環境省 なし

- ❖ 形態 開張 11mm 内外。前翅は橙色をおびた淡黄色で基部および外縁まで暗紫灰色の3横条が並列し、外側の2条は後方でV字状に合する。後翅と腹部は灰褐色。
- ❖ 分布の概要 国内では早池峰山からのみ記録されている。
- ❖ 生息状況 寄主植物はビャクシンで、成虫は6月下旬～7月にかけて出現する。早池峰山上部低木林のビャクシンがある場所に広く認められ、生息密度は高い。
- ❖ 脅威 踏みつけやシカの食害による低木林相の変化。
- ❖ 文献 184. 井上寛ほか (1982)

(吉田 勝一)

準絶滅危惧 (NT)

タカネハマキ

鱗翅目 (チョウ目) ハマキガ科

Lozotaenia kumatai Oku

環境省 なし

- ❖ 形態 開張 25mm 内外。翅は褐色、静止状態で釣鐘形となる。前翅に細かい網目模様があり、断続する中央の斜条は暗褐色で外側にも暗色紋の痕跡がある。後翅は灰白色。
- ❖ 分布の概要 北海道の高地と北東部、本州の早池峰山と白山を含む中部山岳に分布する。
- ❖ 生息状況 寄主植物はハイマツである。成虫は7月後半から8月前半に出現する。早池峰山の上部に認められ、ブナ帯にも出現したことがある。
- ❖ 脅威 踏みつけやシカの食害による低木林相の変化。
- ❖ 文献 185. 奥俊夫 (1986)

(吉田 勝一)

準絶滅危惧 (NT)

ウンモンサザナミヒメハマキ

鱗翅目 (チョウ目) ハマキガ科

Epiblema rimosana (Christoph)

環境省 なし

- ❖ 形態 開張 17mm 内外。翅は黄土色、前翅中央の後半は淡色で両側は鉛色となり、全面に暗灰褐色の波状横線が並ぶ。後翅は暗灰褐色で縁毛は乳白色である。
- ❖ 分布の概要 盛岡市と宮古市川井に記録がある。国内では北海道と本州に分布する。
- ❖ 生息状況 寄主植物は不明。成虫は林間や林縁のやや多湿な草地に5月から6月にかけて出現する。盛岡市では1970年代早々に絶滅し、宮古市川井でも同じ頃に激滅した。最近の生息情報は得られていない。
- ❖ 脅威 生息地の乾燥化。
- ❖ 文献 186. 奥俊夫 (1978)

(吉田 勝一)

準絶滅危惧 (NT)

ミドロミズメイガ

鱗翅目 (チョウ目) ツトガ科

Neoschoenobia testacealis Hampson

環境省 なし

- ❖ 形態 開張 23~28mm, 雄よりも雌は大型。前翅は褐色で黒い横線がある。後翅は一様に淡褐色。
- ❖ 分布の概要 奥州市胆沢と一関市で記録されている。国内では北海道、本州、九州に分布する。
- ❖ 生息状況 寄主植物はヒメコウホネとコウホネ, ジュンサイ, ヒシで, 成虫は6~9月に出現する。県南のため池や河川敷に見られるが、ため池の消失などによって発生数が減少していると考えられる。
- ❖ 脅威 食草のあるため池の改変・消失。
- ❖ 文献 55. 土井信夫 (2005)、187. 吉安裕 (1989)、188. 吉安裕 (2011)

(吉田 勝一)

準絶滅危惧 (NT)

ヒメコミズメイガ

鱗翅目 (チョウ目) ツトガ科

Parapoynx rectilinealis Yoshiyasu

環境省 なし

- ❖ 形態 開張 11mm 内外。前後翅は黄色地、前翅外側の白紋は直線的で黒で縁どられている。
- ❖ 分布の概要 滝沢市の湿原のみで確認されている。県外では愛知県、三重県、滋賀県、京都府、宮崎県に局地的に分布する。本県が分布の北限で、東北地方唯一の産地である。
- ❖ 生息状況 寄主植物および幼虫期は不明。成虫は7月中旬~9月上旬に少ないながら広く出現する。
- ❖ 脅威 湿地の改変・消失。
- ❖ 特記事項 県内の生息地が当湿原のみであることがほぼ確定されたため、情報不足から準絶滅危惧へ変更した。
- ❖ 文献 55. 土井信夫 (2005)、135. 長谷川勉・佐竹邦彦 (1995)、189. 間野隆裕 (1996)

(吉田 勝一)

準絶滅危惧 (NT)

クロフカバシヤク

鱗翅目 (チョウ目) シヤクガ科

Archiearis notha okanoi (Inoue)

環境省 絶滅危惧II類

- ❖ 形態 開張 27~31mm。前翅は黒褐色、後翅は赤橙色で同属のカバシヤクに酷似する。雄の触角の形状の違いなどによって区別できる。
- ❖ 分布の概要 雫石町、滝沢市、盛岡市、紫波町、宮古市に産する。国内では本県以外に青森県、秋田県、長野県に分布する。
- ❖ 生息状況 食樹はヤマナラシと植栽されたイタリアポプラである。成虫は昼行性で3月下旬~5月上旬に出現する。1996年以降記録がなかったが、2016年に滝沢市で再確認された。同時期に青森県、秋田県、長野県においても記録されている。最近、2023年には新産地として宮古市で採集されたことは注目される。
- ❖ 脅威 ヤマナラシの伐採。
- ❖ 特記事項 盛岡市繫が亜種 *okanoi* の模式産地である。
- ❖ 文献 55. 土井信夫 (2005)、190. 斎藤修・片山千賀志 (1976)、191. 三井秀男 (2017)、192. 三浦秀明 (2023)

(吉田 勝一)

準絶滅危惧 (NT)

シロスジキンウワバ

鱗翅目 (チョウ目) ヤガ科

Diachrysia zosimi (Hübner)

環境省 なし

- ❖ 形態 開張 34mm 内外, 前翅頂は尖り、前翅中央部は広く金緑色を帯びる。
- ❖ 分布の概要 盛岡市、滝沢市から確認されている。国内では北海道と中部以北の本州に分布する。
- ❖ 生息状況 寄主植物はナガボノシロワレモコウとホザキシモツケとされるが、本県では生息地の状況からナガボノシロワレモコウと推定される。成虫は 7～8 月に出現する。
- ❖ 脅威 ナガボノシロワレモコウが生育する湿地の改変。
- ❖ 文献 55. 土井信夫 (2005)、193. 小木広行 (1986)

(吉田 勝一)

準絶滅危惧 (NT)

ウスジロケンモン

鱗翅目 (チョウ目) ヤガ科

Acronicta (Viminia) lutea (Bremer & Grey)

環境省 準絶滅危惧

- ❖ 形態 開張 38～42mm, 前翅は黒褐色、後翅は灰黄色である。ナシケンモンに似るが、後翅内半が白いことで区別できる。
- ❖ 分布の概要 雫石町、盛岡市、北上市、岩泉町で記録されている。国内では北海道と本州（青森県、岩手県、秋田県、長野県）に局地的に分布する。
- ❖ 生息状況 寄主植物はワレモコウとされるが、本県では生息地の状況からナガボノシロワレモコウと推定される。成虫は 5～6 月に出現する。最近では 2021 年に岩泉町で確認された。
- ❖ 脅威 ナガボノシロワレモコウの生育する湿地の消失。
- ❖ 文献 55. 土井信夫 (2005)、194. 岡野磨瑛郎 (1959)、195. 佐竹邦彦 (1971)

(吉田 勝一)

準絶滅危惧 (NT)

シロスジツマキリヨトウ

鱗翅目 (チョウ目) ヤガ科

Callopietria albolineola (Graeser)

環境省 なし

- ❖ 形態 開張 25～28mm。前翅は灰色を帯びた黒色で、明瞭な白い横線と特徴的な斑紋パターンを示す。
- ❖ 分布の概要 二戸市、盛岡市、岩泉町、北上市、早池峰山から記録がある。国内では北海道から九州まで局所的に分布する。
- ❖ 生息状況 寄主植物はイワヒバである。成虫は 7～8 月頃に出現する。最近では 2021 年に岩泉町乙茂で確認された。
- ❖ 脅威 イワヒバ生育地の衰亡。
- ❖ 文献 55. 土井信夫 (2005)、196. 佐竹邦彦 (1975)、197. 小野泰正 (1981)

(吉田 勝一)

準絶滅危惧 (NT)

タカネショウブヨトウ

鱗翅目 (チョウ目) ヤガ科

Amphipoea asiatica (Burrows)

環境省 なし

- ❖ 形態 開張 32mm 内外。前翅は濃褐色～橙褐色，斑紋ともに変異が大きい。ショウブヨトウと酷似し外観での同定は困難である。
- ❖ 分布の概要 葛巻町、岩泉町、盛岡市の北上高地から確認されている。国内では北海道、本州（東北地方、関東地方、中部地方）の山地に分布する。
- ❖ 生息状況 幼虫はイネ科植物の根茎部に食入るとされる。成虫は 7～8 月に高地草原に出現する。生息地の個体数は少なくないが、放牧を止めたことによる遷移で生息環境は減少している。最近の記録は知られていない。
- ❖ 脅威 高地草原の衰退。
- ❖ 文献 55. 土井信夫（2005）、198. 斎藤修（1981）

（吉田 勝一）

準絶滅危惧 (NT)

ツチイロキリガ

鱗翅目 (チョウ目) ヤガ科

Vulpechola vulpecula (Lederer)

環境省 なし

- ❖ 形態 開張 36mm 内外。前翅は褐色を帯びた灰黄色で翅頂は尖り、近くに暗色の三角斑がある。
- ❖ 分布の概要 盛岡市、岩泉町、宮古市川井などの北上高地に産す。国内では東北北部と中部山地に局地的に分布する。
- ❖ 生息状況 寄主植物は未知。成虫は 10～11 月に森林とその周辺に生息する。最近では 2021 年に盛岡市玉山の山地で確認されている。
- ❖ 脅威 森林伐採などによる生息地環境の改変。
- ❖ 文献 55. 土井信夫（2005）、199. 神吉隆行（2022）、200. 鈴木一生・斎藤修（1972）

（吉田 勝一）

準絶滅危惧 (NT)

ニホンアミカモドキ

双翅目 (ハエ目) アミカモドキ科

Deuterophlebia nipponica Kitakami

環境省 絶滅危惧Ⅱ類

- ❖ 形態 幼虫は終齢で体長 3～4 mm。幼虫の腹部第 1～7 節は側方に伸び、腹面先端部には多数のかぎ爪が環状に並ぶ。成虫の体長は 2～4 mm。翅は幅広く翅脈が退化し、網目状のしわがある。
- ❖ 分布の概要 葛巻町、岩泉町、宮古市、盛岡市から記録されている。国内では本州、九州に局所的に分布する。
- ❖ 生息状況 標高 500～600m の山地に生息する。幼虫、蛹は河川上流部の急流中の礫表面に吸着している。県内における成虫の採集記録はない。また、最近の生息情報も知られていない。
- ❖ 脅威 河川改修などによる土砂の流入。
- ❖ 特記事項 本県では馬淵川上流で 2002 年に初めて採集された。
- ❖ 文献 201. 中村学（2003）、202. 中村学（2007）、203. 中村学（2014）

（吉田 勝一）

留意

キイロガガンボカゲロウ

蜉蝣目（カゲロウ目） ガガンボカゲロウ科

Dipteromimus flavipterus Tojo et Matsukawa

環境省 なし

- ❖ 形態 体長 16～24mm。体色は黄色で、長大な 3 本の尾毛を有する。前翅の前縁部は黄色を帯びる。ガガンボカゲロウに酷似するが、体色が乳白色であることから容易に区別できる。
- ❖ 分布の概要 大船渡市、住田町、釜石市から記録されている。本県以外では秋田県から確認されている。
- ❖ 生息状況 幼虫は河川源流部の細流のみに生息する。成虫は発生地 of 渓流沿いの低草本の葉に静止しているのが見られる。分散力は極めて小さく生息場所は孤立している。最近、大槌町と山田町の山地で確認されたとの情報がある。
- ❖ 脅威 砂防ダムなどの造成により、生息地の渓流がかく乱されること。
- ❖ 特記事項 日本産ガガンボカゲロウ科は 1 属 1 種であったが、2 種目として 2002 年に大船渡市盛川上流で採集された個体に基づき記載された。
- ❖ 文献 204. Morii Y, Tojo K (2009)、205. Tojo K, Matsukawa K (2003)、206. 岩手県沿岸広域振興局土木部津付ダム建設事務所・株式会社 ネクスス (2010)

(吉田 勝一)

留意

ルリイトトンボ

蜻蛉目（トンボ目） イトトンボ科

Enallagma circulatum Selys

環境省 なし

- ❖ 形態 成虫は腹長 24～32mm、後翅長 19～25mm。雄は成熟すると斑紋が青色となり、雌は青色と緑色の 2 型がある。
- ❖ 分布の概要 八幡平市、奥州市と雫石町（環境庁編、1980）、滝沢市（沼宮内、2008、佐々木ほか 2023）から記録されており、八幡平市及び奥州市で確認している。稀に生息地から離れた場所で確認されることもある。国内では北海道と岐阜県以北の本州に分布し、本州の産地は局限される。
- ❖ 生息状況 1 年 1 世代で、丘陵地から山岳地帯の池沼に生息する。成虫は初夏から夏季にかけて出現する。寒冷地池沼の指標種。
- ❖ 脅威 開発による池沼の消失。
- ❖ 特記事項 栗駒山からの記録は秋田県側であり、岩手県側からは未記録となっている。奥州市には、造成池に新たに侵入した場所があり、コアとなる産地からの分布拡大が示唆される。
- ❖ 文献 11. 小岩勲 (1986)、133. 佐々木全ほか (2023b)、136. 環境庁編 (1980)、207. 宮川幸三 (1973)、208. 小岩勲 (1979)、209. 沼宮内耕作 (2008)

(伊藤 智)

留意

マルタンヤンマ

蜻蛉目（トンボ目） ヤンマ科

Anaciaeschna martini (Selys)

環境省 なし

- ❖ 形態 成虫は腹長 43～63mm、後翅長 41～50mm。中型のヤンマで、雄は成熟すると黒褐色に青色の斑紋、雌は成熟すると茶褐色に黄緑色の斑紋で翅が橙色に煙る。
- ❖ 分布の概要 一関市（山本，1975）、西和賀町と奥州市（小野，1989）の記録がある。ただし、一関市では絶滅し、他は単発的な記録であったことから分布・生息状況は不明である。近年、福島県、宮城県と生息が確認され、県内でも一関市、山田町から確認されている。国内では岩手県及び新潟県以南の本州、四国、九州に分布する。
- ❖ 生息状況 1年1世代で、平地から丘陵地にかけての樹林に囲まれた抽水植物の豊富な池沼などに生息する。成虫は初夏から秋季にかけて出現し、薄暮時に上空を直線的に飛翔する。
- ❖ 脅威 開発による池沼の消滅。
- ❖ 特記事項 震災前後から福島県、宮城県での本種の確認は増加傾向にあり、長期的には生息状況は変化していく可能性がある。
- ❖ 文献 210. 伊藤智（1994）、211. 昆虫調査班（1989）、212. 山本弘（1975）

（伊藤 智）

留意

ネアカヨシヤンマ

蜻蛉目（トンボ目） ヤンマ科

Brachytron anisopterum (Selys)

環境省 準絶滅危惧

- ❖ 形態 成虫は腹長 54～63mm、後翅長 46～53mm、黒味が強く黄条を有する。翅の基部に橙色斑、先端部に褐色斑がある。
- ❖ 分布の概要 盛岡市及び一関市（小倉ほか，2020）より記録されているのみであり、国内では、本州（岩手県以南）、四国、九州に分布する。
- ❖ 生息状況 1年1世代で、樹林に接した、ヨシやマコモなどの抽水植物が繁茂する湿地などに生息する。
- ❖ 脅威 湿地の埋め立てなど。
- ❖ 特記事項 福島県、宮城県、岩手県と分布の北上が示唆される。宮城県では主として沿岸部で確認されているが、県内の確認地点の分布を見ると、北上川に沿った侵入ルートが想定される。留意として新たに追加した。
- ❖ 文献 213. 小倉健一智ほか（2020）

（伊藤 智）

留意

アオヤンマ

蜻蛉目（トンボ目） ヤンマ科

Brachytron longistigma (Selys)

環境省 準絶滅危惧

- ❖ 形態 成虫は腹長 45～53mm、後翅長 43～50mm、全身が鮮やかな黄緑色または青緑色を呈し、胸部前面と腹部背面には顕著な黒条がある。
- ❖ 分布の概要 一関市（伊藤, 2014）から記録されており、同市内の複数箇所で確認している。国内では、北海道、本州、四国、九州に分布する。
- ❖ 生息状況 1年1世代で、平地のヨシやマコモ、ガマなどの抽水植物が繁茂する池沼に生息する。
- ❖ 脅威 池沼の埋め立て。
- ❖ 特記事項 古くは陸前高田市古川沼の記録もあるが、県内からの確実なデータが示されたのは伊藤（2014）が初めてである。留意として新たに追加した。
- ❖ 文献 214. 伊藤智（2014）

（伊藤 智）

留意

サラサヤンマ

蜻蛉目（トンボ目） ヤンマ科

Sarasaeschna pryri (Martin)

環境省 なし

- ❖ 形態 成虫は腹長 41～49mm、後翅長 35～41mm。小型のヤンマで、雄は成熟すると腹部背面の斑紋が緑色になり、雌の斑紋は黄色である。
- ❖ 分布の概要 過去に滝沢市、盛岡市、雫石町、胆沢町、平泉町、千厩町、一関市、松尾村、矢巾町、花巻市、北上市で発見されており、他に奥州市、西和賀町で確認している。遠野市からも生息情報がある。国内では北海道から屋久島まで分布し、海外では朝鮮半島から知られる。
- ❖ 生息状況 1～3年1世代で、平地から丘陵地にかけての樹林に囲まれた湿地などに生息する。成虫は春季から初夏にかけて出現し、成熟雄はホバリングを交えて湿地上で占有飛翔を行う。放棄水田やハンノキ湿地など、遷移途中段階にある湿地に生息する。
- ❖ 脅威 開発による林間湿地の消滅。
- ❖ 特記事項 樹林伐採による乾燥化が生息地の狭小化を招く可能性がある。
- ❖ 文献 11. 小岩勲（1986）、14. 小岩勲（1980）、61. 佐々木全ほか（2023a）、135. 長谷川勉・佐竹邦彦（1995）、208. 小岩勲（1979）、215. 伊藤智（2001）、216. 佐竹邦彦・及川勇（2005）

（伊藤 智）

留意

ヤマサナエ

蜻蛉目（トンボ目） サナエトンボ科

Asiagomphus melaenops (Selys)

環境省 なし

- ❖ 形態 成虫は腹長 44～54mm、後翅長 35～46mm。やや大型のサナエトンボで、黒地に黄色の斑紋をもつ。
- ❖ 分布の概要 浄法寺町（恐らく本種の誤同定（清水、1949））以南に生息するものと思われ、花巻市、平泉町、一関市から確認している。沿岸部では宮古市から記録があったが近年の確認例は全く無く、絶滅したものと思われる。国内では岩手・秋田両県以南の本州、四国、九州に分布する。日本固有種。
- ❖ 生息状況 2～4年1世代で、丘陵地から山地にかけての樹林に囲まれた河川の上・中流域や水路などに生息する。成虫は春季から初夏にかけて出現し、川岸に近い場所の植物上や地面に静止している。
- ❖ 脅威 河川改修。
- ❖ 特記事項 ホンサナエ、アオサナエと生息環境が重複する。
- ❖ 文献 11. 小岩勲（1986）、14. 小岩勲（1980）、217. 清水虎二（1949）

（伊藤 智）

留意

ホンサナエ

蜻蛉目（トンボ目） サナエトンボ科

Shaogomphus postocularis (Selys)

環境省 なし

- ❖ 形態 成虫は腹長 33～36mm、後翅長 29～32mm。体は太めで、黒色で黄色の斑紋がある中型のサナエトンボ。
- ❖ 分布の概要 一関市（小岩 1962ab、丸山・菅原 1962、高橋 1996）、盛岡市（小岩 1980）、花巻市・盛岡市・一関市（小岩 1986）など、内陸中～南部にかけて記録があり、他に、北上市、平泉町で確認しており、沿岸南部や県北部にも生息するものと思われる。国内では、北海道から九州まで分布する。
- ❖ 生息状況 2～3年1世代で、平地～丘陵地の大～小河川中・下流域などに生息し、成虫は春季に出現する。過去の確認状況と比べ、現在では確認情報が少なくなっており、減少している可能性が高い。
- ❖ 脅威 河川改修。
- ❖ 特記事項 アオサナエ、ヤマサナエと生息環境が重複する。C ランクから留意に変更した。
- ❖ 文献 11. 小岩勲（1986）、14. 小岩勲（1980）、218. 丸山耕平・菅原壮（1962）、219. 高橋一成（1996）、220. 小岩勲（1962）、221. 小岩勲（1962）

（伊藤 智）

留意

オジロサナエ

蜻蛉目（トンボ目） サナエトンボ科

Stylogomphus suzukii (Oguma)

環境省 なし

- ❖ 形態 成虫は腹長 30～34mm、後翅長 21～27mm。小型のサナエトンボで、黒地に黄色の斑紋をもつ。胸部側面の黒条は「Y」字状となることで、他種と区別は容易である。
- ❖ 分布の概要 一関市（小岩, 1986）のほか、花巻市（岩手県, 2001）に生息することが知られており、他に奥州市で確認している。また、盛岡市においても生息情報がある。国内では岩手・秋田両県以南の本州、四国、九州に分布する。日本固有種。
- ❖ 生息状況 2年1世代で、丘陵地から山地にかけての樹林に囲まれた河川の源流・上流域で産卵し、幼虫は流下して河川中・下流域で羽化する。成虫は初夏から夏季にかけて出現し、流れの中の石上などに静止している。
- ❖ 脅威 河川改修。
- ❖ 特記事項 本種は、幼虫による確認のほうが容易である。
- ❖ 文献 11. 小岩勲（1986）、222. 岩手県（2001）

（伊藤 智）

留意

アオサナエ

蜻蛉目（トンボ目） サナエトンボ科

Nihonogomphus viridis Oguma

環境省 なし

- ❖ 形態 成虫は腹長 37～45mm、後翅長 29～38mm。中型のサナエトンボで、成熟すると胸部と腹部の斑紋が緑色となる。
- ❖ 分布の概要 一関市（小岩, 1986、高橋, 1996）、北上市（佐竹, 2001）のほか、遠野市（伊藤, 2005）、滝沢市（佐々木ほか, 2022）に生息することが知られており、他に平泉町で確認している。北上川の本支川に生息しているものと考えられる。国内では岩手・秋田両県以南の本州、四国、九州に分布する。日本固有種。
- ❖ 生息状況 2～3年1世代で、丘陵地の河川中流域に生息する。本県では、成虫は初夏から夏季まで見られ、岸边や流れの中の石上などに静止している。
- ❖ 脅威 河川改修。
- ❖ 特記事項 佐々木ほか（2022）により北限が大幅に更新された。ホンサナエ、ヤマサナエと生息環境が重複する。
- ❖ 文献 11. 小岩勲（1986）、12. 佐竹邦彦（2001）、219. 高橋一成（1996）、223. 伊藤智（2005）、224. 佐々木全他（2022）

（伊藤 智）

留意

ムカシヤンマ

蜻蛉目（トンボ目） ムカシヤンマ科

Tanypteryx pryeri (Selys)

環境省 なし

- ❖ 形態 成虫は腹長 44～54mm、後翅長 39～48mm。黒色で黄色の斑紋があり、胸部前面は広く淡褐色となる。複眼は黒褐色となる。
- ❖ 分布の概要 八幡平市（東 1946）、盛岡市・奥州市・一関市（環境庁編 1980）、滝沢市（長谷川・佐竹 1995）、西和賀町（昆虫調査班 1989）など記録があり、他に花巻市でも確認している。また、遠野市からの情報も得られている。日本固有種。
- ❖ 生息状況 2～3年1世代で、丘陵地から山地にかけての湿地や水の浸み出す斜面などに生息し、幼虫は湿った土中に穴を掘ってすむ。成虫は春季から初夏にかけて出現し、成熟雄は地面や植物葉上に静止して、雌の飛来を待つ。
- ❖ 脅威 開発による湿地の消失、林道拡幅等による生息地の消失。
- ❖ 特記事項 幼虫が湿った崖地に穿孔して生息するという特殊な生態を持つことから、地滑り対策の吹付工や集水井の設置による乾燥化などにより生息地単位で消滅する可能性がある。Cランクから留意に変更した。
- ❖ 文献 11. 小岩勲（1986）、14. 小岩勲（1980）、63. 小岩勲（1968）、135. 長谷川勉・佐竹邦彦（1995）、136. 環境庁編（1980）、211. 昆虫調査班（1989）、225. 岡野磨瑳郎（1964）、226. 東勝公（1946）

（伊藤 智）

留意

トラフトンボ

蜻蛉目（トンボ目） エゾトンボ科

Epitheca marginata (Selys)

環境省 なし

- ❖ 形態 成虫は腹長 33～39mm、後翅長 23～39mm。黒色に黄斑をもつエゾトンボで、同属のオオトラフトンボとは、後翅に三角形の黒斑が無いことにより区別出来るが、飛翔中の個体では判別が難しく、両種は混生することも多い。
- ❖ 分布の概要 一関市、花巻市、岩手沿岸（小岩, 1986）、北上市（佐竹・及川, 2005、幸田, 2015）、矢巾町（幸田, 2015）から記録されており、矢巾町以南で確認されている。国内では岩手・秋田両県以南の本州、四国、九州に分布する。
- ❖ 生息状況 1年1世代で、平地から丘陵地の浮葉植物や沈水植物の豊富な池沼に生息する。雌は産卵前に腹端に卵塊をつくり、腹端を水面につけて飛翔することにより、産下された卵塊は紐状となり沈水植物などの茎に付着する。
- ❖ 脅威 開発による池沼の消滅。
- ❖ 特記事項 本種は沈水植物や浮葉植物の茎に卵紐を付着させるという特殊な産卵を行うことから、水中の植生が豊かな池沼環境が生息に必要である。また、同属のオオトラフトンボとの混生地が多いことから、複数頭採集による生息確認が望ましい。
- ❖ 文献 11. 小岩勲（1986）、139. 幸田洋平（2015）、216. 佐竹邦彦・及川勇（2005）

（伊藤 智）

留意

ハネビロエゾトンボ

蜻蛉目（トンボ目） エゾトンボ科

Somatochlora clavata Oguma

環境省 絶滅危惧Ⅱ類

- ❖ 形態 成虫は腹長 37～50mm、後翅長 39～45mm。全身が金緑色を呈し、未成熟雄は胸部側面に黄条が2本あるが、成熟するにつれて消失する。雌は成熟しても胸部の黄条が残る。エゾトンボとは、腹部斑紋、尾部付属器、産卵弁の形状等で区別できる。
- ❖ 分布の概要 北上市（伊藤，1992）が知られるのみであるが、奥州市、山田町でも本種と思われる個体の飛翔を確認している。
- ❖ 生息状況 1～3年1世代で、平地から山地の樹林に囲まれた緩やかな流れや細流に生息する。近年、県内よりの生息情報が得られない。
- ❖ 脅威 開発による丘陵地の細流の消失。
- ❖ 特記事項 エゾトンボ属は外観が類似していることから確認には注意が必要である。情報不足から留意に変更した。
- ❖ 文献 38. 伊藤智（1992）

（伊藤 智）

留意

エゾトンボ

蜻蛉目（トンボ目） エゾトンボ科

Somatochlora viridiaenea (Uhler)

環境省 なし

- ❖ 形態 成虫は腹長 35～53mm、後翅長 37～56mm。全身が金緑色を呈し、未成熟雄は胸部側面に黄条が2本あるが、成熟するにつれて消失する。雌は成熟しても胸部の黄条が残る。
- ❖ 分布の概要 盛岡市、龍ヶ森、焼石岳、八幡平から記録されているが、雫石町（佐々木ほか，2023）から新たに確認された。本種と思われる個体の飛翔を奥州市で確認しているが、現在は胆沢ダムの湛水域である。国内では北海道から九州の一部まで分布する。
- ❖ 生息状況 1～3年1世代で、平地から丘陵地の樹林に囲まれた湿地や休耕田に生息する。
- ❖ 脅威 開発による湿地や休耕田の消滅。
- ❖ 特記事項 エゾトンボ属は外観が類似していることから確認には注意が必要である。情報不足から留意に変更した。
- ❖ 文献 11. 小岩勲（1986）、061. 佐々木全ほか（2023a）、227. 小笠原英明・大橋晃（1966）

（伊藤 智）

留意

キトンボ

蜻蛉目（トンボ目） トンボ科

Sympetrum croceolum (Selys)

環境省 なし

- ❖ 形態 成虫は腹長 21～31mm、後翅長 22～32mm。中型のトンボで、翅の基部と前縁部が橙色を呈する。成熟雄の腹部背面は赤化する。
- ❖ 分布の概要 岩手沿岸（山本 1954）、花巻市、盛岡市、一関市、宮古市、岩手沿岸（小岩 1986）、北上市（佐竹 2001）など内陸から沿岸部まで広範囲に生息しているが、近年は内陸南部からのみ確認されている。国内では北海道から九州まで分布する。
- ❖ 生息状況 1年1世代で、平地から丘陵地にかけての植生の豊富な池沼に生息する。成虫は夏季から秋季にかけて出現する。
- ❖ 脅威 池沼の浚渫や開発による溜池の消失、ブラックバス等による食害。
- ❖ 特記事項 奥州市から一関市にかけての産地の中には、耕作放棄により溜池の管理がされず、本種の生息数が減少している場所が見られる。Cランクから留意に変更した。
- ❖ 文献 11. 小岩勲（1986）、12. 佐竹邦彦（2001）、13. 山本弘（1954）、210. 伊藤智（1994）

（伊藤 智）

留意

タイリクアカネ

蜻蛉目（トンボ目） トンボ科

Sympetrum striolatum imitoides Bartenev

環境省 なし

- ❖ 形態 成虫は腹長 25～33mm、後翅長 27～34mm。アキアカネに似るが、翅の基部から前縁部が橙色を呈し、脚の脛節外側に淡色条があることで区別できる。
- ❖ 分布の概要 久慈市（幸田，2015）、宮古市、山田町、大船渡市、陸前高田市から記録されており、他に釜石市で確認した。ほとんどの産地が海岸岩礁部の小規模な水域であり、特殊な生息環境となっている。国内では北海道、青森県から宮城県までの太平洋岸、石川、三重・鳥取以西の本州沿岸部、四国、九州に分布する。
- ❖ 生息状況 1年1世代で、沿岸部の岩礁地帯の水たまりに生息する。
- ❖ 脅威 生息水域の干上がりなど。
- ❖ 特記事項 岩礁地帯の生息地は、震災後も継続して発生している（伊藤,2017）。山田町船越のような海岸低地の産地は震災後の生息状況が不明である。
- ❖ 文献 15. 朝比奈正二郎（1968）、62. 枝重夫・朝比奈正二郎（1965）、228. 伊藤智（1982）、229. 伊藤智（2007）、230. 伊藤智（2017）、231. 幸田洋平（2015）、232. 高橋一成（2000）、233. 山本弘（1966）

（伊藤 智）

留意

イボバツタ

直翅目（バッタ目） バッタ科

Trilophidia japonica Saussure

環境省 なし

- ❖ 形態 体長 24～35mm。灰褐色で明暗のまだら模様があり、体に散在するイボ状突起は頭と前胸で目立つ。
- ❖ 分布の概要 県中南部に産す。国内では本州、四国、九州に分布する。
- ❖ 生息状況 裸地や荒廃した草地に生息する。成虫はよく飛翔し、夏から秋遅くまで出現する。以前には県南の内陸低地に多産したようである。その後まったく生息情報がなかったが、近年、湯田ダムや花巻市、奥州市で確認された。また、2014年に金ヶ崎町、2022年には一関市花泉で記録されている。
- ❖ 脅威 土地造成などによる乾性草地の改変。
- ❖ 特記事項 近年になって多数の生息地が確認されたため、情報不足から留意へ変更した。
- ❖ 文献 84. 国土交通省東北地方整備局岩手河川国道事務所（2011）、141. 宮沢康一郎（1937）、234. 国土交通省東北地方整備局北上川ダム統合管理事務所（2004）

（吉田 勝一）

留意

タイコウチ

半翅目（カメムシ目） タイコウチ科

Laccotrephes japonensis Scott

環境省 なし

- ❖ 形態 体長 30～38mm（呼吸管を除く）。背面は暗褐色～茶褐色。前脚は鎌状で、腿節の基部に棘状突起がある。呼吸管は体長と同程度。
- ❖ 分布の概要 国内では本州から沖縄島以北の南西諸島に分布する。県内では古くから記録があるが、詳細は不明。北上市東部の溜池で 2002 年に採集記録がある。最近では盛岡市北部の水路で目撃情報があつた。
- ❖ 生息状況 かつては水田地帯に広く生息していた可能性があるが、個体数は多くなかったと推測され、近年では確認されることも稀である。
- ❖ 脅威 水田の基盤整備による乾田化や水路整備。
- ❖ 特記事項 今回新たに情報不足として追加した。
- ❖ 文献 67. 中島淳・林成多・石田和男・北野忠・吉富博之（2020）、235. 阿部幸之ほか（2003）
(伊達 功)

留意

ババアメンボ

半翅目（カメムシ目） アメンボ科

Gerris (Gerris) babai Miyamoto

環境省 準絶滅危惧

- ❖ 形態 成虫は体長 6.3～9mm で、小型のアメンボ。体色は光沢のない黒色。長翅型の他に微翅型も出現する。
- ❖ 分布の概要 八幡平市、花巻市、釜石市、陸前高田市で記録されている。国内では北海道、本州、九州に分布する。
- ❖ 生息状況 平地の挺水植物が生育する池沼に生息する。最近、安比高原などの山地池沼で生息地が発見されたことは注目される。
- ❖ 脅威 池沼・ため池など挺水植物の生育する環境の改変。
- ❖ 特記事項
- ❖ 文献 236. 伊藤智（2003）、237. 千葉武勝（2014）
(吉田 勝一)

留意

キタヒメアメンボ

半翅目（カメムシ目） アメンボ科

Gerris (Gerris) lacustris (Linnaeus)

環境省 なし

- ❖ 形態 体長は 9～12mm。ヒメアメンボと似ているが、本種では触角が黒色であること、オスの腹部第 7～8 腹板にくぼみがないことなどから区別できる。長翅型および短翅型がある。
- ❖ 分布の概要 八幡平市、奥州市胆沢で確認されている。国内では北海道および本州の東北地方に局地的に分布する。
- ❖ 生息状況 東北地方の生息地は山間部の冷涼な場所にある池沼で、生息地における個体数は少ない。
- ❖ 脅威 池沼・ため池などの改変・消失。
- ❖ 文献 236. 伊藤智（2003）、238. 碓井徹（1998）、239. 千葉武勝（2014）
(吉田 勝一)

留意

ゴミアシナガサシガメ

半翅目（カメムシ目） サシガメ科

Myiophanes tipulina Reuter

環境省 絶滅危惧Ⅱ類

- ❖ 形態 体長 16～17mm、細長く各脚が著しく細長い一見ガガンボのように見える。体色は淡褐色で腹部には濃淡の斑紋があり、全身長い毛に覆われる。
- ❖ 分布の概要 県南部に戦前の古い記録がある。国内では本州、四国、九州に分布する。
- ❖ 生息状況 里地環境の家屋周辺で発見されることが多い。近年の生息状況は不明である。全国的にも最近ほとんど見られなくなった。
- ❖ 脅威 里地環境の変化。
- ❖ 文献 141. 宮沢康一郎（1937）、240. 千葉武勝（2014）

（吉田 勝一）

留意

シロヘリツチカメムシ

半翅目（カメムシ目） ツチカメムシ科

Canthophorus niveimarginatus (Signoret)

環境省 準絶滅危惧

- ❖ 形態 体長 6～8 mm、光沢のある黒藍色で体表は顕著な点刻が散布する。体の側縁は細く黄白色で縁取られる。
- ❖ 分布の概要 終戦後間もない時期と比較的近年に県中～南部で記録があり、最近も数カ所で確認されている。国内では本州、四国、九州に分布する。
- ❖ 生息状況 生息地は農耕地周辺の草原的環境である。昭和 30 年代ころまでは農山村環境に広く生息していたと思われるが、その後生息環境の悪化に伴い減少してきたのであろう。里地環境の指標種。
- ❖ 脅威 耕地基盤整備などによる草原環境の改変。
- ❖ 文献 148. 四戸耕太郎（1950）、241. 四戸耕太郎（1946）、242. 千葉武勝（2010）、243. 千葉武勝（2014）

（吉田 勝一）

留意

チビマルクビゴミムシ

鞘翅目（コウチュウ目） オサムシ科

Nippononebria (Nippononebria) pusilla pusilla (S. Uéno)

環境省 なし

- ❖ 形態 体長 7～8.5mm。黒色で銅色光沢があり、頭部は比較的大きく、前胸はやや横長の円盤状、胴は卵形。県内産同属のミヤママルクビゴミムシとは体形が幅広く銅色を帯びることなどで区別できる。
- ❖ 分布の概要 岩手山と秋田駒ヶ岳で記録された。奥羽山脈の高地に生息するが、分布範囲は明確でない。本州中部山岳から別亜種ヤツチビマルクビゴミムシが知られる。
- ❖ 生息状況 主に高山帯の火山礫地に生息し、成虫は 7～8 月に発見されている。密度は高くないが、かなり広く生息しているようである。近年、新たな知見は得られていない。高地火山地帯の固有種。
- ❖ 脅威 生息地は法的保護が図られているが、踏み荒らし等による生息地の破壊が脅威である。
- ❖ 文献 85. 佐竹邦彦・笠原須磨生（1985）、244. Habu A（1958）

（伊達 功）

留意

ナミハンミョウ

鞘翅目（コウチュウ目） オサムシ科

Sophiodela japonica (Thunberg)

環境省 なし

- ❖ 形態 体長 18～20mm 内外。頭部や前胸は金緑色で、上翅は黒紫色でビロウド状。色彩には変化が多い。鋭い大あごと巨大な複眼、細長い肢を持つ。
- ❖ 分布の概要 二戸市、軽米町、八幡平市、盛岡市、雫石町、西和賀町等から記録されている。国内では本州以南に広く分布する。
- ❖ 生息状況 植物が少なく地表が露出した場所を好み、農地周辺の未舗装道路等に生息する。かつては局地的な傾向はあるものの、低山地帯に少なくなかった。現在も生息は確認されているが、生息地、個体数ともに減少している。
- ❖ 脅威 道路の舗装、法面の擁壁化、農地環境の近代化。
- ❖ 特記事項 以前から生息地は限られる傾向があったが、近年減少傾向が加速したことから、新たに留意として追加した。
- ❖ 文献 103. 奥昭夫（2011）、119. 二戸市（2020）、245. 平野俊秀（1987）、246. 河川水辺の国勢調査のための生物リスト

（伊達 功）

留意

アオカタビロオサムシ

鞘翅目（コウチュウ目） オサムシ科

Calosoma (Calosoma) cyanescens (Motschulsky)

環境省 なし

- ❖ 形態 体長 18～31mm。体表は黒色で緑～銅色の光沢をおびる。頭部と前胸背板は密に点刻され、前胸背板側縁は後方で丸まり、縁取りは消失する。上翅条溝は強く点刻される。
- ❖ 分布の概要 奥羽山脈および北上高地に広く生息するが、産地は限られる。国内では北海道と中部以北の本州に分布する。
- ❖ 生息状況 ブナ林などの樹上に生息する。他のオサムシ類と違い後翅がよく発達し飛翔する。近似種のクロカタビロオサムシに比べ、生息密度は低い。近年では、未報告ながら大槌町内陸の山地で確認されている。良好な広葉樹林の指標種。
- ❖ 脅威 森林伐採、特に各種自然エネルギー関連施設建設に伴う森林の消失。
- ❖ 文献 21. 中根猛彦（1989）、247. 平野修一（1980）、154. 三浦秀明（1988）

（伊達 功）

留意

ヒメクロオサムシ

鞘翅目（コウチュウ目） オサムシ科

Carabus (Asthenocarabus) opaculus shirahatai Nakane

環境省 なし

- ❖ 形態 体長 15～20mm。黒色で背面は光沢が鈍く、頭部上面にはしわがあり複眼間が点刻される。前胸背板の側縁は両側でまるみを帯び、後方で著しく狭まり後角が突出する。上翅は長卵形、後方で最も広く前方に強く狭まる。亜種の特徴は鞘翅が細長いこと、背面が全く黒色であること等である。
- ❖ 分布の概要 県内では早池峰山、岩手山、八幡平、和賀岳、焼石岳、栗駒山などの高山帯で確認されている。国内では北海道と東北地方の山岳地帯に分布する。本州産は東北地方亜種とされる。日本固有種。
- ❖ 生息状況 幼虫、成虫とも高山帯の岩礫地の石下に生息している。生息地域は狭小で生息密度は高くない。
- ❖ 脅威 生息地のほとんどで法的保護が図られているが、踏み荒らしなどによる生息地改変が脅威である。
- ❖ 特記事項 改訂前の和名チョウカイヒメクロオサムシは、本亜種の通称。
- ❖ 文献 21. 中根猛彦（1989）、78. 井村有希・水沢清行（2013）、154. 三浦秀明（1988）、211. 昆虫調査班（1989）、248. 石塚和雄・小野泰正（1976）

（伊達 功）

留意

セアカオサムシ

鞘翅目（コウチュウ目） オサムシ科

Carabus (Hemicarabus) tuberculosus Dejean

環境省 準絶滅危惧

- ❖ 形態 体長 16～23mm の比較的小型のオサムシ。前胸背の赤道色が目立ち、上翅には黒色の瘤状隆起列がある。
- ❖ 分布の概要 県内では沿岸、内陸とも広い範囲に分布するが、高地には産しない。二戸市、盛岡市、北上市、宮古市、金ヶ崎町等の記録のほか、普代村、矢巾町、奥州市、大船渡市等で情報がある。国内では北海道から九州まで全域に分布する。
- ❖ 生息状況 疎林や自然草地等の開けた環境を好み、農地と樹林が混在するような環境に生息する。いずれの場所でも個体数は少ない。全国的に減少傾向が認められる。
- ❖ 脅威 草地の管理放棄、耕作放棄等による生息環境の悪化。
- ❖ 特記事項 以前から個体数が少ない種であったが、近年減少傾向が加速したことから、新たに留意として追加した。
- ❖ 文献 21. 中根猛彦（1989）、78. 井村有希・水沢清行（2013）、103. 奥昭夫（2011）、249. 高橋泰美（2016）、250. 小野泰正（1979）、152.1. 茅橋輝昭ほか（2013）、154. 三浦秀明（1988）

（伊達 功）

留意

ホソヒメクロオサムシ

鞘翅目（コウチュウ目） オサムシ科

Carabus (Pentacarabus) harmandi yudanus Nakane

環境省 なし

- ❖ 形態 体長 17～21mm。黒色で頭部上面には不規則なしわがある。前胸背板は細く前縁は浅く弧状に湾入し、前後角は三角形で後方に突出する。上翅は細長く肩部は弱く丸みを帯び、第一間室は強く隆起し分断する。亜種の特徴は、鞘翅がより細長いことやオス交尾器の形状等である。
- ❖ 分布の概要 本州中～北東部に分布する。多数の亜種に分けられ、本県には奥羽山脈亜種が分布する。奥羽山脈に広く生息し、北限は青森県南端の田子町である。分布域を示す図には早池峰山付近が含まれているが、北上高地での生息情報は不明。日本固有種。
- ❖ 生息状況 ブナ林などの原生林の林床に生息する。朽木中などで成虫越冬する。生息密度は低いと推測される。良好な自然林の指標昆虫。
- ❖ 脅威 森林伐採、特に各種自然エネルギー関連施設建設に伴う森林の消失。
- ❖ 特記事項 改定前の和名トウホクホソヒメクロオサムシは、本亜種の通称の一つだが、東北地方には他にも複数の亜種が分布する。本亜種の模式産地は西和賀町鷲合森。
- ❖ 文献 21. 中根猛彦（1989）、78. 井村有希・水沢清行（2013）、211. 昆虫調査班（1989）、251. 平野修一（1978）、152.1. 茅橋輝昭ほか（2013）

（伊達 功）

留意

ヒョウタンゴミムシ

鞘翅目（コウチュウ目） オサムシ科

Scarites (Parallelomorphus) aterrimus Morawitz

環境省 なし

- ❖ 形態 体長 15～20mm。大きな牙を持ち、体は前胸と腹部がくびれ、ヒョウタン型。黒色でツヤがある。まれに近縁種のナガヒョウタンゴミムシと同所に見られることがあるが、体形が細く腹部の形状が異なり、前胸背板前角の形状も異なるので区別できる。
- ❖ 分布の概要 県内の砂浜海岸に広く分布する。国内では北海道、本州、四国、九州に分布する。
- ❖ 生息状況 県内では、3～10月に見られる。海浜性で砂浜に生息し、海藻などの漂着が多くなる5～7月が特に多い。主に夜間活動し、波打ち際でヨコエビなどを捕食する。昼間は漂着物の下や砂中に見られる。東日本大震災の大津波後も多くの砂浜で確認されたが、全く見られなくなった海岸や、流失消滅した海岸もある。自然度の高い砂浜海岸の指標種。
- ❖ 脅威 砂浜の環境改変。大震災後の復興事業で消失した産地もある。
- ❖ 文献 18. 上野俊一ほか（1985）

（砂田 比左男）

留意

ハヤチネヌレチゴミムシ

鞘翅目（コウチュウ目） オサムシ科

Apatrobus (Apatrobus) hayachinensis (Nakane)

環境省 なし

- ❖ 形態 体長 8 mm 内外。光沢ある黒～黒褐色、前胸は頭部よりやや幅広く後方がくびれ、胴はさらに幅広く卵形、翅鞘の条溝間にほぼ等径の網目状印刻が認められる。体下面の後方と脚は赤褐色。キアシヌレチゴミムシにやや似るが小さい。
- ❖ 分布の概要 早池峰山と八幡平から記録されている。最近、秋田県森吉山からも記録された。東北地方北部の高地に分布する。
- ❖ 生息状況 成虫は、6～9月に主に高山上部の低木草本帯にある裸地の石下に発見される。早池峰山では南面崩壊地の下方までと北面の上部に、八幡平では台地状の高地一帯に生息する。今回の調査では早池峰山の針葉樹林で採集された。高地低木草本帯を代表する種。
- ❖ 脅威 生息地の多くは法的保護が図られているが、踏み荒らし等による生息地の破壊が脅威である。早池峰山では、ニホンジカの増加に伴う林床環境の変化が懸念される。
- ❖ 文献 85. 佐竹邦彦・笠原須磨生（1985）、252. 佐藤福男ほか（2022）、253. 中根猛彦（1968）
(伊達 功)

留意

アオホソゴミムシ

鞘翅目（コウチュウ目） オサムシ科

Drypta (Drypta) ussuriensis Jedlička

環境省 なし

- ❖ 形態 体長 8～8.5mm。頭胸背や上翅は緑色をした細長い体形のゴミムシ。頭部には大きい点刻があり、前胸背の点刻も大きく、細毛を具える。上翅条溝には大きな点刻がある。脚は黄褐色。
- ❖ 分布の概要 二戸市、久慈市、宮古市、花巻市石鳥谷町で記録がある。近年、四十四田ダム付近でも記録された。国内では北海道および本州東北部に分布する。
- ❖ 生息状況 主として河口部の砂礫地に生息し、砂礫中や石下などで成虫越冬する。砂礫地河岸の指標種。
- ❖ 脅威 河川改修などによる生息地環境の改変。
- ❖ 特記事項 二戸市は 1950 年、宮古市と花巻市（旧石鳥谷町）は 1960 年代の古い記録である。
- ❖ 文献 85. 佐竹邦彦・笠原須磨生（1985）、103. 奥昭夫（2011）、130. 国土交通省東北地方整備局三陸国道事務所（2009）、254. 河川水辺の国勢調査のための生物リスト
(伊達 功)

留意

シラハタキバナガゴミムシ

鞘翅目（コウチュウ目） オサムシ科

Stomis (Stomis) zaonus Habu

環境省 なし

- ❖ 形態 体長 10mm 内外。光沢ある黒色、前胸の後方がくびれた細長いヒョウタン形、大顎が発達しキバ状に突出する。胴は長卵形で丸い肩部に歯状突起がある。
- ❖ 分布の概要 県内では北上市、奥州市、西和賀町等の奥羽山脈の記録が多かったが、近年は住田町、岩泉町等の北上高地からも得られている。山形県蔵王が基産地。
- ❖ 生息状況 成虫は 6～10 月にブナ林などの広葉樹林の倒木下などから発見される。同時に多数個体が発見された例はない。山地自然林の指標種。
- ❖ 脅威 森林伐採、特に各種自然エネルギー関連施設建設に伴う森林の消失。ニホンジカ増加に伴う林床環境の変化。
- ❖ 特記事項 最近、秋田県で同属のキバナガゴミムシと本種が同所的に混生していることが明らかになった。
- ❖ 文献 85. 佐竹邦彦・笠原須磨生（1985）、255. 沼田仁（2021）

（伊達 功）

留意

メススジゲンゴロウ

鞘翅目（コウチュウ目） ゲンゴロウ科

Acilius (Acilius) japonicus Brinck

環境省 なし

- ❖ 形態 体長 15mm 前後。体型は卵形で扁平。体色は全体に黄褐色。雌の上翅片側には縦に幅広のスジが 4 本走っており、そこには黄褐色の短い毛が密生している。このスジは雄には無いので、雄雌の区別は容易である。
- ❖ 分布の概要 奥羽山系に生息池が多く確認されているが、北上高地から見出されている。国内では北陸地方以北の 12 道県から記録がある。
- ❖ 生息状況 比較的高地の池沼を好んで生息するが、最近低山地の池沼からも発見されている。水生昆虫・小型魚類・両生類・甲殻類などを捕食する。
- ❖ 脅威 外来種（ブラックバス・ブルーギル・アメリカザリガニ・ウシガエル）や養鯉。溜池の利用放棄による池の埋め立て。
- ❖ 文献 26. 森正人・北山昭（2002）、27. 三田村敏正ほか（2017）

（成瀬 健一）

留意

アサヒナコマルガムシ

鞘翅目（コウチュウ目） ガムシ科

Anacaena asahinai M. Satô

環境省 なし

- ❖ 形態 体長 2～2.5mm。光沢ある黒褐色だが、生時は茶色味が強い。体形は卵形、背面はなだらかに膨隆し、翅鞘は条溝を欠き一様に点刻される。脚は赤褐色、腿節前半が急に細くなる。コマルガムシよりやや小さく腿節の形状などが異なる。
- ❖ 分布の概要 雫石町で確認されたのみ。国内では本州中部以北の山地湿原に分布する。
- ❖ 生息状況 山地の高層湿原や中間湿原の小流に生息する。成虫は初夏に発見されている。県内では未報告ながら、奥羽山脈沿いで生息情報がある。山地湿原を代表する種。
- ❖ 脅威 水源や湿地植生の破壊。
- ❖ 文献 256. 高橋泰美（1995）、257. 川合禎次（編）（1985）

（伊達 功）

留意

クロツブマグソコガネ

鞘翅目（コウチュウ目） コガネムシ科

Aphodius (Ammonoecius) yamato Nakane

環境省 なし

- ❖ 形態 体長 3.5～4.0mm。体色は黒色で光沢がある。体形は太短く、上面は点刻が目立つ。古いシカ糞に集まるため識別は容易。
- ❖ 分布の概要 県内では大船渡市、住田町、釜石市から確認された。国内では本州、九州に分布する。日本固有種。
- ❖ 生息状況 4～7月と9～10月に出現する。林内の古い湿ったシカ糞に見られ、開けた環境には見られない。近年シカの生息密度が薄くなり、見つけがなくなった。今のところ五葉山周辺のみで確認されている。
- ❖ 脅威 シカの生息密度の減少。森林の減少。
- ❖ 特記事項 本県での確認は関東以北で初めてである。
- ❖ 文献 2. 岡島秀治・荒谷邦夫（2012）、30. 砂田比左男（2010）、

（砂田 比左男）

留意

コカブトムシ

鞘翅目（コウチュウ目） コガネムシ科

Eophileurus (Eophileurus) chinensis chinensis (Faldermann)

環境省 なし

- ❖ 形態 体長 18～24mm。黒色でやや光沢がある。雄は頭部に短角をもち、前胸背板中央に円形の大きな窪みがあり、前脚の内爪には幅広い付属歯がある。雌は頭角が短く、前胸背板の窪みは弱く縦長で、前脚の爪は普通である。
- ❖ 分布の概要 一関市と北上市の奥羽山脈で、自然度の高い広葉樹林帯で確認されている。県北や北上高地での記録はなく、近年二戸市で生息情報が得られたものの詳細は不明である。全国に広く分布する。
- ❖ 生息状況 成虫、幼虫とも朽ち木や腐植土内に生息する。成虫は夜行性で目につきにくいいため、他の生息地の発見も期待できる。巨木の豊富な原生林の指標種。
- ❖ 脅威 森林伐採、特に各種自然エネルギー関連施設建設に伴う森林の消失。
- ❖ 文献 166. 高橋泰美・菊池透（1994）、258. 長谷川友信（2022.10.18）、259. 徳原実（1999）260. 徳原実（1997）

（伊達 功）

留意

オオチャイロハナムグリ

鞘翅目（コウチュウ目） コガネムシ科

Osmoderma opicum Lewis

環境省 準絶滅危惧

- ❖ 形態 体長 22～32mm、体色は光沢ある黒褐色でときに青銅色～紫銅色を帯びることがある。雄は前胸背板の幅が広く、中央の2縦条は強く稜状、雌では前胸の幅が狭く、2縦条は不明瞭。
- ❖ 分布の概要 奥羽山脈や北上高地で確認され、八幡平や早池峰山の針葉樹林から沿岸の霞ヶ岳まで、広く分布する。国内では本州、四国、九州に分布する。日本固有種。
- ❖ 生息状況 立ち枯れた大木や樹洞内に生息し、あまり人目につかないが、桃のような香気を発するので存在が分かる。幼虫も樹洞内で腐植質を食べて成長する。自然度の高い森林に生息するが、里山の神社や桑畑等でも樹洞があれば生息していることがある。県内では古くから生息が確認されているが、近年その生態が判明するとともに各地での採集例が増えている。
- ❖ 脅威 森林伐採、特に各種自然エネルギー関連施設建設に伴う森林の消失。
- ❖ 文献 19. 竹内誠一（1940）、103. 奥昭夫（2011）、119. 二戸市（2020）、167. 佐竹邦彦（2007）、261. 伊藤智（1997）、262. 加藤武夫（1938）、263. 平野俊秀（1980）

（伊達 功）

留意

オオトラフコガネ

鞘翅目（コウチュウ目） コガネムシ科

Paratrachius doenitzi (Harold)

環境省 なし

- ❖ 形態 体長 11.5～14.5mm。上翅は赤褐色に黒色部のあるものから、ほとんど黒色のものまであり、横帯は灰黄色で細長い。前胸背の前、後縁ともに中央部がより太く縁付けられる。
- ❖ 分布の概要 雫石町、盛岡市築川、早坂高原、早池峰山とその周辺、仙岩峠に記録がある。国内では本州の東北地方から中部地方に分布する。
- ❖ 生息状況 山地のミズナラ帯に主に生息する。成虫は6月から8月頃に出現し、ノリウツギなどの花に集まる。生息密度は著しく低い。近年では雫石町や盛岡市、奥州市胆沢区等で確認され、今回の調査では宮古市川井でノリウツギの花から採集された。
- ❖ 脅威 森林伐採、特に各種自然エネルギー関連施設建設に伴う森林の消失。
- ❖ 文献 19. 竹内誠一（1940）、262. 加藤武夫（1938）

（伊達 功）

留意

アムールムツボシタマムシ

鞘翅目（コウチュウ目） タマムシ科

Chrysobothris (Chrysobothris) amurensis ohmomoi Akiyama

環境省 なし

- ❖ 形態 体長 8～10mm。前胸背板はほぼ矩形で、前方に狭まることがなく側縁部が強く紅色に縁取られる。上翅の点刻は不明瞭で間室が強くしわ状または顆粒状に高まる。
- ❖ 分布の概要 早池峰山麓で記録されている。このほか普代村からも情報があるが、詳細不明。国内では本州と九州に分布する。
- ❖ 生息状況 成虫は6～7月にイタヤカエデ、カンバ類の新しい衰弱木に集まる。全国的に生息密度は著しく低い。ミズナラなど良好な落葉広葉樹林の指標種。
- ❖ 脅威 森林伐採、特に各種自然エネルギー関連施設建設に伴う森林の消失。
- ❖ 文献 96. 大桃定洋・福富宏和（2013）、264. 遠山雅夫（1980）、265. 楨原寛（1988）

（伊達 功）

留意

サビナカボソタマムシ

鞘翅目（コウチュウ目） タマムシ科

Coraebus ishiharai Y. Kurosawa

環境省 なし

- ❖ 形態 体長 10～13mm。体は光沢のない鉄錆色。上翅に断続的な白い波状横帯があり、翅端近くの2本は明瞭となる。
- ❖ 分布の概要 宮古市川井の早池峰山麓での記録のほか、盛岡市でも早池峰山系で採集されている。国内では本州、九州に局所的に分布し、岩手県が北限。日本固有種。
- ❖ 生息状況 ヤマボウシを食樹とし、成虫はヤマボウシの花や葉に集まる。開けた尾根や林縁に見られる。いずれの生息地でも個体数は著しく少ない。植樹ヤマボウシが庭木として移植されるのに伴い、各地で記録されるようになっていく。ミズナラ林などの落葉広葉樹林の指標種。
- ❖ 脅威 森林伐採、特に各種自然エネルギー関連施設建設に伴う森林の消失。
- ❖ 文献 96. 大桃定洋・福富宏和（2013）、266. 榎原寛・遠山雅夫（1990）

（伊達 功）

留意

シリグロナカボソタマムシ

鞘翅目（コウチュウ目） タマムシ科

Coraebus nigromaculatus Y. Kurosawa

環境省 なし

- ❖ 形態 体長 11～14mm。緑色を帯びた唐金色。上翅後半は銀白色の横紋を除いて黒色。
- ❖ 分布の概要 宮古市新里の山地で確認されているのみ。国内では北海道、本州に分布する。
- ❖ 生息状況 食樹はミズナラが判明しているが、県内ではサクラの樹皮下から死体が発見された例がある。県内の2例は同じ場所での記録である。国内いずれの生息地でも個体数は著しく少ない。ミズナラ林などの落葉広葉樹林の指標種。
- ❖ 脅威 森林伐採、特に各種自然エネルギー関連施設建設に伴う森林の消失。
- ❖ 文献 96. 大桃定洋・福富宏和（2013）、267. 山崎哲郎（2012）、268. 秋山黄洋・大桃定洋（1995）、269. 中村裕之（1988）

（伊達 功）

留意

ケスジドロムシ

鞘翅目（コウチュウ目） ヒメドロムシ科

Pseudamorphilus japonicus Nomura

環境省 絶滅危惧Ⅱ類

- ❖ 形態 体長 5 mm 内外。長楕円形で栗褐色、背面はやや膨隆し暗黄色毛を生じる。頭は前へ突出せず触角は短い。長い脚の先端は弓状に曲がる。
- ❖ 分布の概要 二戸市、田野畑村および北上川水系のほぼ全域から記録されている。国内では本州、九州（大分県）に分布する。
- ❖ 生息状況 河川の水底砂礫地に生息し水辺の草むらに見られる。成虫は遊泳せず水底を歩行するといわれる。これまでは二戸市、盛岡市、奥州市からだけの確認であったが、近年、国による北上川水系における調査によって、盛岡市から一関市までのほぼ全域に生息していることが明らかとなった。
- ❖ 脅威 生息水域の汚染。
- ❖ 文献 52. 奥昭夫（2000）、270. 国土交通省東北地方整備局北上川ダム統合管理事務所（2013）、271. 国土交通省東北地方整備局北上川ダム統合管理事務所（2013）

（吉田 勝一）

留意

ハセガワドロムシ

鞘翅目（コウチュウ目） ドロムシ科

Helichus ussuriensis Lafer

環境省 なし

- ❖ 形態 体長 4.1～5.1mm。体色は黒褐色で、背面に密に剛毛が生える。上翅に粗大点刻列があり、前胸背板の両側には浅い凹みがある。
- ❖ 分布の概要 普代村、田野畑村、葛巻町、宮古市田老で記録された。国内では北海道、本州（岩手県）に分布する。
- ❖ 生息状況 河畔林が発達した中流域から上流域の小河川に生息し、流水内に沈んだ落ち葉や朽木などを食べるといわれている。北上高地北部の河川に広く分布している。
- ❖ 脅威 道路改修等による河川環境の改変。
- ❖ 特記事項 本種は北海道のみに分布するといわれてきたが、2006 年以降県内のいくつかの小河川でも記録された。
- ❖ 文献 272. 岩手県盛岡地方振興局土木部岩手出張所・株式会社ネクサス（2008）、273. 吉富博之ほか（2004）、274. 国土交通省東北整備局（2007）

（吉田 勝一）

留意

ハヤチネベニコメツキ

鞘翅目（コウチュウ目） コメツキムシ科

Denticollis yasumii Ôhira

環境省 なし

- ❖ 形態 体長 7.5mm 内外、体色は一般に黄褐色であるが雌は黒い。触角、頭部の大部分、前胸背の基縁、小楯板、上翅会合部、第 2 および第 6～10 間室などは暗褐色を呈す。頭の両眼間は三角形にくぼむ。触角は長く、少なくとも先端 4 節は前胸基縁を超える。前胸背板はほぼ四角形で基部において最も幅広い。後角は短く、後側方に突出し、隆起線を欠く。
- ❖ 分布の概要 早池峰山のみで確認されている。国内では本州の東北地方（青森県、岩手県、宮城県）に分布する。
- ❖ 生息状況 早池峰山ではコバイケイソウの花上や登山道の石の上等に見られるが、今回の調査では確認できなかった。青森県では雌個体が登山道沿いの石下から発見されたという。
- ❖ 脅威 亜高山帯～高山帯における植生破壊あるいは新規道路開設などの環境改変。
- ❖ 特記事項 本県産の標本で記載された東北地方固有種。
- ❖ 文献 275. Ôhira H (1993)、276. 高橋泰美（1989）、277. 尾崎俊寛（1995）、278. 鈴木互（1998）

（伊達 功）

留意

イワテミヤマヒサゴメツキ

鞘翅目（コウチュウ目） コメツキムシ科

Homotechnes motschulskyi iwatensis (Ôhira)

環境省 なし

- ❖ 形態 体長 8.5～9 mm。他の亜種に比べやや小型でずんぐりした体型である。全体黒色で光沢があり、触角、脚、体下面は暗褐色、体毛は褐色である。前胸背は台形で長さとは幅はほぼ等しく後角部で最大幅となる。背面は膨隆し点刻は小型で一様に分布する。上翅の条線は深く刻印される。
- ❖ 分布の概要 北上山地を中心に比較的広く産す。ミヤマヒサゴメツキの種としての分布は本州および四国である。標記亜種は本県特産亜種。
- ❖ 生息状況 高山の石下や谷沿いのフキの葉上などで発見される。成虫の出現期は6～7月で比較的短い。成幼虫とも他の昆虫などを捕食して生活していると考えられる。場所により生息密度が比較的高いところも確認されている。
- ❖ 脅威 生息地の一つである高山帯山頂部の多くは開発・改変が制限されているで、さしあたっての脅威はない。しかし、それ以外の生息地では後翅が退化し移動性に乏しいため、森林伐採、大規模な道路の開設、改良などが脅威となる。
- ❖ 特記事項 前回掲載のイワテヒサゴメツキは和名を表記のように変更した。本種は分布地ごとに亜種として記載されてきた経緯があるが、再検討が必要である。
- ❖ 文献 279. Ohira H (1968)、280. 大平仁夫 (1991)、281. 大平仁夫 (1995)、282. 大平仁夫・千葉武勝 (1997)、283. 尾崎俊寛ほか (2006)

(伊達 功)

留意

チビヒサゴメツキ

鞘翅目（コウチュウ目） コメツキムシ科

Hypnoidus nitidus (Fleutiaux)

環境省 なし

- ❖ 形態 体長 5～5.5mm、体色は黒～黒褐色でしばしば前胸背前縁、小楯板、上翅は赤味を帯びる。背面は青銅色の鈍い光沢を有する。前胸背板は強く膨隆し、後角は後方へ突出する。上翅条溝は深く刻印され、間室は平滑～強い横皺状、後翅は退化する。
- ❖ 分布の概要 八幡平および早池峰山の高山帯だけで確認されている。国内では北海道、本州の東北地方に分布する。東北地方の個体群は亜種 *rivalis* として区別されている。
- ❖ 生息状況 高山性コメツキムシの代表的な種である。高山の石下に生息し、他の昆虫などを捕食して生活していると思われる。後翅が退化しているため移動性に欠ける。今回の調査でも早池峰山の高山帯で確認された。
- ❖ 脅威 生息地の多くは法的保護が図られているが、踏み荒らし等による生息地の破壊が脅威である。
- ❖ 文献 283. 尾崎俊寛ほか (2006)、284. 千葉武勝・大平仁夫 (1991)、285. 大平仁夫・中村七三 (1970)

(伊達 功)

留意

クロツヤシモフリコメツキ

鞘翅目（コウチュウ目） コメツキムシ科

Actenicerus (Acnitereus) athoides (Kishii)

環境省 なし

- ❖ 形態 体長 15mm 内外。体色は黒色で暗い真鍮色の光沢をおび、やや扁平である。前胸背板の正中部に縦溝はない。同属の他種とは異なり、上翅に淡色毛によるまだら状の斑紋を有しない。
- ❖ 分布の概要 栗駒山、八幡平、岩手山周辺の湿原で確認されている。北上高地からは未知。本州東北地方の特産種。
- ❖ 生息状況 標高の高い山地湿原にのみ生息している。生息地における密度は比較的高い。生息地の大部分は国立公園または国定公園内にある。近年の報告はないが、安比高原等では湿原に多いことが観察されている。亜高山～高山帯の湿性草原の指標昆虫。
- ❖ 脅威 登山者の立ち入り等による湿原の乾燥化。
- ❖ 特記事項 前回登載のクロシモフリコメツキは和名を表記のように変更した。
- ❖ 文献 285. 大平仁夫・中村七三（1970）、286. 千葉武勝・奥俊夫（1987）、287. 大平仁夫・伊達功（1997）

（伊達 功）

留意

ツماغロヒラタコメツキ

鞘翅目（コウチュウ目） コメツキムシ科

Anostirus castaneus japonicus Kishii & Ôhira

環境省 なし

- ❖ 形態 体長 11～15mm。黒色で上翅は翅端を除き鮮黄～橙黄色。頭胸背は密に点刻する。触角は雄では櫛歯状、雌では鋸歯状。
- ❖ 分布の概要 盛岡市、滝沢市、葛巻町、宮古市川井等、中央内陸部の記録が多いが、その後奥州市胆沢区、西和賀町の湯田ダムや二戸市浄法寺でも確認された。国内では北海道および本州北部に分布。
- ❖ 生息状況 低山地の落葉広葉樹林が主な生息地で、春の晴れた日に飛翔個体が観察される。生息密度は低い。今回の調査では宮古市川井で確認された。寒地性コメツキムシの代表的な種類で、明るい落葉広葉樹林の指標種。
- ❖ 脅威 森林伐採、特に各種自然エネルギー関連施設建設に伴う森林の消失。
- ❖ 特記事項 確認個体はメスがほとんどで、オスは非常に稀。
- ❖ 文献 119. 二戸市（2020）、246. 河川水辺の国勢調査のための生物リスト、285. 大平仁夫・中村七三（1970）、287. 大平仁夫・伊達功（1997）、288. 平野俊秀（1980）

（伊達 功）

留意

ツماغロコメツキ

鞘翅目（コウチュウ目） コメツキムシ科

Ampedus (Miwaelater) niponicus (Lewis)

環境省 なし

- ❖ 形 態 体長 10.5～14.5mm。体色は黒く、前胸は虹色光沢がある。上翅は鮮やかな黄色で翅端部が広く黒い。頭胸背は強く点刻される。上翅は粗点刻列があり、間室には粗点刻を散布する。
- ❖ 分布の概要 西和賀町沢内と宮古市川井で記録されているのみだが、北上市和賀町、奥州市胆沢区、宮古市新里からも生息情報が得られた。国内では本州、四国、九州に分布。日本固有種。
- ❖ 生息状況 成虫越冬し、春先にヤナギやカエデ類の花に飛来する。幼虫はカツラなどの腐朽木中に生息しているものと思われる。生息個体数は著しく少ない。近年の報告はないが、宮古市川井での生息情報等がある。原生林の指標種。
- ❖ 脅 威 森林伐採、特に各種自然エネルギー関連施設建設に伴う森林の消失。
- ❖ 文 献 285. 大平仁夫・中村七三（1970）、289. 平野俊秀（1979）

（伊達 功）

留意

クロサワツヤケシコメツキ

鞘翅目（コウチュウ目） コメツキムシ科

Megapenthes kurosawai W. Suzuki

環境省 なし

- ❖ 形 態 体長 9～11mm。体型は細長くやや扁平、黒色であるが、雌の前胸は前縁を除き赤色である。頭胸背は粗密に点刻され光沢がない。上翅は点刻された細い条溝があり、間室に小点刻を横皺状に具える。
- ❖ 分布の概要 二戸市稲庭岳や早池峰山周辺で確認されている。国内では本州のみに分布。日本固有種。
- ❖ 生息状況 成虫は7月頃出現し、シシウドなどの花に集まる。個体数は一般に少ないが、稲庭岳ではタカネミズキの花に多く見られた。ブナ林などの広葉樹林の指標種。
- ❖ 脅 威 森林伐採、特に各種自然エネルギー関連施設建設に伴う森林の消失。
- ❖ 文 献 119. 二戸市（2020）、287. 大平仁夫・伊達功（1997）、290. Suzuki W（1986）、291. 千葉武勝（1991）

（伊達 功）

留意

ヒメボタル

鞘翅目（コウチュウ目） ホタル科

Luciola (Hotaria) parvula (Kiesenwetter)

環境省 なし

- ❖ 形 態 体長 6～9 mm。頭部と腹部は黒色、前胸は淡赤褐色で中央の大紋は暗色である。雌は後翅が退化し飛翔できない。腹部後方は黄白色である。
- ❖ 分布の概要 奥羽山脈および北上高地に広く生息する。低山にも分布するが、個体数が多いのは比較的標高が高い山地である。国内では本州、四国、九州に分布。日本固有種。
- ❖ 生息状況 幼虫は陸生で、多湿な森林に生息する。成虫は7月に発生するが、近年発生時期は早くなっている。幼虫、成虫とも発光する。やや湿潤な森林の指標種。
- ❖ 脅 威 森林伐採、特に各種自然エネルギー関連施設建設に伴う森林の消失。
- ❖ 特記事項 二戸市、軽米町、九戸村にまたがる折爪岳の上部は特に発生量が多く、生息地の一部は2018年に岩手県の天然記念物に指定された。
- ❖ 文 献 74. 小野泰正ほか（1986）、119. 二戸市（2020）、292. 小野泰正（1978）、293. 林長閑（1982）

（伊達 功）

留意

ゲンジボタル

鞘翅目（コウチュウ目） ホタル科

Nipponoluciola cruciata (Motschulsky)

環境省 なし

- ❖ 形態 体長 12～18mm、黒色で暗色毛を装い、前胸は淡赤色、正中部には中央で広がる暗色の縦条があり、前縁は黒い。前胸背は密接して点刻され、正中部は浅くくぼみ、両側後半は広く平圧される。上翅は密に点刻され、各4条の縦隆線を具える。
- ❖ 分布の概要 県内各地の河川に広く生息が確認されている。国内では本州、四国、九州に分布する。
- ❖ 生息状況 幼虫は水質の良い河川に生息し、カワニナを食べて生活している。成虫は6月下旬～7月に出現し、雌成虫は水辺のコケなどに数百粒の卵を産む。孵化した幼虫は流水に入り、カワニナを食べて育つ。翌年の初夏までに7齢を経過して老熟した幼虫は、川岸の土手などに潜ってさなぎになり、川岸の土中に潜って蛹化する。
- ❖ 脅威 圃場整備に伴う土水路の改修等、生息環境の変化。水質の悪化や河川改修および他地域産の放飼による遺伝子攪乱。
- ❖ 文献 103. 奥昭夫 (2011)、119. 二戸市 (2020)、246. 河川水辺の国勢調査のための生物リスト、294. 岩手県 (1998)

(伊達 功)

留意

オオユミアシゴミムシダマシ

鞘翅目（コウチュウ目） ゴミムシダマシ科

Promethis insomnis (Lewis)

環境省 なし

- ❖ 形態 体長 27mm 内外。黒色の太い円筒形で光沢は弱い。頭部は小さく前胸はやや横長、胴は大きく長さは幅の2倍強、上翅の点刻列は浅く顕著な条溝はない。脚は細長く前脛節の先が弓状に曲がる。
- ❖ 分布の概要 奥羽山脈側に産す。国内では北海道、本州、九州に分布する。東北地方や北海道では比較的に目にする機会が多いが、西日本では極めて稀。
- ❖ 生息状況 ブナ林などの安定した広葉樹林に生息する。成虫は枯木や倒木に見られ、伐採後に急増することがある。西和賀町沢内の林道では生息個体数はかなり多かった。今回の調査では記録されなかったが、近年奥地ブナ林の新たな伐採はないため、他地域のブナ林にも広く生息するであろう。広葉樹林の指標種。
- ❖ 脅威 森林伐採、特に各種自然エネルギー関連施設建設に伴う森林の消失。
- ❖ 文献 100. 秋田勝巳・益木仁雄 (2016)、119. 二戸市 (2020)、166. 高橋泰美・菊池透 (1994)、211. 昆虫調査班 (1989)、

(伊達 功)

留意

モモブトハナカミキリ

鞘翅目（コウチュウ目） カミキリムシ科

Oedecnema gebleri Ganglbauer

環境省 なし

- ❖ 形態 体長 11～17mm。頭部は小さく著しく縦長、円錐状の前胸と共に黒色、橙褐色の上翅に左右5対の黒点紋がある。脚は黒色、雄の後腿節は太く脛節は強く曲がる。県内に紛らわしい種はない。
- ❖ 分布の概要 沿岸部を含む北上高地中～北部に広く分布するほか、奥羽山脈の八幡平市に分布する。国内では北海道には産地が多いが、本州では東北地方～中部地方に局所的に分布する。岩手県以外には少ない。
- ❖ 生息状況 県内の北上高地を代表する種。個体数も比較的多い。奥羽山脈では北部にのみ生息するが、個体数は少ない。今回の調査では、一戸町と盛岡市の北上高地で確認された。寄主植物は未知だが、天然林だけでなく二次林でも生息している。
- ❖ 脅威 森林伐採、特に各種自然エネルギー関連施設建設に伴う森林の消失。
- ❖ 文献 36. 榎原寛ほか（1997）、119. 二戸市（2020）、168. 伊達功（2013）

（伊達 功）

留意

ヒゲブトハナカミキリ

鞘翅目（コウチュウ目） カミキリムシ科

Pachypidonia bodemeyeri (Pic)

環境省 なし

- ❖ 形態 体長 11～21mm、円筒形で黒色、前方と縁辺、及び脚の一部は赤褐色をおびる。ハナカミキリ類の中では触角が太く短め、頭は比較的大きく、体型は頑強な感がある
- ❖ 分布の概要 宮古市（川井および新里地区）と山田町内陸部から記録されている。国内では北海道南部から本州、佐渡、四国、九州まで分布するが、かなり広く空白地帯がある。日本固有種。
- ❖ 生息状況 自然度の高い森林地帯に生息し、広葉樹の樹洞で生活する。生息環境は老木が多い広葉樹林に限られると推測される。県内では、樹洞のほか、ノリウツギ等の花からも得られている。
- ❖ 脅威 森林伐採、特に各種自然エネルギー関連施設建設に伴う森林の消失。
- ❖ 文献 35. 藤田宏ほか（2023）、36. 榎原寛ほか（1997）、168. 伊達功（2013）

（伊達 功）

留意

ベニバハナカミキリ

鞘翅目（コウチュウ目） カミキリムシ科

Paranaspia anaspoides (Bates)

環境省 なし

- ❖ 形態 体長 9～16mm。上翅以外はほぼ黒色。上翅は赤味をおびた鈍い褐色で、中央や末端はやや黒ずむ。県内に普通のアカハナカミキリなどと概型は似るが、前胸の後方は肩幅に近いほど広がる点が特異。
- ❖ 分布の概要 二戸市、八幡平市（松尾地区）、盛岡市、岩泉町、宮古市（川井および新里地区）、西和賀町沢内で記録されているほか、八幡平市（安代地区）からも生息情報が得られた。国内では北海道から九州に分布する。日本固有種。
- ❖ 生息状況 生息地は、市街近郊の社寺林から山間奥地の天然林に及んでいる。樹洞性が強く、樹種よりも樹洞の状態が生息の条件になっている。二戸市市街ではケヤキの老樹で、山地帯ではシナノキ等の樹洞で発生すると推測される。ノリウツギ等の花に飛来し、今回の調査でも岩泉町で確認された。老樹が存在する安定した広葉樹林の指標種。
- ❖ 脅威 森林伐採、特に各種自然エネルギー関連施設建設に伴う森林の消失。
- ❖ 文献 36. 榎原寛ほか（1997）、103. 奥昭夫（2011）、168. 伊達功（2013）

（伊達 功）

留意

イガブチヒゲハナカミキリ

鞘翅目（コウチュウ目） カミキリムシ科

Stictoleptura (Stictoleptura) igai (Tamanuki)

環境省 なし

- ❖ 形態 体長 18～25mm。触角は黒色で、数節の基部が黄白色。ブチヒゲハナカミキリに似るが、より大型で雄の後脛節は内側に大きく曲がり、雌の前胸背面は赤味をおびる。
- ❖ 分布の概要 宮古市川井と八幡平市（松尾地区及び安代地区）で記録されている。国内では本州、四国、九州に局地的に分布する。日本固有種。
- ❖ 生息状況 安比高原では、標高 1000m前後の針葉樹林帯の下限付近で複数の個体を得られている。八幡平でも 1 例の記録があり、標高は 1000mよりやや低い場所である。今回の調査では確認されなかったが、寄主となり得る針葉樹に大きな変化はなく、生息状況に変化はないと推測される。このほか早池峰山で 1970 年代に 1 例の記録があるが、その後の記録はない。
- ❖ 脅威 生息地は法的保護が図られた地域が広いが、周辺で地熱発電事業が進められている等、自然エネルギー関連施設建設に伴う森林の消失が懸念される。
- ❖ 文献 36. 榎原寛ほか（1997）、168. 伊達功（2013）

（伊達 功）

留意

ブチヒゲハナカミキリ

鞘翅目（コウチュウ目） カミキリムシ科

Stictoleptura variicornis tsuyukii Fujita

環境省 なし

- ❖ 形態 体長 15～22mm。触角は黒色で、数節の基部が黄白色。赤褐色の上翅は種々の程度に黒化することがある。イガブチヒゲハナカミキリに似るが、雄の後脛節の形状や雌の胸背の色彩が異なる。
- ❖ 分布の概要 宮古市、花巻市、遠野市から記録されているが、実際の生息地は狭い範囲である。国内産は、最近大陸産とは別亜種とされ、北海道から近畿地方北部に分布する。
- ❖ 生息状況 産地はいずれも早池峰山で、オオシラビソ等の針葉樹が寄主であることから、主たる生息域は針葉樹林帯と推測される。今回の調査期間中、比較的多い年もあったが、全く見られない年もあった。早池峰山では上部針葉樹帯の指標種である。
- ❖ 脅威 生息地は法的保護が図られているが、成虫の主要な食餌植物であるノリウツギが、ニホンジカに樹皮を食害されて枯死したり、衰弱して開花しない状態が多く見られ、生息環境悪化の一因になると考えられる。
- ❖ 文献 36. 榎原寛ほか（1997）、168. 伊達功（2013）、295. 露木茂雄ほか（1981）

（伊達 功）

留意

ヒゲシロホソコバネカミキリ

鞘翅目（コウチュウ目） カミキリムシ科

Necydalis (Necydalisca) odai Hayashi

環境省 なし

- ❖ 形態 体長 14～25mm。細長い円筒形で黒色、触角は体とほぼ等長、先端近い3節が黄白～褐黄色。上翅はごく短く、前方または大半が褐色をおび、半透明の後翅が長く露出する。脚には褐色部がある。
- ❖ 分布の概要 盛岡市、宮古市（川井および新里地区）、岩泉町、胆沢町、一関市、大船渡市から記録されている。北上高地が主たる産地で、奥羽山脈での記録は少ないが、今回の調査で雫石町から記録された。国内では北海道、本州、四国、九州に分布する。日本固有種。
- ❖ 生息状況 ミズナラの古い倒木や立ち枯れに発生する。かつて宮古市の山地ではかなりの個体数が採集されたが、他の産地では個体数は少ない。今回確認した個体は、空洞化したミズナラ倒木の内部に産卵中のメスであった。安定した広葉樹林の指標種。
- ❖ 脅威 森林伐採、特に各種自然エネルギー関連施設建設に伴う森林の消失。
- ❖ 文献 36. 榎原寛ほか（1997）、168. 伊達功（2013）

（伊達 功）

留意

クロヒラタカミキリ

鞘翅目（コウチュウ目） カミキリムシ科

Ropalopus (Prorrhopalopus) signaticollis ohmomoi
Fujita

環境省 準絶滅危惧

- ❖ 形態 体長 10～15mm 内外、和名のとおり全体が光沢の乏しい黒色で、体型は非常に扁平である。特徴的な種で間違えるような種はない。
- ❖ 分布の概要 久慈市、岩手町、盛岡市、宮古市、岩泉町の北上高地から記録がある。国内では中部地方以北に局地的に分布する。
- ❖ 生息状況 北上高地中北部に生息地が多く、個体数も比較的多い。コトラカミキリと同様な環境に生息するが、より個体数は多い。
- ❖ 脅威 森林伐採、特に各種自然エネルギー関連施設建設に伴う森林の消失。
- ❖ 特記事項 県内では比較的多いが、他地域での減少傾向等を踏まえ、新たに留意として掲載することとした。最近、日本産は大陸産の原亜種と別亜種として記載された。阿武隈山地等では前胸が朱色になる個体が混在するが、県内産は全身黒色。
- ❖ 文献 35. 藤田宏ほか（2023）、36. 榎原寛ほか（1997）、170. 伊達功（2002）

（伊達 功）

留意**トウホクトラカミキリ**

鞘翅目（コウチュウ目） カミキリムシ科

Chlorophorus tohokensis Hayashi

環境省 なし

- ❖ 形態 体長 7.5～11.5mm 内外、円筒形で淡灰色、暗色紋が広がる。同属のエグリトラカミキリや別属のホソトラカミキリに似るが、上翅端外郭が刺状にならないことや暗色紋の形状が異なる。
- ❖ 分布の概要 盛岡市、宮古市川井、岩泉町の北上高地から記録があり、奥羽山脈側では八幡平市で確認されている。国内では北海道と本州北部に分布するが、局所的である。
- ❖ 生息状況 早池峰山北麓が多産地として知られていたが、いずれの産地でも生息数は少ない。食樹のヤマブドウは各所に普通だが、本種は自然度の高い森林地帯で得られている。今回の調査では盛岡市、宮古市川井、岩泉町でノリウツギの花から採集された。
- ❖ 脅威 森林伐採、特に各種自然エネルギー関連施設建設に伴う森林の消失。
- ❖ 特記事項 複数の地点で確認され、安定して生息していることと推測されることから、C ランクから留意に変更した。
- ❖ 文献 36. 榎原寛ほか（1997）、168. 伊達功（2013）、170. 伊達功（2002）

（伊達 功）

留意**ミチノクケマダラカミキリ**

鞘翅目（コウチュウ目） カミキリムシ科

Agapanthia (Epopetes) daurica sakaii Hayashi

環境省 絶滅危惧Ⅱ類

- ❖ 形態 体長 14～18mm。円筒形で黒色、灰色の微毛で密に被われる。背面に混じる黄褐色毛は前胸背中央に縦線を、小楯板上に点紋を形成し、翅鞘には霜降り状の模様を現す。触角は灰白色で各節の先が黒い。
- ❖ 分布の概要 二戸市、一戸町、久慈市、普代村、八幡平市安代地区、葛巻町、岩泉町、岩手町、雫石町、盛岡市、宮古市、山田町、遠野市、花巻市、北上市、奥州市江刺区、一関市から記録されている。本亜種は本州の東北地方に分布するが、確実な産地はほぼ岩手県に限られる。原名亜種は極東大陸部と北海道に分布する。
- ❖ 生息状況 折爪岳では 2007 年に初めて確認されたが、現在は山頂付近や伐採跡地に多い。盛岡市でも、市街に隣接する緑地で見られるようになった。北上高地では中部に多産することが知られているが、近年は県北や県南でも新たな産地が見つかった。沿岸の記録は少なく、奥羽山脈の確実な記録は北部に限られる。産地ではハンゴンソウ等のキク科草本に少ない。
- ❖ 脅威 生息環境は路傍や伐採跡地、牧草地や採草地周辺等であるため、人為的影響を受けやすい。特に各種自然エネルギー関連施設建設に伴う森林や草地の消失が脅威となる。
- ❖ 特記事項 近年個体数が増えている折爪岳や種山高原周辺では、外来種オオハンゴンソウも寄主でとしている可能性がある。県内各地で産地や個体数増加が認められるため、C ランクから留意に変更した。
- ❖ 文献 36. 榎原寛ほか（1997）、103. 奥昭夫（2011）、119. 二戸市（2020）、168. 伊達功（2013）、170. 伊達功（2002）、296. 成瀬健一（2023）、297. 武田雅志（2001）

（伊達 功）

留意

ホンドアカガネカミキリ

鞘翅目（コウチュウ目） カミキリムシ科

Plectrura (Phlyctidola) metallica yoshihiro Takakuwa

環境省 なし

- ❖ 形態 体長 10mm 内外で暗赤褐色、体に厚みがあり卵形の胴は比較的小さく、丸みの強い短い体型が特徴。触角は体長をわずかに越え、盛り上がった上翅には小さな瘤状突起が散在する。
- ❖ 分布の概要 八幡平市、滝沢市、雫石町、盛岡市、宮古市川井、花巻市、一関市、大船渡市から記録がある。国内では本州に分布する。原名亜種は北海道、千島、サハリン、極東大陸部に産す。
- ❖ 生息状況 奥羽山脈の八幡平、岩手山、栗駒山、北上高地の早池峰山、五葉山等に生息し、高山帯の低木林から針葉樹林帯にかけて見られる。確認位置の下限は標高 1000m前後で、オオシラビソの生育下限付近である。今回の調査では、早池峰山と栗駒山の亜高山帯で確認された。亜高山帯樹林域の代表種。
- ❖ 脅威 生息域の多くは法的保護が図られているが、一部では森林伐採、特に各種自然エネルギー関連施設建設に伴う森林の消失が脅威である。
- ❖ 特記事項 広葉樹も寄主とするが、ブナ林以下の広葉樹林では確認されていない。
- ❖ 文献 36. 榎原寛ほか（1997）、168. 伊達功（2013）、170. 伊達功（2002）、

（伊達 功）

留意

コウホネネクイハムシ

鞘翅目（コウチュウ目） ハムシ科

Donacia (Donacia) ozensis Nakane

環境省 なし

- ❖ 形態 体長 7.5～10mm。体色は一般に緑青色で背面はやや紫色を帯びる。眼はよく突出し、前胸前角後方には隆起がある。触角第3節は第2節より少し長い。肢は一般に赤褐色を呈し、後腿節下面の端部に1大歯があり、それより基部にも1小棘がある。上翅は背部中央の前でやや横に凹み、点刻は粗大で、翅端はわずかに切断状である。
- ❖ 分布の概要 八幡平市西根町と金ケ崎町で確認されているほか、奥州市胆沢区、平泉町からも生息情報が得られた。国内では本州東北部に産し、西限は長野県。日本特産種。
- ❖ 生息状況 成虫は6～10月にかけてみられ、コウホネの葉を食べる。また、幼虫もコウホネの根を食べて生活をしている。したがって、生息地はコウホネの生育している池沼～湿原環境に限られる。生息地における個体数は少なくないが、湿地の乾燥化が進み、確認されなくなった産地もある。山地の池沼を含む湿原環境の指標種。
- ❖ 脅威 コウホネのみに依存しているため、生存基盤が脆弱であること。食草のコウホネも岩手県レッドデータブックでNTとされている。
- ❖ 文献 38. 高橋泰美（1992）、108. 木元新作・滝沢春雄（1994）

（伊達 功）

留意

ベニカメノコハムシ

鞘翅目（コウチュウ目） ハムシ科

Cassida murraea Linnaeus

環境省 なし

- ❖ 形態 体長 7.0～8.7mm、体色は背面では明赤褐色で、体下面、触角、肢などは黒色である。上翅背面には多数の明瞭な黒紋を装う。前胸背は弱い小点刻を装い、上翅は点刻列を具えるが、部分的に疎密がある。第2間室は後方会合線に沿いくぼむ。背面は明らかな微細刻印を有する。
- ❖ 分布の概要 奥羽山脈、北上山地とも広範囲に生息している。湿原の生息地は、八幡平市、雫石町、滝沢市、岩泉町等で確認された。盛岡市や金ヶ崎町では牧草地周辺に多い場所があった。二戸市、宮古市、住田町等では沢沿い等の湿潤地で確認されている。国内では本州に分布する。
- ❖ 生息状況 湿原のミズギクや溪流沿いのヤブタバコ等が食草。成虫で越冬し、6月ころから食草の葉裏に産卵する。幼虫は背面に糞塊を付けている。生息に適する広い湿原は少ないが、各地の林道沿いなどのヤブタバコ群落に生息し、生息密度が高い場合もある。
- ❖ 脅威 大規模な森林伐採やダム工事などの環境改変。小規模な人為的かく乱は食草の生育環境を維持し、本種の生存に有利に働く場合もあろう。しかし、住田町では道路改修により、大船渡市では太陽光発電施設建設により、本種が見られなくなった場所もある。
- ❖ 文献 135. 長谷川勉・佐竹邦彦（1995）、286. 千葉武勝・奥俊夫（1987）、298. 奥俊夫（2006）、299. 加藤武夫（1935）、301. 小林尚（1965）、302. 佐竹邦彦ほか（1996）

（伊達 功）

留意

オオルリハムシ

鞘翅目（コウチュウ目） ハムシ科

Chrysolina (Erythrochrysa) virgata (Motschulsky)

環境省 準絶滅危惧

- ❖ 形態 体長 9～15mm。本県の個体群は、色彩が緑～青藍色で、「ルリ色型」タイプとされる。頭部は小点刻を散布し、前頭横溝は中央でやや角ばる。前胸背は粗点刻を装い、両側に深い縦溝があり、粗大点刻を具える。
- ❖ 分布の概要 雫石町、西和賀町、花巻市、北上市、金ヶ崎町、奥州市の奥羽山脈が主たる生息地である。花巻市では豊沢ダム付近に多産地があり、奥州市では旧石淵ダム付近に多産地があったが、胆沢ダム建設に伴い環境は激変した。滝沢市でも情報があるが、現況は不明である。北上川以東の北上高地では記録がなく、奥羽山脈も雫石町より北部の記録がない。国内では本州、佐渡、九州に分布する。
- ❖ 生息状況 シロネ、ヒメシロネ、クルマバナなどシソ科植物を食草とし、これらの湿性植物の生育する湿原に生息している。自然度の高い湿原環境の指標種。
- ❖ 脅威 湿地の開発や周辺森林の伐採。
- ❖ 文献 19. 竹内誠一（1940）、41. 齋藤諭（2012）、109. 千葉武勝（2008）、164. 伊藤智・野中俊文（2003）、167. 佐竹邦彦（2007）、303. 小山真一郎ほか（1932）

（伊達 功）

留意

オオクラヒゲナガハムシ

鞘翅目（コウチュウ目） ハムシ科

Galerucella (Galerucella) ohkurai Kimoto & Takahashi

環境省 なし

- ❖ 形態 体長 5.3～6mm、頭部は黒色で頭楯は赤褐色である。前胸は横長な方形で側縁は丸められ、基縁はほとんど直線状、側部から基縁にかけてはやや大きい明瞭な点刻を装う。上翅は一般に黒色で側縁は広く平圧され、中央後で最大幅、表面は膨隆し粗大な点刻を密布する。体下面、触角、肢はほぼ黒い。
- ❖ 分布の概要 東北地方北部の早池峰山、栗駒山および白神山にのみ分布する。
- ❖ 生息状況 高山帯の草地環境に生息し、成幼虫ともナンブトウチソウ等の *Sanguisorba* 属の植物を食すという。成虫の出現期は6～7月である。今回の調査で、2020年の早池峰山では発生量が多く、山頂近くの低木林ではマルバシモツケ等の葉にも幼虫や食痕が多かった。早池峰山塊では、小田越～薬師岳の登山道沿いでも多く確認した。栗駒山でも低木林の広葉樹の葉上等で比較的多く確認された。
- ❖ 脅威 生息地はいずれも特別保護区に指定されているが、早池峰山ではニホンジカの増加による植生の変化が懸念される。
- ❖ 特記事項 早池峰山から採集された標本を基に新種記載された。なお、記載以前に同地から記録されたオゼタデハムシは本種のことである。
- ❖ 文献 304. Kimoto S (1992)、305. 吉岡邦二ほか (1966)、306. 雛倉正人・高橋泰美 (1995)、307. 鈴木亨純 (1998)

(伊達 功)

留意

ヤンカギアシゾウムシ

鞘翅目（コウチュウ目）ゾウムシ科

Bagous youngi O'Brien & Morimoto

環境省 なし

- ❖ 形態 体長 2.9～3.8mm、体は堅固で体形は幅広の楕円形。赤褐色で、吻は前胸より僅かに短い、メスでは長めである。各肢の脛節端の鉤状突起が長く内方へ伸びるのが、この仲間の和名の由来。
- ❖ 分布の概要 県内では奥州市胆沢区の休耕田で採集された。県北における調査では検出されなかったことから、県内における分布は限られると推測される。本州と沖縄に分布し、東北地方では宮城県から記録されている。
- ❖ 生息状況 水田や畑、休耕田が混在する農耕地で採集された。この仲間は湿地性で水生植物を食草としている。低湿地における環境指標種。
- ❖ 脅威 圃場整備等による湿地環境の消失。耕作放棄地の樹木の侵入等、植生の変化。
- ❖ 特記事項 記録が少ないことや湿地環境が減少していることから、新たに留意として記載した。
- ❖ 文献 308. O'Brien C. W. *et al.* (1994)、114. 佐藤隆志ほか (2016)

(伊達 功)

留意

ギンイチモンジセセリ

鱗翅目（チョウ目） セセリチョウ科

Leptalina unicolor (Bremer et Grey)

環境省 準絶滅危惧

- ❖ 形態 雌雄の色彩斑紋はあまり違いがない。前後翅表面はビロウド状の黒褐色で、前翅裏面は前縁から外縁にかけて黄褐色に縁とられた黒褐色、後翅の中央部に銀色の条紋がある。
- ❖ 分布の概要 県内各地に局所的に生息しているが、この十年ほどの間に個体数の減少がみられる。国内では北海道、本州、四国、九州に分布する。
- ❖ 生息状況 成虫の出現は6月上・下旬で年1回発生が多い。成虫は日当たりのいい草原を弱々しく飛んでいる。幼虫の食草はススキ科のほかいくつか知られている。産卵は食草の葉表になされ、幼虫は葉を筒状に閉じて巣を造りそこから出かけて摂食する。巣を造り変えながら成長した幼虫は巢内で越冬し翌春羽化する。
- ❖ 脅威 既知産地のススキ原はススキの需要がなくなって他に転用されたり、河川敷が護岸工事や草刈りで食草が消滅したりすること。
- ❖ 文献 7. 岩手虫の会編（1988）、50. 白水隆（2006）、309. 菊池恭司（2021）

（成瀬 健一）

留意

フジミドリシジミ

鱗翅目（チョウ目） シジミチョウ科

Sibataniaozephyrus fujisanus (Matsumura)

環境省 なし

- ❖ 形態 開張 35mm。雄の翅表は金属青色、前翅の外縁は黒色、後翅の外縁は幅広く黒色。裏面は青灰色、外縁に暗褐色の弧状紋列の数条の横帯がある。後翅内縁角は橙黄色で2個の黒紋がある。雌の翅表は黒褐色。
- ❖ 分布の概要 県内の山岳地帯で記録がある。国内では北海道、本州、四国、九州に分布。日本固有種。
- ❖ 生息状況 年1回7月中旬頃に成虫が発生し、雄は夕方樹上を飛び回っている、早朝は樹林の内部にいる。上昇気流に運ばれて高山の山頂部で見られることが多い。雌は幼虫の食樹であるブナの枝に産卵し、越冬して翌春に孵化した幼虫はブナの芽、葉を食べて成長し蛹化する。ブナ自然林の指標種。
- ❖ 脅威 食樹であるブナ、イヌブナの伐採が脅威になるが、現在は個体数の減少傾向にない。
- ❖ 特記事項 雄の翅表外縁の黒帯の中と裏面の黒帯に地理的変異があるので、本県産個体も維持される価値がある。
- ❖ 文献 50. 白水隆（2006）、310. 高橋泰美（1983）、311. 平野俊秀（2010）

（成瀬 健一）

留意

ゴマダラチョウ

鱗翅目（チョウ目） タテハチョウ科

Hestina persimilis (Westwood)

環境省 なし

- ❖ 形態 開張 70mm。翅の地色は黒色。少し緑色味の光沢がある。斑紋は白色、前翅で3列に斜めに並ぶ最外縁に小白紋列がある。後翅最外縁の小紋列は2列、それから基部にかけて2列の紋列がある基部中央のものは大形。内縁は白色。裏面は淡色で、白紋は表面とほぼ同じである。
- ❖ 分布の概要 産地は県内各地に散在している。国内では北海道、本州、四国、九州に分布する。
- ❖ 生息状況 成虫は年2回6～7月下旬、8月に発生し、クヌギ、コナラ、クリ等の樹液を吸収する。雌は幼虫の食樹であるエノキ・エゾエノキの葉に卵を2、3個並べて産みつける。幼虫は葉を食べて成長し、晩秋に幼虫は樹木から地上に降りて落ち葉の中で越冬して翌春に樹木に登って葉を食べてから蛹化する。県内では個体数が減少の傾向にある。雑木林の指標種。
- ❖ 脅威 幼虫の食樹であるエノキと成虫の吸液する樹木がそろっている雑木林や社寺林が減少すること。近年は同属のアカボシゴマダラも進入しており競合している県も有る
- ❖ 文献 7. 岩手虫の会編（1988）、50. 白水隆（2006）、312. 平野俊秀（2015）

（成瀬 健一）

留意

コジャノメ

鱗翅目（チョウ目） タテハチョウ科

Mycalesis francisca perdiccas Hewitson

環境省 なし

- ❖ 形態 開張 50mm。翅は黒褐色、数個の目玉模様がある。裏面は前後翅を通じて中央に淡紫灰色の帯状紋あり、その外側に数個の目玉模様がある。さらに外縁には2本の濃色帯がある。ヒメジャノメに似ているが翅の地色が濃いので区別できる。
- ❖ 分布の概要 県中部の岩手町と岩泉町が北限である。県南各地から記録があるが個体数は少ない。国内では本州、四国、九州に分布する。
- ❖ 生息状況 成虫の発生は年2回で松林の疎林内や林間に住み陽地に出てこない、樹液や落果から吸液しあまり花には来ない。幼虫の食草であるイネ科植物の葉裏に産卵する。幼虫は葉を摂食して成長し食草の根際近くや直下の地の落葉の下などで蛹化するらしいが確認された例は少ない。越冬は幼虫である。
- ❖ 脅威 北限種として生存条件の限界近くにあって、存続が不安定である。
- ❖ 特記事項 東洋区から旧北区に広い分布域をもっているが、本県の中央部が北限になっている。食草が県内北部に普遍的であっても北進できない要因や北限域の生態の解明などの課題がある。
- ❖ 文献 50. 白水隆（2006）、313. 成瀬健一（2022）、314. 平野俊秀（2017）

（成瀬 健一）

留意

ヒメコウモリ

鱗翅目（チョウ目） コウモリガ科

Thitarodes variabilis (Bremer)

環境省 なし

- ❖ 形態 開張 25mm 内外。翅形は前後翅ほぼ同じで灰黒色、前翅中央に白色紋列がある。
- ❖ 分布の概要 早池峰山のみで記録されている。国内では本州山地に希産する。
- ❖ 生息状況 寄主植物は未知。成虫は7月末に早池峰山山頂付近と中腹で数個体得られている。本科の蛾は薄暮活動性の種類が多いため、調査は不十分である。1987 年以降、生息が確認されていない。
- ❖ 脅威
- ❖ 文献 55. 土井信夫（2005）

（吉田 勝一）

留意

ウワミズヒメハマキ

鱗翅目（チョウ目） ハマキガ科

Olethreutes semicremana (Christoph)

環境省 なし

- ❖ 形態 開張 15mm 内外。静止状態では釣鐘形。前翅中央の広い淡橙黄色帯は鮮やかで、基部域は黒褐色、外縁の黒褐色部は中ほどから翅頂に向かって急に狭まる。体と後翅は灰褐色。
- ❖ 分布の概要 盛岡市と滝沢市に産す。国内では北海道と本州北部に分布する。
- ❖ 生息状況 寄主植物は不明。成虫は6月後半～7月に出現し、河原の伏流水のある場所や小流の縁に見られる。本種は極めて希少とされていたが、盛岡市の雫石川下流に広範囲に分布することが判明した。
- ❖ 脅威 河川敷の地形および植生の改変。
- ❖ 特記事項 最近、本種の和名をウスキヒロオビヒメハマキと改称することが提起されている。
- ❖ 文献 315. 土井信夫ほか（1994）、316. 那須義次ほか（2013）

（吉田 勝一）

留意

モウセンゴケトリバ

鱗翅目（チョウ目） トリバガ科

Buckleria paludum (Zeller)

環境省 なし

- ❖ 形態 開張 12mm 内外。前翅は黒褐色の地色に白線がある。キンバネチビトリバと似るが、第3羽状翅内側に鱗粉の束がないことなどによって区別できる。
- ❖ 分布の概要 盛岡市と滝沢市に記録がある。国内では北海道および本州、九州に局地的に分布する。
- ❖ 生息状況 寄主植物はモウセンゴケ類。成虫は7月中旬～9月上旬に出現する。
- ❖ 脅威 モウセンゴケ湿地の破壊。
- ❖ 文献 55. 土井信夫（2005）、317. 岡野磨瑳郎・山根正気（1969）

（吉田 勝一）

留意

モリオカツトガ

鱗翅目（チョウ目） ツトガ科

Chrysoteuchia moriokensis (Okano)

環境省 準絶滅危惧

- ❖ 形態 開張 20～24mm。前翅は広く銀白色で、外縁の斑紋は橙黄色。同属のウスキバネツトガに似るが、前翅の色調で区別できる。
- ❖ 分布の概要 盛岡市、滝沢市、雫石町、花巻市東和町、北上市、一関市などに知られる。国内では北海道、本州に局地的に分布する。
- ❖ 生息状況 寄主植物は不明。成虫は6月中旬～7月中旬に出現する。小さい流れに沿った湿地や休耕田に発生する。最近にも盛岡市と滝沢市で生息が確認されている。
- ❖ 脅威 土地造成などによる湿地の衰退。
- ❖ 特記事項 盛岡市の湿地を模式産地として、*Crambus moriokensis* Okano の学名で記載された。
- ❖ 文献 55. 土井信夫（2005）、318. Okano M（1958）、319. 岡野磨瑳郎ほか（1976）

（吉田 勝一）

留意

フトシロスジツトガ

鱗翅目（チョウ目） ツトガ科

Crambus kuzakaiensis Okano

環境省 なし

- ❖ 形態 開張 22～25mm。翅全体が淡色で、前翅銀白色紋は幅広く先端が尖る。
- ❖ 分布の概要 宮古市、盛岡市、奥州市などから確認されている。国内では北海道南部と中部山地以北の本州に局地的に分布する。
- ❖ 生息状況 寄生植物は未知。成虫は7～8月に河川敷などに出現する。宮古市では生息地の湿地がほとんど消失し壊滅状態となっている。最近では2020年に奥州市水沢で記録された。
- ❖ 脅威 河川改修による生息環境の改変。
- ❖ 特記事項 宮古市区界を模式産地として記載された。
- ❖ 文献 55. 土井信夫（2005）、320. Okano M（1960）

（吉田 勝一）

留意

ホソエダツトガ

鱗翅目（チョウ目） ツトガ科

Crambus sibiricus Alphéraky

環境省 なし

- ❖ 形態 開張 24mm 内外。前翅は褐色の地に銀白色の線紋があり、線紋は細い枝を出す。近似種とは前翅外側の三角銀白色紋の形などで区別は比較的容易である。
- ❖ 分布の概要 早池峰山と焼石岳に産する。国内では北海道、本州（東北、関東北部、中部の高山帯）に局地的に分布する。
- ❖ 生息状況 寄生植物、幼生期は不明。早池峰山では成虫はハイマツ帯に8月頃やや普通にみられる。
- ❖ 脅威 踏圧による生息環境の悪化。
- ❖ 特記事項 早池峰山の特産とされ、*C. hayachinensis* Okano と命名されたが、現在は標記種の異名である。
- ❖ 文献 55. 土井信夫（2005）、321. Okano, M（1957）

（吉田 勝一）

留意

キボシミスジトガリバ

鱗翅目（チョウ目） カギバガ科

Achlya longipennis inokoi Inoue

環境省 なし

- ❖ 形態 開張 42mm 内外。前翅は灰緑の地色で中室に淡黄色の斑紋がある。
- ❖ 分布の概要 八幡平市、雫石町、盛岡市、宮古市、遠野市から記録されている。国内では北海道、本州（東北、関東、中部地方の山地）に分布する。
- ❖ 生息状況 寄主植物は未知。成虫は4月下旬～5月上旬に見られる。最近、遠野市からも確認された。
- ❖ 脅威 ダケカンバ林の破壊。
- ❖ 文献 55. 土井信夫（2005）、322. 佐竹邦彦ほか（1983）、323. 神吉隆行・小玉将史（2021）
（吉田 勝一）

留意

イブキスズメ

鱗翅目（チョウ目） スズメガ科

Hyles gallii (Rottemburg)

環境省 なし

- ❖ 形態 開張 70～78mm。前後翅の翅端から後縁にかけて淡黄色帯がある。アカオビスズメに似るが、前翅淡黄色帯ははるかに太い。
- ❖ 分布の概要 葛巻町、岩泉町、盛岡市からわずかな個体が確認されている。国内では北海道、本州、九州に局地的に分布する。
- ❖ 生息状況 寄主植物としてカワラマツバとヤナギランが知られているが、産地ではキバナカワラマツバが多く自生しており、これが寄主であると推測される。成虫の記録は6月、7月、9月である。
- ❖ 脅威 食草の生育する草原の衰退。
- ❖ 文献 55. 土井信夫（2005）、198. 斎藤修（1981）、324. 岡野磨瑛郎（1980）
（吉田 勝一）

留意

ウスジロドクガ

鱗翅目（チョウ目） ドクガ科

Calliteara virginea (Oberthür)

環境省 準絶滅危惧

- ❖ 形態 開張、雄は 50mm、雌は 65mm 内外。前翅は白地に褐色の横線があり、後翅内側は茶褐色である。
- ❖ 分布の概要 陸前高田市でのみ確認されている。国内では本州（東北地方や中部地方）の草原に分布する。本県が太平洋側の分布北限。
- ❖ 生息状況 寄主植物はハギ類。成虫は5～6月に出現する。1975年以降、生息は確認されていない。
- ❖ 脅威 生息環境である草原の衰退。
- ❖ 文献 55. 土井信夫（2005）、136. 環境庁編（1980）、325. 梅津一史・田中政行（1996）
（吉田 勝一）

留意

ジョウザンヒトリ

鱗翅目（チョウ目） ヒトリガ科

Pericallia matronula helena Dubatolov & Kishida

環境省 なし

- ❖ 形態 開張 75～80mm 程度。前翅は黒褐色に黄色紋。後翅は黄色に黒色紋。
- ❖ 分布の概要 八幡平市、雫石町、北上市の奥羽山系の山地で確認されている。国内では北海道と中部山地以北の本州に分布する。
- ❖ 生息状況 寄主植物は未知、国外ではヤナギランやタンポポ類などが知られている。成虫は7～8月に出現する。最近、北上市では複数年にわたり記録された。
- ❖ 脅威 多産する北上市の生息地の改変
- ❖ 文献 55. 土井信夫（2005）、144. 岡野磨瑛郎（1952）、196. 佐竹邦彦（1975）

（吉田 勝一）

留意

ミヤマキシタバ

鱗翅目（チョウ目） ヤガ科

Catocala ella ella Butler

環境省 準絶滅危惧

- ❖ 形態 開張 55mm 内外。後翅は黄色で、外側と内側の黒帯は翅外縁と平行して走る。
- ❖ 分布の概要 県内の低地から山地にかけてやや局地的に産す。国内では北海道と本州（中部地方以北）に分布する。
- ❖ 生息状況 寄主植物はハンノキ。成虫は7～8月に出現する。滝沢市の湿原に多産するが他の地域では少ない。最近では岩泉町、八幡平市、盛岡市、北上市で確認されている。
- ❖ 脅威 埋め立てや伐採などによるハンノキ林の消失。
- ❖ 文献 55. 土井信夫（2005）、326. 菊池信一・西垣勇夫（1968）

（吉田 勝一）

留意

ケンモンキシタバ

鱗翅目（チョウ目） ヤガ科

Catocala deuteronympha fujihirai Ishizuka

環境省 なし

- ❖ 形態 開張 55～60mm 程度。前翅基部は黒色で、中央部が広く白色帯となる。後翅黒帯は発達し、黄色部がほとんど目立たない。
- ❖ 分布の概要 県内の山間地に産す。国内では北海道、本州、九州に分布する。
- ❖ 生息状況 寄主植物はハルニレ。成虫は8～9月に出現する。一般に個体数は少ない。奥羽山脈側よりも北上高地に多い。最近では盛岡市と遠野市で確認されている。
- ❖ 脅威
- ❖ 文献 55. 土井信夫（2005）、327. 斎藤修（1968）

（吉田 勝一）

留意

コシロシタバ

鱗翅目（チョウ目） ヤガ科

Catocala actaea Felder & Rogenhofer

環境省 準絶滅危惧

- ❖ 形態 開張 52～55mm 程度。後翅中央部に白斑がある。この特徴はヒメシロシタバに似るが、二つに分割されている白色部がより接近していることなどにより区別できる。
- ❖ 分布の概要 雫石町、滝沢市、盛岡市、北上市、奥州市江刺などの内陸低地部に産す。国内では北海道、本州、四国、九州に分布する。
- ❖ 生息状況 寄主植物はクヌギ。成虫は7～8月に確認されている。沿岸部の生息状況は不明。
- ❖ 脅威 クヌギ・コナラ林の伐採。
- ❖ 文献 55. 土井信夫（2005）、326. 菊池信一・西垣勇夫（1968）、327. 斎藤修（1968）

（吉田 勝一）

留意

タンポキンウワバ

鱗翅目（チョウ目） ヤガ科

Autographa excelsa (Kretschmar)

環境省 なし

- ❖ 形態 開張 42～47mm。前翅は褐色で、中央に大きな金色紋がある。
- ❖ 分布の概要 葛巻町、岩泉町、盛岡市などの北上高地に産す。国内では北海道と中部山地以北の本州に分布する。
- ❖ 生息状況 寄主植物は未知。成虫は7～8月に出現する。早坂高原などの海拔 1000～1100m に広がる草原に生息し、産地では少ない。
- ❖ 脅威 高原草地の衰退
- ❖ 文献 55. 土井信夫（2005）、198. 斎藤修（1981）

（吉田 勝一）

留意

ガマヨトウ

鱗翅目（チョウ目） ヤガ科

Globia aerata (Butler)

環境省 絶滅危惧Ⅱ類

- ❖ 形態 開張 33mm 程度。前翅は赤みを帯びた黄褐色、ときに全体が暗色となる。キスジウスキヨトウに酷似するが、雄では触角が葉片状であること、雌では翅の色調と斑紋で区別できる。
- ❖ 分布の概要 久慈市、盛岡市、雫石町、一関市で確認された。国内では北海道、本州（東北地方から中部地方）に分布する。
- ❖ 生息状況 寄主植物はガマ。成虫は8～10月に出現する。低層湿原やダム周辺の湿地に生息している。県内の記録はこれまで一関市花泉町の1例のみであったが、1998年に一関市の北上川河川敷で確認されて以降、県中部以北の数ヶ所でも記録された。最近では2021年に雫石町で確認されている。
- ❖ 脅威 湿地環境の改変、消失
- ❖ 文献 130. 国土交通省東北地方整備局三陸国道事務所（2009）、328. 佐々木豊（1963）、329. 三井秀男（2022）

（吉田 勝一）

留意

ハイイロヨトウ

鱗翅目（チョウ目） ヤガ科

Parastichtis suspecta (Hübner)

環境省 なし

- ❖ 形態 開張 30mm 内外。前翅は灰褐色で外横線と内横線が二重となる。*Orthosia* 属などの種に似るが、斑紋を慎重に観察することで区別は可能である。
- ❖ 分布の概要 北上高地、盛岡市に産する。国内では北海道と本州（青森県、岩手県）に分布する。
- ❖ 生息状況 寄主植物は未知、国外ではハコヤナギ類やカンバ類を食するという。成虫は6月末から8月上旬に出現する。多くの産地は山地から高地草原であるが、盛岡市では河川敷に生息していることは注目される。
- ❖ 脅威 風力発電機の設置などによる草原環境の改変
- ❖ 特記事項 早池峰山麓が本州における最初の発見地である。
- ❖ 文献 55. 土井信夫（2005）、330. 佐竹邦彦（1975）、331. 盛岡市（1996）

（吉田 勝一）

留意

クロヨトウ

鱗翅目（チョウ目） ヤガ科

Polia mortua (Staudinger)

環境省 なし

- ❖ 形態 開張 45～53mm 程度。前翅は黒褐色、後翅はほぼ一様な薄い褐色。近似のシラホシヨトウとは、大きさが一回り小さく後翅の内側が外側よりもかなり明るいことなどで区別できる。
- ❖ 分布の概要 葛巻町、岩泉町、盛岡市などの北上高地のみに産する。国内では本州の中部地方以北の山地に分布する。
- ❖ 生息状況 寄主植物は未知。成虫は8～9月に出現する。局地的であるが、沿岸部から山地まで生息範囲は広く個体数も少なくない。
- ❖ 脅威 風力発電機の設置などによる生息地環境の改変
- ❖ 文献 55. 土井信夫（2005）、332. 佐竹邦彦（1970）

（吉田 勝一）

留意

ダイセツヤガ

鱗翅目（チョウ目） ヤガ科

Xestia (Pachnobia) albuncula (Eversmann)

環境省 なし

- ❖ 形態 開張 35mm 内外。前翅の地色と斑紋はやや赤みを帯びた黒褐色。後翅は明るい色調の個体が多い。
- ❖ 分布の概要 岩手山の高山帯からのみ確認されている。国内では、北海道および本州に生息する。
- ❖ 生息状況 寄主植物はガンコウラン、エゾノツガザクラ、アオノツガザクラ、コケモモ、クロマメノキである。成虫は8月に出現し、確認例は少ない。産地は国立公園の特別保護地域内にある。
- ❖ 脅威 踏圧による食草生育地のかく乱。
- ❖ 文献 136. 環境庁編（1980）、333. 斎藤修（1975）

（吉田 勝一）

留意

ネグロクサアブ

双翅目（ハエ目） クサアブ科

Coenomyia basalis Matsumura

環境省 情報不足

- ❖ 形態 体長は雄で 15mm 前後、雌で 22mm 前後。体色は雄では黒褐色、雌では赤褐色。頭部は小さい。胸部背面は丸味を帯びて著しく隆起する。小楯板には 1 対の刺状突起をもつ。
- ❖ 分布の概要 秋田県境の大白森および雫石町、盛岡市、宮古市、西和賀町から記録されている。国内では、北海道、本州、四国、九州に分布する。
- ❖ 生息状況 生態などについては不明。県内ではしばらく記録されていなかったが、2022 年に西和賀町沢内で確認され、今回の調査で滝沢市と盛岡市からも記録された。全国的にもこれまで生息情報は少ない。
- ❖ 脅威 森林伐採などによる生息地の変容。
- ❖ 文献 334. 佐竹邦彦（1996）、335. 千葉武勝（2014）

（吉田 勝一）

留意

ニセハイイロマルハナバチ

膜翅目（ハチ目） ミツバチ科

Bombus (Thoracobombus) pseudobaicalensis Vogt

環境省 なし

- ❖ 形態 中型。白黄色の短めの毛でおおわれ、腹部には 3 本の黒色が目立っている。雄の触角各節の一部にふくらみがある。ホンシュウハイイロマルハナバチと酷似する。
- ❖ 分布の概要 盛岡市玉山区の姫神山麓から記録されている。国内では北海道、本州の東北地方に分布する。
- ❖ 生息状況 自然状態に近い放牧地や畑地の周辺など日当たりいいところを好む。地中に営巣をするがコロニーは小さい。
- ❖ 脅威 採草地や放牧地の消失および放棄などによる改変。
- ❖ 文献 336. 中谷充・前田泰生（1979）、337. 中谷充（2014）

（吉田 勝一）

情報不足

ウスバカマキリ

蠼螂目（カマキリ目） カマキリ科

Mantis religiosa sinica Bazyluk

環境省 情報不足

- ❖ 形態 体長 50～66mm。中型のカマキリ。乳白色をおびた緑色だが、褐色型もいる。コカマキリに似るが、前脚基節基部の斑紋等により区別される。
- ❖ 分布の概要 県内では古い記録のみで、近年の報告がない。正式な報告ではないが、1999 年に宮古市老木で、2023 年に盛岡市三ツ割で採集されている。国内では北海道から南西諸島まで広く分布するが、局地的である。
- ❖ 生息状況 宮古市では閉伊川沿いの水田の畔で採集された。盛岡市では牧場跡の公園で採集された。いずれも草地と樹林地が混在する環境である。
- ❖ 脅威 耕作放棄や管理不足等による草地の衰退。
- ❖ 特記事項 今回新たに情報不足として追加した。
- ❖ 文献 338. 伊達功（2023.12.5）

（伊達 功）

情報不足

ナギサスズ

直翅目（バッタ目） コオロギ科

Caconemobius sazanami (Furukawa)

環境省 なし

- ❖ 形態 体長 9 mm 内外。暗褐色で光沢があり、両翅が完全に退化する。肢はやや淡色で斑紋がない。
- ❖ 分布の概要 釜石市でトラップによって得られた 1 例の記録があるのみ。全国各地の沿岸部に分布する。
- ❖ 生息状況 岩礁海岸に生息し、日中は礫間にひそみ夜間に活動する。成虫は晩夏から秋にかけて出現する。
- ❖ 脅威 岩礁海岸の改変。
- ❖ 文献 140. 奥俊夫ほか（1998）

（吉田 勝一）

情報不足

ヤマトマダラバッタ

直翅目（バッタ目） バッタ科

Epacromius japonicus (Shiraki)

環境省 なし

- ❖ 形態 体長 30～35mm。灰白色で頭と前胸の背面は褐色、側面に黒色や褐色の斑紋がある。紫灰色の前翅には暗色紋があり、後翅の基部は青味をおびる。
- ❖ 分布の概要 宮古市の河口付近から記録がある。国内では北海道、本州、四国、九州の沿岸部に分布する。
- ❖ 生息状況 成虫は晩夏から秋にかけて海岸の砂地に見られる。海浜性であるが、まれに内陸に生息する。近年、各地で減少が著しい。
- ❖ 脅威 海浜の環境改変。
- ❖ 特記事項 これまで登載のヤマトバッタはヤマトマダラバッタに和名を変更した。古い記録のみで調査が不十分であることから、B ランクから情報不足へ変更した。
- ❖ 文献 339. 山本弘（1956）

（吉田 勝一）

情報不足

アカハネバッタ

直翅目（バッタ目） バッタ科

Celes akitanus (Shiraki)

環境省 絶滅危惧ⅠA類

- ❖ 形態 体長 25～40mm。褐色で暗色紋は不鮮明。後翅は基部が紅色で先方は褐色である。
- ❖ 分布の概要 宮古市閉伊川下流域から 1955 年に 1 例の報告があるのみ。国内では本州の中部地方以北に局地的に分布する。
- ❖ 生息状況 国内での採集記録は 1986 年以降なかったが、近年、山形県と福島県を含む県外の多数の県から再発見されている。これらの生息環境は乾性の半自然草原である。
- ❖ 脅威 管理放棄などによる半自然草原の消滅。
- ❖ 特記事項 種の保存法に基づく国内希少野生動植物種。1 例の古い記録のみで、生息状況が全く不明であることから、A ランクから情報不足へ変更した。
- ❖ 文献 339. 山本弘（1956）

（吉田 勝一）

情報不足

キタカミメクラチビゴミムシ

鞘翅目（コウチュウ目） オサムシ科

Dracotrechus fontanus S. Uéno

環境省 なし

- ❖ 形態 体長 3.2～4.4mm。複眼は退化している。頭部は大きくやや方形。前胸は亜心臓形。上翅は卵形で前胸より明らかに広い。
- ❖ 分布の概要 岩泉町の龍泉洞を模式産地とし、久慈市から陸前高田市まで、北上高地に広く分布し、産地のほとんどは石灰洞である。真洞窟性のチビゴミムシがこれほど広い分布域を持つ例は、日本では他に知られていない。
- ❖ 生息状況 洞窟以外では早池峰山北東の小吉部沢で採集されている。
- ❖ 脅威 石灰岩の採掘。地下浅層にも生息するため、地形改変を伴う林道開設や砂防ダム工事等が影響すると考えられる。
- ❖ 特記事項 近年記載された種で生息状況が不明なため、新たに情報不足として追加した。
- ❖ 文献 340. Ueno S (2010)

(伊達 功)

情報不足

マヒルメクラチビゴミムシ

鞘翅目（コウチュウ目） オサムシ科

Dracotrechus meridianus S. Uéno

環境省 なし

- ❖ 形態 体長 3～4mm。複眼は退化している。形態と色彩はキタカミメクラチビゴミムシに似るが、頭部がより短く、前胸は側縁の狭まりは弱く基縁はより広い。
- ❖ 分布の概要 北上市の夏油温泉の個体をもとに記載された。他に真昼岳、蟻巣山、秋田県田沢湖北西の大仏岳から記録された。また、盛岡市の繋温泉で得られた個体は別亜種 (ssp. *thermarum*) として記載された。複眼の退化したチビゴミムシは奥羽山脈では本種のみで、この仲間としては生息域が広い。火山が多く自然洞窟が少ないため、種が分化できる条件に合わないと考えられている。
- ❖ 生息状況 原名亜種の記録地は標高 630～970m であるが、亜種 (ssp. *thermarum*) は標高 240m の低山で記録された。地下浅層に生息する。
- ❖ 脅威 地下浅層に生息するため、地形改変を伴う林道開設や砂防ダム工事等が影響すると考えられる。
- ❖ 特記事項 近年記載された種で生息状況が不明なため、新たに情報不足として追加した。
- ❖ 文献 340.1. Ueno S (2011)

(伊達 功)

情報不足

マヒルナガチビゴミムシ

鞘翅目（コウチュウ目） オサムシ科

Trechiana (Trechiana) meridianus S. Uéno

環境省 なし

- ❖ 形態 体長 6mm 内外。扁平で暗褐色、前胸は首状に後方へ細くなり、胴は卵形、後翅は退化して飛翔できない。形態や色彩が近似する種が多い。複眼は退化していない。
- ❖ 分布の概要 西和賀町の真昼岳と蟻巣山付近で発見された。奥羽山脈の固有種と考えられ、近い仲間は白神山地、太平山地、神室山地、北上高地に分布している。複眼が退化したマヒルメクラチビゴミムシとは同所的に分布している。
- ❖ 生息状況 成虫は標高 800～900m の山地の多湿な地面に埋没した石下から採集されている。*Trechiana* 属は地理的分化が著しいが、分布範囲等は不明である。
- ❖ 脅威 地下浅層に生息するため、地形改変を伴う林道開設や砂防ダム工事等が影響すると考えられる。
- ❖ 特記事項 東北地方北西部に分布する同属の種のうち、非火山性山地のみに分布する種の一部がマヒルナガチビゴミムシ亜群とされている。
- ❖ 文献 341. Ueno S (1994)

(伊達 功)

情報不足

オオクラナガチビゴミムシ

鞘翅目（コウチュウ目） オサムシ科

Trechiana (Trechiana) ohkurai S. Uéno

環境省 なし

- ❖ 形態 体長 6～7 mm。形態と色彩が似るマヒルナガチビゴミムシ亜群に属するが、体の後半部が特にオスで大きいこと、上翅第3条の第2孔点を欠くことで他種と区別できる。複眼は退化していない。
- ❖ 分布の概要 五葉山、住田町、遠野市で確認された。北上高地固有種と考えられる。
- ❖ 生息状況 林間の湧水地や高地低木林の石下から採集されたほか、少数ながら低地の洞穴からも検出されている。五葉山域以外に六角牛山麓でも得られたことから、分布域を知るためには調査範囲を広げる必要がある。
- ❖ 脅威 石灰岩等の採掘。地形改変を伴う林道開設や砂防ダム工事等が影響すると考えられる。
- ❖ 特記事項 イワキナガチビゴミムシ亜群の種が広く分布する北上高地の一部に、マヒルナガチビゴミムシ亜群の本種が局在することは、生物地理学的に興味深いとされている。記載以降の新たな知見はない。
- ❖ 文献 342. Ueno S (1996)

(伊達 功)

情報不足

オコックアトキリゴミムシ

鞘翅目（コウチュウ目） オサムシ科

Cymindis (Tarulus) vaporariorum (Linné)

環境省 なし

- ❖ 形態 体長 8 mm 内外。扁平で鈍い光沢のある黒色。頭部と前胸の点刻は粗大、前胸後部は強く細まる。胴は幅広く丸みのある長方形、上翅はやや褐色をおび条溝は明瞭。脚は褐色。
- ❖ 分布の概要 早池峰山から 1 個体が記録されたのみ。国内では北海道と本州の高地に分布する。
- ❖ 生息状況 高山の岩礫地に生息すること以外に生態は明らかでない。早池峰山に最も近い既産地は朝日連峰なので、県内産地は早池峰山に局限する可能性が高い。近年新たな知見は得られていない。
- ❖ 脅威 早池峰山は法的保護が図られている。
- ❖ 特記事項 本県からは異名キタアトキリゴミムシ（*Cymindis subarcticus* Kano）で記録されている。
- ❖ 文献 253. 中根猛彦（1968）

（伊達 功）

情報不足

ニッポンヨツボシゴミムシ

鞘翅目（コウチュウ目） オサムシ科

Adischissus japonicus (Andrewes)

環境省 なし

- ❖ 形態 体長 8～9 mm。黒色で頭は小さく、前胸背の外縁は黄褐色。胴は肩がやや張った卵形で、上翅の前後に各 1 対の黄褐色円紋があり条溝は明瞭。脚は赤褐色。
- ❖ 分布の概要 紫波町日詰で 1960 年代に 1 例の記録があるのみ。国内では本州、四国、九州に分布。
- ❖ 生息状況 温暖地を中心に分布し、東北地方では主に低地に産するが、秋田県では駒ヶ岳の標高 800 m 地点の記録がある。地表で生活し石下などから発見される。県南や沿岸の調査は不十分である。近年新たな知見は得られていない。
- ❖ 脅威 里地環境の変化。
- ❖ 文献 23. 笠原須磨生（1985）、85. 佐竹邦彦・笠原須磨生（1985）

（伊達 功）

情報不足

ニセモンキマメゲンゴロウ

鞘翅目（コウチュウ目） ゲンゴロウ科

Platambus convexus Okada

環境省 なし

- ❖ 形態 体長 7.8～8.9mm で、体型は長楕円形。前胸側縁上部と中央に横紋が有り、上翅側縁にもそれぞれ 4 個の黄紋がある。腹面は赤みを帯びた褐色。
- ❖ 分布の概要 県内で生息が確認されているのは花巻市石鳥谷町だけである。国内では、北海道・本州の数県で確認されているのみ。
- ❖ 生息状況 林の中の水路のような薄暗い環境に生息する。
- ❖ 脅威 生息地の林の伐採。水路が明るくなれば生息不可のようである。
- ❖ 特記事項 情報不足として新たに登録した。
- ❖ 文献 27. 三田村敏正ほか（2017）、159. 茅橋輝昭（2023）

（成瀬 健一）

情報不足

オオイチモンジシマゲンゴロウ

鞘翅目（コウチュウ目） ゲンゴロウ科

Hydaticus (Guignotites) conspersus Régimbart

環境省 絶滅危惧ⅠB類

- ❖ 形態 体長 14～17mm で、体型は卵型。前胸背は黄褐色。上翅は黒に黄褐色の斑紋と細い縦条が並ぶ。
- ❖ 分布の概要 生息が確認されたのは金ヶ崎町の1頭のみである。国内では、本州と沖縄地区の限られた地域に分布する。
- ❖ 生息状況 河川の上流部と池沼などに生息する。主に秋から冬に見られることが多い。
- ❖ 脅威 田の近くの溜池の取り壊しや鯉・ブラックバス・アメリカザリガニ・ウシガエル等の繁殖、農薬の流入など。
- ❖ 特記事項 情報不足として新たに登録した。
- ❖ 文献 343. 佐竹邦彦（2015）

（成瀬 健一）

情報不足

ヒラヤマコブハナカミキリ

鞘翅目（コウチュウ目） カミキリムシ科

Enoploderes (Pyrenoploderes) bicolor Ohbayashi

環境省 なし

- ❖ 形態 体長 9～13mm。やや平たい筒形、上翅が光沢のない赤褐色であるほかは灰褐色。頭部後方がエラ状に横へ張り出し、前胸の左右が瘤状に盛り上がる。形態が特異で県内に近似種はない。
- ❖ 分布の概要 石鳥谷町、奥州市胆沢区、宮古市川井から記録されている。国内では本州、四国、九州に産するが、空白地帯がかなりある。日本固有種。
- ❖ 生息状況 樹洞性が強く、成虫も樹洞で生活することが多いため、記録が少ないと推測される。これまで奥羽山脈の2ヶ所で知られるのみであったが、北上高地からも記録された。条件の良い樹洞があれば、スギ等の広汎な樹種を寄主とすることから、広い範囲に分布している可能性があるが、生息域や個体数の多少を推測するためには情報が不足している。前回の改定以降、新たな知見はない。
- ❖ 脅威 森林伐採、特に各種自然エネルギー関連施設建設に伴う森林の消失。
- ❖ 文献 36. 榎原寛ほか（1997）、168. 伊達功（2013）

（伊達 功）

情報不足

フサヒゲルリカミキリ

鞘翅目（コウチュウ目） カミキリムシ科

Agapanthia (Epopetes) japonica Kano

環境省 絶滅危惧ⅠA類

- ❖ 形態 体長 15～17mm。円筒形で剛毛に被われ一様に暗灰色、紫藍～緑藍色の金属光沢がある。橙褐色の触角は体より長く各節の端は黒色、第1及び3節端に房状の毛を密生する。色彩と触角の毛房が独特で、他種からの判別は容易である。
- ❖ 分布の概要 雫石町から記録されている。国内では北海道と本州で記録があるが、著しく減少し、現在確実に生息するのは岡山県のみとされる。東北地方では岩手県のみ。
- ❖ 生息状況 ユウスゲを寄主とする草地性の種。県内では1936年に仙岩峠で、倒木から1個体が採集されたのみ。確認地付近は森林地帯であり、他の生息地と異なる。
- ❖ 脅威 草地の環境改変。
- ❖ 特記事項 長く再発見されておらず、標本も現存しないため、本種を岩手県の動物相目録から除くことがあったが、形態が特異であり複数の標本確認者があることから、初記録は誤報ではないと判断される。
- ❖ 文献 36. 榎原寛ほか（1997）、344. 四戸秀一（1939）、345. 平野修一・樋渡宏一（1940）
(伊達 功)

情報不足

ヒメビロウドカミキリ

鞘翅目（コウチュウ目） カミキリムシ科

Acalolepta degener degener (Bates)

環境省 準絶滅危惧

- ❖ 形態 体長 8.5～12.0mm。ビロウド状の毛を密生し灰褐色、触角は体より著しく長い。県産の種では山林に普通なビロウドカミキリに似るが、はるかに小さい。
- ❖ 分布の概要 県内では宮古市新里地区のみ。国内では本州、九州に分布する。青森県や秋田県では主に日本海沿岸で記録されている。
- ❖ 生息状況 1962年に上記の場所で1個体が採集されているのみ。1970年代以降に試験研究機関が実施した牧野調査では検出されていない。食草のオトコヨモギが群生するような岩浜の調査が不十分である。
- ❖ 脅威 草地の放棄や別用途への転用による生息環境の悪化。
- ❖ 特記事項 県産の標本は県博に収蔵されている。
- ❖ 文献 36. 榎原寛ほか（1997）
(伊達 功)

情報不足

アシボソネクイハムシ

鞘翅目（コウチュウ目） ハムシ科

Donacia (Donaciomima) sparganii gracilipes Jacoby

環境省 なし

- ❖ 形態 体長 7～8.2mm、一般に緑銅色。触角、肢は全体銅黒色、上翅に顕著な横しわを装う。前胸背は横しわを密に装い、点刻や剛毛を欠く。
- ❖ 分布の概要 県内では八幡平の古い記録があるが、その後確認されていない。国内では北海道、本州に分布する。
- ❖ 生息状況 湖、池、水路、高層湿原の池塘など、やや水深のある場所に生育するミクリ群落に生息する。八幡平周辺での調査は行われているが、追加記録が得られていない。
- ❖ 脅威 生息地は国立公園の特別保護区に指定されている。
- ❖ 特記事項 伊達・千葉（2013）の追加記録に用いた県博収蔵の標本を精査したところ、ガガブタネクイハムシの誤同定であった（訂正の投稿準備中）。このため岡野による八幡平の記録が唯一となり、古い記録であるが、中條道夫博士の同定であり、信憑性は高い。
- ❖ 文献 144. 岡野磨瑳郎（1952）、346. 伊達功・千葉武勝（2013）

（伊達 功）

情報不足

チャバネホソミツギリゾウムシ

鞘翅目（コウチュウ目） ミツギリゾウムシ科

Cyphagogus iwatensis Morimoto

環境省 情報不足

- ❖ 形態 体長 5 mm 内外。細長い筒形で光沢があり、長い頭部と球状に太まった前胸後部が黒いほかは赤褐色、触角は短く太い。翅鞘は条溝が明瞭、前後端と中央近くは暗色。脚は短く後腿節の先半分が太い。
- ❖ 分布の概要 宮古市墓目およびその周辺で少数の個体が発見されている。記載以後の確実な記録として 1988 年宮古市川井での採集例がある。県外では福井県と京都府のみに産す。
- ❖ 生息状況 山地の広葉樹林で成虫が 5～7 月に倒木から採集された。同属にキクイムシ類の坑道に住む種があり、本種も同様と推測される。追加記録や新たな知見は得られていない。全国的に見ても、カシナガキクイムシの被害が蔓延しているにもかかわらず、ほとんど生息情報がない。
- ❖ 脅威 森林伐採、特に各種自然エネルギー関連施設建設に伴う森林の消失。
- ❖ 特記事項 宮古市墓目と黒森山が模式産地。
- ❖ 文献 347. Morimoto K（1976）、348. 環境省（2015）

（伊達 功）

情報不足

ニセシロモンクロヒメハマキ

鱗翅目（チョウ目） ハマキガ科

Epiblema macrorris Walsingham

環境省 なし

- ❖ 形態 開張 20mm 内外。翅は暗灰色で前翅頂部は黄褐色をおび、後縁に 2 本の細い白紋列がある。近似種のプライヤヒメハマキは黒色で前翅白紋が幅広い。
- ❖ 分布の概要 盛岡市玉山と宮古市川井の北上高地で記録された。国内では本州（岩手県）、四国（高知県）のみに分布する。
- ❖ 生息状況 寄主植物は未知。山間溪流沿いの草地に発生し、成虫は 6 月に出現する。1970 年代まで成虫が断続的に発見されたが、生息地が牧草地となった後は姿を消した。
- ❖ 脅威 生息環境の攪乱および消滅。
- ❖ 特記事項 長年記録がなく寄主植物なども不明なので、B ランクから情報不足へ変更した。
- ❖ 文献 349. 奥俊夫（1978）

（吉田 勝一）

情報不足

フタオレウスグロエダシヤク

鱗翅目（チョウ目） シヤクガ科

Biston thoracica (Oberthür)

環境省 なし

- ❖ 形態 開張 30～35mm。前後翅は黒褐色を帯び、黒い曲がった横線がある。オオシモフリエダシヤクに似るが、色調と翅形などで容易に区別できる。
- ❖ 分布の概要 二戸市、盛岡市、花巻市田瀬ダムで確認されている。全国各地に局地的に分布する。
- ❖ 生息状況 リンゴ、スズカケノキなどで飼育されている。市街地とその周辺部や山地で、6 月に少数の成虫が得られていた。1979 年以降、確実な記録はない。
- ❖ 文献 55. 土井信夫（2005）、351. 氏家武（1965）

（吉田 勝一）

情報不足

ツマグロヤエナミシヤク

鱗翅目（チョウ目） シヤクガ科

Rheumaptera inanata (Christoph)

環境省 なし

- ❖ 形態 開張 30mm 内外。前翅は明るい灰色で、前縁には灰黒色紋、頂部には大きな黒褐色紋がある。
- ❖ 分布の概要 早池峰山のみで確認されている。国内では本州、四国に局地的に稀産する。
- ❖ 生息状況 寄主植物は未知。成虫は 7～8 月に出現する。確認された場所は北側 5 合目付近と南側の河原坊であると推定される。
- ❖ 文献 55. 土井信夫（2005）、352. 岡野磨瑳郎（1978）

（吉田 勝一）

情報不足

スカシサン

鱗翅目（チョウ目） カイコガ科

Prismosticta hyalinata Butler

環境省 なし

- ❖ 形態 開張 28～30mm、雄雌差が大きい。雄の前翅は濃褐色で翅端近くにある透明紋が大きく、後翅には黄色の部分がある。雌はより翅色が明るく、透明紋がかなり小さい。
- ❖ 分布の概要 西和賀町湯田ダム、奥州市胆沢、大船渡市で成虫数個体が確認されたのみ。国内では本州、四国、九州に分布する。本県が太平洋側の分布北限。
- ❖ 生息状況 寄主植物はサワフタギとタンナサワフタギ。成虫は7～8月に出現する。
- ❖ 脅威 食樹の衰亡。
- ❖ 文献 55. 土井信夫（2005）、353. 山家敏雄（1993）

（吉田 勝一）

情報不足

マエアカヒトリ

鱗翅目（チョウ目） ヒトリガ科

Aloa lactinea (Cramer)

環境省 準絶滅危惧

- ❖ 形態 開張 52mm。翅全体は白。前翅前縁の鮮やかな赤が特徴である。
- ❖ 分布の概要 盛岡市で1例の記録があるのみ。国内では本州、四国、九州に分布する。本県が分布の北限。
- ❖ 生息状況 寄主植物はネギ、トウモロコシ、ダイズ、ミゾハギ。1951年に盛岡市で成虫1個体が採集されている。
- ❖ 文献 55. 土井信夫（2005）、354. 岡野磨瑳郎（1978）、355. 藤平暁（1999）

（吉田 勝一）

情報不足

ジョウザンケンモン

鱗翅目（チョウ目） ヤガ科

Acronicta (Hyboma) jozana (Matsumura)

環境省 なし

- ❖ 形態 開張 27～30mm。前翅は灰色。前翅の斑紋はサクラケンモンに似るが、剣状紋の発達が悪い。
- ❖ 分布の概要 盛岡市で1例の記録があるのみ。国内では北海道、本州（青森県から岐阜県まで）に稀産する。
- ❖ 生息状況 寄主植物は未知。1996年に盛岡市で成虫7個体が採集されている。
- ❖ 文献 55. 土井信夫（2005）

（吉田 勝一）

情報不足

ウスクモヨトウ

鱗翅目（チョウ目） ヤガ科

Pabulatrix pabulatricula (Brahm)

環境省 なし

- ❖ 形態 開張 30mm 内外。前翅は灰褐色、各斑紋は明瞭に現れる。
- ❖ 分布の概要 盛岡市で 1 例の記録があるのみ。国内では北海道、本州（青森県、岩手県、宮城県、山梨県）に分布する。本州での確認例は極めて少ない。
- ❖ 生息状況 寄主植物は未知、ヨーロッパではスマガヤ類を食するという。1996 年に盛岡市で成虫 3 個体が得られている。
- ❖ 文献 55. 土井信夫（2005）、356. 葛西充・佐藤博（1980）

（吉田 勝一）

情報不足

ヨスジノコメキリガ

鱗翅目（チョウ目） ヤガ科

Eupsilia quadrilinea (Leech)

環境省 なし

- ❖ 形態 開張 40mm 前後。前翅は黄褐色で外縁は強く波状を呈し赤褐色の 4 本の横線が並ぶ。ヨスジキリガに似るが、はるかに大きく外観も異なる。
- ❖ 分布の概要 大船渡市と宮古市で記録された。国内では本州、四国、九州に分布する。本県が分布の北限。
- ❖ 生息状況 サクラ類やシラカンバなどで飼育されている。成虫は秋に発生し、越冬個体は翌春にも見られる。上記の地域で、2001 年 4 月に数個体が得られたのみ。
- ❖ 文献 55. 土井信夫（2005）、331. 盛岡市（1996）

（吉田 勝一）

情報不足

エゾオオバコヤガ

鱗翅目（チョウ目） ヤガ科

Diarsia dahlia nana (Staudinger)

環境省 なし

- ❖ 形態 開張 33mm 程度。前翅は茶褐色。オオバコヤガに酷似するが、腎状紋の色合い、後翅が明るいこと、一回り小さいことなどで区別できる。
- ❖ 分布の概要 盛岡市で 1 例の記録があるのみ。国内では北海道の原野と本州（岩手県および中部地方）の山地草原に分布する。
- ❖ 生息状況 寄生植物は未知。上記の記録は東北地方唯一であるが、産地の環境から偶産ではないと判断される。
- ❖ 脅威 山地草原の衰亡。
- ❖ 文献 55. 土井信夫（2005）、331. 盛岡市（1996）

（吉田 勝一）

情報不足

オオシラホシヤガ

鱗翅目（チョウ目） ヤガ科

Eurois occulta (Linnaeus)

環境省 なし

- ❖ 形 態 開張 55mm 内外。前翅は褐色を帯びた灰色。斑紋は明瞭で外横線と環状紋は白い。
- ❖ 分布の概要 盛岡市、岩泉町早坂高原、一関市栗駒山で確認されている。国内では北海道と中部地方以北の本州に稀産する。
- ❖ 生 息 状 況 寄主植物は未知。成虫は 8～9 月に出現する。本県では他地域よりも多くの個体が確認されている。
- ❖ 文 献 55. 土井信夫（2005）、331. 盛岡市（1996）、357. 鳥倉英徳（1985）

（吉田 勝一）